

遺伝研30周年記念

— 創設の頃の思い出 —



昭和54年6月

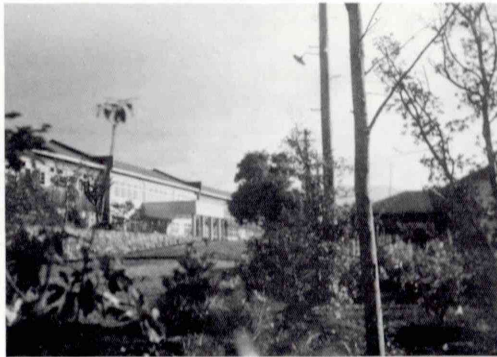
国立遺伝学研究所



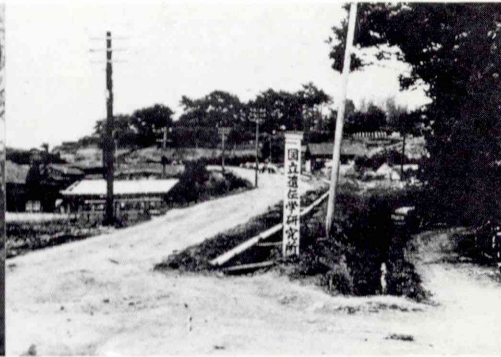
①現在の桑園の下の段（ネズミ飼育舎の北側，東から西へ写す。）



②現在の実験圃場（南から北へ，昭和23年秋）

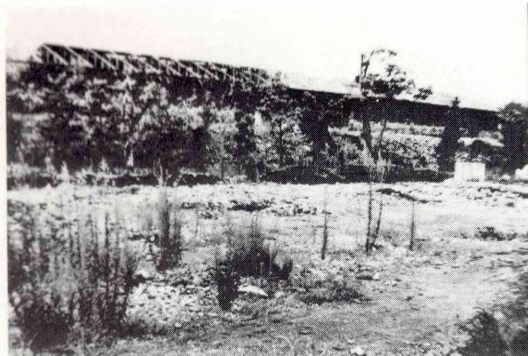


③創立当時の本館，ガラス窓の抜けているのが判る。

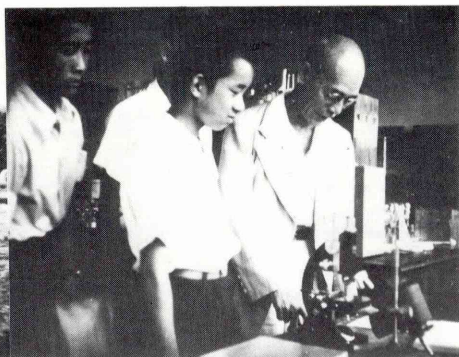


④遺伝研坂下から見た「五万坂」。ガス配管工事を行っていた。(昭和27年)

創立当時，昭和24年頃の研究所附近の風景



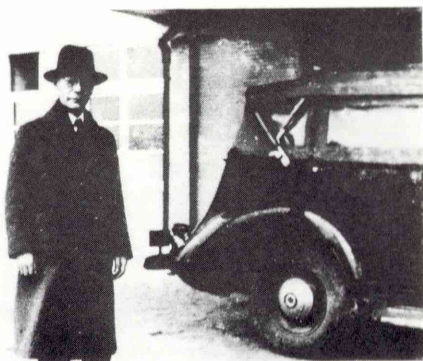
⑤ 創立当時残された中島飛行機の建物。
昭和24年に撤去された。この建物のあ
とに鶏舎、旧第1ねずみ飼育舎などが
建てられた。



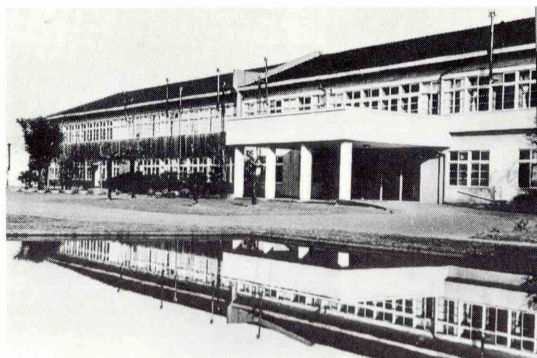
⑥ 義宮殿下行啓，右は小熊所長。
昭和25年8月10日



⑦ 全国種鶏遺伝研究会によって昭和25
年建てられた鶏舎。



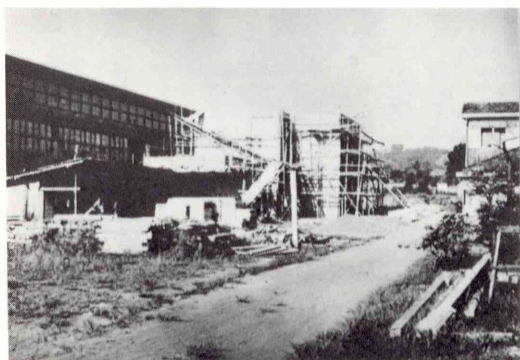
⑧ 初代所長小熊捍先生と宮内庁払い下げの1936年
型パッカード，本館玄関で昭和25年吉田俊秀撮
影。



⑨旧本館 昭和30年頃。



⑩昭和25年頃の実験圃場。左から宮沢明、林善三、近藤和夫、吉田嵩の各氏。



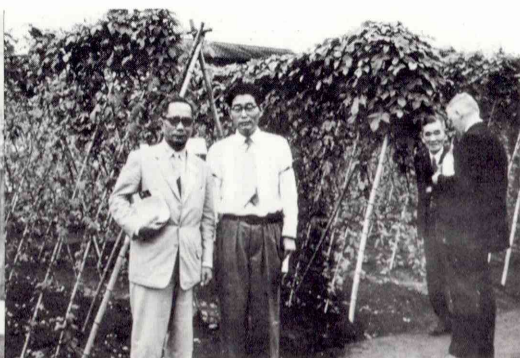
⑪旧本館のうらに昭和27年建築され、電子顕微鏡、X線の両実験室及び図書館として使われた新館、本館北側を西から東に向かって撮影、この静岡県の補助金による建物は鉄筋コンクリートで現在分子遺伝部(2階)とアイソトープ実験室及び電子顕微鏡室(1階)として使われている。右側の建物は中島飛行機工場の一部でその後撤去された。



⑫創立10周年記念撮影(昭和34年6月)。
前列左から(敬称略)田島弥太郎、松村清二、竹中要、木原均、辻田光雄、大島長造、岡彦一、2列目左から栗田義則、森脇和郎、木村資生、山田行雄、飯野徹雄、小川恕人、名和三郎、吉田俊秀、遠藤徹、坂口文吾、坂本寧男、稲垣栄一、3列目左から鬼丸喜代治、内海和彦、井山審也、宮沢明、近藤宗平、土川清、館岡亜緒、平俊文、藤井太郎、河原孝忠。



⑬ J. B. S. Haldane博士と同夫人
H. Spurway博士。



⑭ J. M. Capinpin, 古里和夫, 少し離れて三宅駿一,
R. E. Cleland.



⑮ あさがおを見る一行。左からM. J.
Sirks, 白竜均, H. F. Kushner, 木原
均, A. A. Imshenezki, Ph. Winge,
I. E. Glushchenko (敬称略)。



⑯ 研究所に集った一行。前列左から I. E.
Glushenko, K. S. Sukhov, 矢内原東大学
長, A. A. Imshenezki, 中列 T. W. Kim,
T. M. Lee, 小熊所長, 木原均, H. F. Kushner,
J. W. Boyes, 後列 J. G. Gall, C. R. Burnham,
B. P. Pal, M. J. Sirks, E. R. Sears など
(敬称略)。

国際遺伝学シンポジウム (1956年9月6日~10日, 東京で開催) の後, 出席者一同は箱根で一泊し9月11日研究所を訪れ, あさがおなどを見学した。同日午後, 一行は京都へ向った。

遺伝研30年

田 島 弥太郎*

国立遺伝学研究所は本年6月1日をもって創立30周年を迎える。10年ひと昔というが、すでに三昔も経過して、当時大学を卒業したばかりで入所した新進気鋭の研究者もやがて53,4才に達する。まして創立当時幹部として指導的役割を果たされた先生達や、設立のために努力していただいた官公庁の関係者は、すでに停年退職されて、当時の事情を知る人はごく少数になってしまった。創立当時三長老と言われた小熊捍所長、田中義鷹先生、駒井卓先生はすでになく、また当所の創設に、建設に精魂を傾けられた竹中要、松村清二両先生も他界されて、当時の理想や抱負をうかがう術もない。

今のうちに、できる限りの記録を集め、後の世代に残す努力をしないと、創立当時の理想や情勢、期待などは永久に忘れ去られてしまうであろう。また30年の経験を経た今こそ、所員一同思いを新にして、今後めざすべき方向を検討し、確立すべき時期ではないだろうか。

このような意味で、創立30年を記念して、関係各位に創立当時の思い出を執筆願ひ、記録として後世に残すことを計画した。温故知新とは昔も今も変らぬ名訓である。

当所が設立された昭和24年当時は、戦後の社会的不安も、ようやくおさまりかけ、経済再建、文化国家建設という大目標が、国民にも政府にも強く意識されるようになった時代である。この時にあたり、遺伝学の振興を通じて、

*国立遺伝学研究所所長

産業、食糧の危機を救い、民族資質の向上を期したいという強い要望が、わが国遺伝学者の間にみなぎった。そして国立遺伝学研究所設立の必要性を議会や政府に向けて力強く訴えた。この要望が政府を動かし、GHQを説得して、ついに当所設立が実現したものである。日本遺伝学会を中心として、われわれの先輩達がはらった労苦はなみ大抵のものではなかったであろう。

昭和15年の遺伝学会大会決議に始まったこの運動は一時戦争のために中断したが、終戦とともに再び燃え上り、昭和24年ようやく設立を見るに至ったもので、この当時の記録は当時文部省科学官として、この衝にあたられた宮山平八郎氏や国立遺伝学研究所設立事務を担当された竹中要氏によって詳しく書き残されているので、ここには繰り返さない。

ただここに是非とも書き残して置きたいことは、当時日本の遺伝学者が、こぞって当所の設立を熱望され、支援を惜しまなかったことである。当時はまだ日本学術会議は存在せず、日本学術振興会内に設けられていた第4特別委員会を舞台として、設立さるべき研究所の性格や構成についての議論が行われたわけである。

その結果新設の研究所は特定の大学に付置せず、文部省直轄研究所とすることが、最終的に決った。これは後に日本学術会議が共同利用研究所構想を打ち出したことと全く軌を一にする。

このことはまず第一に特定の大学の影響、いわゆる学閥の弊を排除し、広い範囲から能力本位で研究者を集められるという点で大きなメリットであった。しかし直轄研には大学と離れてそれなりに制度上の制約があり、後にさまざまな支障を生むことになったことも事実である。特に後継者の養成という点では大きな矛盾をかかえた。しかし、研究所の体制として新例を開いたもので、画期的な構想であった。

遺伝研設立の第二の特色は、互いに専門分野を異にする研究者達が協力して新しい問題に取り組める体制を整えたことである。遺伝学の進歩と分化は

いちじるしく、同じ遺伝学者と言っても専門が異るとまるで事情がわからない。また物理学や化学の知識なしでは取組んで行けない問題が多々ある。

「遺伝学は自然科学界においては原子物理学とならんだ若い学問でありまして、しかも短期間のうちに驚くべき進歩をとげた学問であります。その上扱うものが複雑なる生活現象であるので、その学問究明には、単なる生物学的方法の他に、数学、物理学および化学の方面から歩調を併せて行くことが、絶対不可欠となってきたのであります。したがってこれら自然科学における知能が一堂に集められれば、その総合された中心に遺伝現象を置くことによって、恐らく飛躍的に見事な成績が挙げられると信じます。」創立5周年記念式における祝辞の中で、小熊所長はこう語られている。この考え方は後に当所の人事に着々と反映された。

ところで研究所の人事であるが、研究第1部長に田中義麿先生（九大名誉教授）、研究第2部長は小熊捍所長（北大名誉教授）が兼任、研究第3部長に駒井卓先生（京大名誉教授）を配置されるという超弩級の編成で、ほかに兼職研究員として京大教授木原均先生、東大教授篠遠喜人先生、北大教授牧野佐二郎先生を擁して、当時の日本におけるベストメンバーを網羅する陣容であった。木原先生（創立25周年記念誌）によると、第4特別委員会時代に、もし遺伝研が必要とあれば、委員は誰も現職を捨てて遺伝研に行くという約束をしていたとの事である。

このメンバーに配する第二陣は竹中要、酒井寛一、辻田光雄、古里和夫（いずれも室長）という陣容であった。また当時の研究員には遠藤徹、木村資生、宮沢明諸氏の名が見える。最初の4年間は3研究部門に据え置かれたが、この間に研究室を増設して、林孝三、吉田俊秀、松村清二の諸氏が参加した。第5年目生化学、第6年目応用、第7年目には変異遺伝部の設置が認められて、しだいに部門も充実を見るようになった。

ここで創立の大任を果たされた小熊所長が退任され、昭和30年10月1日木

原均先生が第2代所長に就任された。次いで田中、駒井両部長が翌年11月退任され、そのあとの部長に筆者と大島長造博士とが任命されたわけである。筆者の発令は31年12月、大島部長は半年程遅れて32年5月であった。三長老の退職によって遺伝研は創設期から第二期に入った。

この頃当所では新らしい体制作りのために部室の編成替えを頻繁に行った。後に文化勲章に輝く木村資生博士などは最初は研究第2部（細胞遺伝）の小熊研究室、次いで生理遺伝部第3研究室（酒井）に移り、室長に昇進して形質遺伝部第2研究室長、さらに人類遺伝部第2研究室長、昭和39年集団遺伝部の新設と共に部長に就任されるまで、実に目ぐるましく所属が変わっている。この間木村博士の研究は終止一貫集団遺伝学の理論の研究を続けられた訳であるが、所属は所内の体制整備上の都合から転々としたわけである。このことから窺われるように、当時はよりよい体制作りのために管理者も責任者も柔軟に対応した。しかしその後はしだいに動きがにぶくなり、柔軟性を喪失してきたように思われる。このことは一種の老化症状とも見られるのではないだろうか。

二世代の先陣をつとめた筆者はすでに第一線を離れ、大島長造博士もまた本年3月停年退職された。遺伝研もいよいよ三世代に入ったわけである。

次に記しておきたいのは創設期の指導者達の目がひろく世界に向って開かれていたことである。小熊初代所長は言うまでもなく、駒井卓先生は若い研究者を海外留学に送り出す努力を惜しまれなかったし、木原均先生は海外から多くのすぐれた学者を招へいすることに格別な情熱を傾けられた。このため著名な学者が相ついで三島を訪ねられた。

このようなことからロックフェラー財団から、イネの研究、放射線遺伝の研究、人類遺伝の研究などに相ついで多額の研究費が援助された。当時まだ国の経済事情が思わしくない時代に、この援助が研究推進上大きな力となった。このことは30年の歴史の中でも特筆に値する。

本原所長が昭和44年3月退任された後、森脇大五郎博士を第3代所長に迎えた。先生は爾来6年間当所発展のために文字通り精励されたが、最も苦心されたのは古典遺伝学に根をおろした当所の研究陣を近代遺伝学の流れの中でどのように性格づけて行くかという点にあったと思う。遺伝学の全分野にわたって総合的な発展をはかろうと言うのが先生のお考えであった。10研究部門を完成された上に遺伝実験生物保存研究施設を加えられ、また構内諸設備にも細かく配慮されて今日見られるような遺伝研を完成された。

このようにして当所は多くの人の善意と支持によって順調な発展をとげ、今日では堂々たる研究所に成長した。しかし相つぐ行政整理による定員削減のため既に10数名の定員を吐き出し、何年たっても定数が100名の框を越せない。人数の多いことが必ずしも研究所の価値を決めるものではないが、部門あたりの研究者数が少なくでは思うように研究成果をあげることができないことは言うまでもない。定員削減によってあいた大穴を何としてでもうめたいという念願は、研究体制整備問題と共に、昼も夜も筆者の脳裏を離れる時がない。

それはともかく、当所が日本遺伝学会の大きな期待をもって創設されて30年を経過した。その間文部省を始めとする官公庁の多数の関係者から熱誠あふれる御支援を得て今日見るような姿に発展した。星移り、人変って、今日では創立当時の関係者の抱負や願望の詳細を知る人は少い。この機会に改めて創立当時の苦心の程をしのび、先輩諸氏に感謝を捧げたい。さらにわれら一同心を新にして、今後一層の努力をここに誓いたいと思う。

目 次

序文 田島弥太郎：遺伝研30年……………(1)

I 研究所創設の思い出

1. 茅誠司：国立遺伝学研究所の設立に関連して…………… 1
2. 岡野澄：回顧随想…………… 5
3. 宮山平八郎：国立遺伝学研究所「設立残念記」から「設立にいたるまで」… 9
4. 塚本盛平：追憶……………14
5. 小出正吾：地元市民の回想記……………18
6. 滝野清之助：遺伝学研究所と私・遺伝学研究所の誕生にまつわる裏話…………22
7. 木原均：遺伝研の敷地……………30
8. 故竹中要：研究所ができた頃の思い出……………33
9. 古里和夫：遺伝研創立の頃の思い出……………39
10. 篠遠喜人：遺伝研のできた頃……………44
11. 増井清：忘れ得ぬ思い出……………47
12. 山下孝介：国立遺伝学研究所創設の頃の思い出……………49

II 研究活動の始まり

13. 木村資生：遺伝研創設の頃と駒井卓先生の思い出……………52
14. 吉田俊秀：赴任の頃一特に小熊先生・竹中先生のことなど……………67
15. 酒井寛一：草創のころのはなし……………72
16. 林孝三：三島の頃の思い出……………75
17. 後藤寛治：創立当時の思い出…………… 79
18. 加地早苗：創立30周年に思う…………… 82
19. 大垣昌弘：遺伝研初期の頃の思い出…………… 85
20. 鬼丸喜美治：九州分室から三島へ…………… 88

III 建設と運営

21. 田中正雄：専売公社三島分場とタバコ委託研究についての思い出… 93
22. 中村竹：全国種鶏遺伝研究会設立当初の記録…………… 97
23. 吉川藤一：回想雑感—忘れられない人々のこと…………… 104
24. 岡彦一：ロックフェラー財団の援助と稲の研究…………… 109
25. 森脇大五郎：6年間の思い出…………… 114

IV 環境を守る

26. 辻田光雄：東中学校の工場転換騒動記…………… 118
27. 小西政三：国立遺伝学研究所の創立30周年を祝う…………… 123
28. 長谷川泰三：思い出の記…………… 126

V 心に残る思い出

29. 松村美興子：思いうかぶことなど…………… 132
30. 宮内千枝：創立時代の研究所と私…………… 136
31. 門脇淳三：徒然の記…………… 139
32. 杉生純義：10年間の思い出…………… 141
33. 丸岡秀雄：三等運転部長の思い出…………… 145
34. 土川清：ねずみと三毛猫…………… 149
35. 坂口文吾：遺伝研発足当初の思い出…………… 152
36. S.S.Rajan：遺伝学者のメッカ，N.I.G. …… 154
37. J.F.Crow：三島での1957年の夏…………… 160
38. 下島儀貞：敷地の選定とその後のこと…………… 166

VI 職員名簿（現職員と旧職員）…………… 170

I. 研究所創設の思い出

1. 国立遺伝学研究所の設立に関係して

茅 誠 司*

昭和23年8月31日に私は東京大学教授と併任で文部省の科学教育局長に任命された。これは当時の片山内閣の森戸辰男文部大臣から学術研究会議会長の亀山直人氏に科学教育局長を推薦するようにとの依頼があったからで、私がこの会議の幹事の1人であった関係上推薦されるようになった訳である。これからの9ヶ月間、私はこの職に留ったが、この間に国立遺伝学研究所が難産の末、産声をあげた訳である。

もともと私は昭和5年から昭和18年まで北海道大学理学部に勤務していたので小熊捍博士とは親交があり、23年4月に小熊先生は北海道大学を定年退職され、小田原に住まわれることになったが、日本全国の遺伝学者の念願である国立遺伝学研究所設立の件はある程度まで知っていた。殊に22年8月に片山総理を囲いでの会合で、木原博士が「この種子無し西瓜は遺伝学研究成果として得られたものです。今私はこの西瓜を真っ二つに割りますが、もしこの中に種子があったら、私はこの西瓜の皮で腹を掻切って自殺いたします。」とジョークの中にも軽い決意を表明されると、片山総理は「何とか種子がありませんように。」と切り返されたエピソードを聞いている。

このような全国の遺伝学者の熱意が通じて既に国立遺伝学研究所の設置が正式に衆議院及び参議院で議決されていた。しかしその実現までには様々な

* 〒150 東京都渋谷区神宮前5-34-16, 学士院会員; 当時文部省科学教育局長

故障が続出した。

その主な点は大体次の3点である。

(1) 日本全国の大学での遺伝学研究に力を置くべきか。また1つの国立研究所に力を入れるべきか。

(2) 研究所が大学を離れて遠い位置にいて果たしてよい結果が得られるだろうか。誰にも利用されずに終わる心配はないか。

(3) 特に農林省などの遺伝の基礎研究と重複する心配はないか。

これらの問題が論議されている最中に私は清水勤二氏に替わって科学教育局長に任命されたのであるが、私にとって非常に有り難かったことは、研究助成課長の中西勝治氏が東京高等工業学校の電気科、東北大学理学部の物理学科で共にクラスメートとして学んだ仲であったことである。

また総司令部では科学技術副部長のHarry C. Kelly 博士と極めて昵懇な間柄であったことである。ケリー博士は、昭和21年初めに来日されたが、実は米国の科学学士院の院長ジュエット博士の人選によったものである。終戦直後、米兵が理化学研究所の仁科芳雄先生の実験室に来て、建設中のサイクロトロンを解体し、海中に投棄したという事件は、大砲とサイクロトロンの区別を知らぬ米兵から日本の科学を守らねばならないという世論を米国の科学者の間に巻き起こした。その結果ジュエット博士は当時M. I. T. の輻射研究所の研究員であったケリー氏を日本に送ったと言われている。

ケリー博士は日本に到着して、文部省その他の官庁の役人を通じて日本の研究者と接触するよりは、直接に各専門分野の研究者と接触したいという意向を持っておられたので、理・工・農・医等の学者が自発的にリエゾン・グループを結成した。私は理学方面の Science Liaison Group (略称S. L.) の代表を務め、しばしばケリー博士と接触していたのである。

ケリー博士は日本の科学研究に対する司令部の方針として次のように語っておられた。「日本の教育は米国から三流の教育者がやってきて根本から変

革してしまったが科学研究では決してそのような轍は踏まない。日本の科学研究者自身の考えに基づいて変えるべきものは変えたい。これが戦前の学士院、学術研究会議、学術振興会という三本立ての体制を学術会議一本にまとめ、学士院、学術振興会もこの中に組み入れるという結果になった訳である。

私が遺伝学研究所の設立についてケリー博士と接触した限りでは、この研究所を日本中の遺伝学者の総意に基づいて静岡県三島の三島に設立することに初めから賛意を表しておられたので、文部省科学教育局はすっかり安心してしまっていた。ただ土地の問題については、地元の方々の了解を得る必要があるとのことで、三島神社の傍らにあった料理屋に地元の方々を招いてお願いをした記憶がある。

ところが司令部でのこの方面の専門家であるヘンショウ博士、ブレッチ博士は依然としてこの研究所を三島に作ることには懐疑的で、なかなか同意が得られなかったし、また農林省方面でも、農林省で行う遺伝学の基礎研究に支障を来たさえないという条件の下でのみ、この設立を認めてもよいというかなり消極的な態度であった。

しかし遺伝学者の粘りは強く、23年10月の高野山で開かれた日本遺伝学会第20回大会では、その決議としての研究所の設立が要望された。そのような状況によって昭和23年度予算で三島の土地は購入することができたが、昭和24年度になって、この研究所の設立が文部省設置法案となって国会に提出されることになった。

そこで私はこの研究所設立に関して、24年の4月に司令部にルーミス氏を訪ね説明したところが、同氏は司令部の科学技術部の了解が得られているかどうかについて質問したので、ケリー博士から同意の言葉ももらっていると言ったところ、「何か書いたものがあるか」とのことなので、そんなものはもらっていないと答えたところ、ルーミス氏は即座に「You are too optimistic」と言って取り付く島もなかった。不幸にしてその時ケリー博士は一時米

国に帰っておられたのである。

この期に及んで研究所の設立を断念するなどとは到底考えられないが、これでは責任をとって辞めるよりほかないと覚悟した次第だった。

しかしケリー博士はそれから間もなく帰任されたので、この問題はあつと思う間に解決され、ルーミス氏と文部次官との昭和24年5月5日の会見で正式に許可されたという次第である。

私は昭和24年5月末に科学教育局が大学学術局と改まった機会に辞任して、東京大学にもどった。在任わずか9ヶ月だったが、私以後文部省が大学教授を局長に任命しなくなったのは、よほど私に懲りたためだと思う。

ケリー博士はやはりこの年辞めて米国に帰られた。その後は米国科学財団、ノースカロライナ大学プロボスト等を務められたが、ケネディ——池田会談によって発足した日米科学協力会議の米国側議長として大きい功績を立てられ、1950年日本政府は博士に勲二等瑞宝賞を贈ってその功に応えた。

ケリー博士はその生涯に渡って日本の科学者の面倒をみて下さった。私は渡米する毎に博士のお宅にとめて頂いたし、また私の息子2人が米国に留学した時は「私を米国での父と思え」とまで言って下さった。

しかるに1976年2月2日、夫人が夕食の仕度をしておられる最中に卒然としてベッドの中で息を引きとってしまわれた。まだ67才の若きであった。博士の最も親しかった故仁科芳雄先生の関係者たちはアイリン夫人と相談して、1977年の8月に多摩墓地の先生の墓にケリー博士の分骨を埋葬したが、その最中に東京では珍しいカッコーの声が高く響いた。遺伝学研究所の方々も一度是非この墓に詣でて頂きたい。

2. 国 顧 随 想

岡 野 澄*

田島所長から御丁寧な御依頼がありましたが、往事茫々として正確を期し難く、その任ではありません。ただ、田島先生から何の感想でもよいからとのことでありますので、感ずるところを述べ、責をふさぐ次第です。

私は、終戦直後昭和21年頃から早くも開始された国立遺伝学研究所設立の要望やその推進のための運動等の生みの悩みには、直接深く関与しなかった。当時私は文部省科学教育局の文部事務官（旧制）として、学術研究会議事務官を兼任しており、21年3月、帝国学士院、学術研究会議、日本学術振興会の3団体の改組問題に端を発し、24年1月、日本学術会議の成立をもって幕を閉じた戦後の学術体制刷新の問題に事務の責任者として取り組み、3年近くの間寧日なく過していたからである。そして、その仕事を完了する前後から、遺伝研創設の業務に直接携ることになったのである。

ところで、当時は占領行政下であった。連合軍総司令部は間接統治の方式をとったが、それでも日本政府は、その承認なくしては行政事務を遂行することは許されなかった。遺伝研の設立が簡単でなかったのは、まさしくそのためであった。すなわち、総司令部内で民間情報教育局（これが文部省および教育行政を管理していた。）以外に、経済科学局や天然資源局がこの問題に関与し、特に農林省を管理していた天然資源局から強い反対があったからである。この困難な課題は、最終的には茅誠司博士の手によって解決された。同博士は、23年9月から24年5月までの9ヶ月間、東大教授を併任のまま、文部省科学教育局長に就任されていた。同博士は、当時経済科学局科学技術部次長のケリー博士ときわめて親しく、両博士は深い友情をもって結ばれ、

* 〒193 八王寺市門田町1220-2、東京工業高等専門学校長、当時文部省学術課長

ケリー博士は茅博士に全幅の信頼を寄せていた。そうした関係から、ケリー博士は、茅局長の遺伝研設立についての要望を全面的に応援し、最も強硬な反対論者、天然資源局のレナード博士を説得してくれたのである。もし、あの時期に茅博士が文部省の局長の地位にいなかったら、この問題はさらに混迷を続け、容易ならざる事態に陥ったと思われる。この意味で、茅博士は、遺伝研の誕生には余人をもって替え難い有難い存在であったと言えよう。国立大学附属研究所の目的として、通常単に「……に関する学理及びその応用の研究」と掲げられているのに、遺伝研のそれは、「……学理の総合的研究およびその応用の基礎的研究」と神経質に規定されているのは司令部との折衝の痕跡である。

遺伝研とともに、24年に発足した文部省所轄の研究所は、ほかに国立教育研究所と国立国語研究所の2つがある。前者は、教育研修所（前身は国民精神文化研究所）を転換したものであり、後者は、司令部の民間情報教育局の要請に近い強い支持があつて、単行の法律に基づいて設立された。これに対し、既存の各省の試験研究機関の廃止統合が行われていたさなかに、純学術研究機関たる遺伝研が全くさら地に創設されたことは、偉とするに足りる。それには遺伝学会を中心とする関係者の熱心な運動に負うところが多いが、たまたま小熊捍、駒井卓、田中義鷹の3教授が22年度末をもってそれぞれ北大、京大、九大を停年退官されることになり、この3人の碩学がそろって新研究所に参加するということも、遺伝研を特定の大学に附置せず国立として構想する理由づけの一つとなり、またその実現の努力に拍車をかける要因ともなった。さらに、木原均博士が23年6月、ストックホルムで開かれた第8回国際遺伝学会に招かれて渡航されたことも忘れてはなるまい。これは、占領治下、わが国の学者が渡航を許された第1号であつたと記憶する。各国の学者は、木原博士のすぐれた小麦の細胞遺伝学の研究に情報の杜絶していた戦争をはさんだ時期にどのように進展したか、大きな関心を寄せ、少しでも

早くそれを知りたかったからであろう。30年前敗戦後間もない占領行政下というきびしい時期に、遺伝研の設置が認められたのは、木原博士の国際的な高い声望、その卓越した研究業績に対する世界的な評価と敬意、それに茅局長の存在。この両博士が最も大きな力となり、物を言った、と私は通観、回顧するものである。

さて、大蔵省で、なぜ三島にきめたのかと訊ねられ、三島は気候温暖で二毛作が可能で、農産物の遺伝の研究に都合がよいからだなぞと答えたが、実際は当時は建物の新営などは思いもよらず、少しでも使用に耐え得る建造物を入手することが先決であった。三島市附近の旧中島飛行機（当時富士産業）の工場跡が使用可能ということで、土地購入費を予算に計上した。ところが戦時中強制的に供出させられたこの工場の敷地は、旧地主に返還開放すべきであるとの農民の運動がまき起った。この土地の買収にからみ、農民組合との余り愉快でない折衝説得等のため、私も風の吹きぬける老朽列車に乗って度々三島に足を運んだりした。

初代所長小熊捍博士は、英国風のダンディな老紳士であったが、北大では理学部長等の要職を歴任されており、バランスのとれた行政感覚の持主であられ、私は、小熊博士のような適材を得たことは、研究所の基礎作りに大いに幸したと思う。また、有能で仕事熱心の塚本盛平氏の如き人材が初代事務部長に就任し、これを扶けた宮沢正夫会計課長等のスタッフのよきチーム・ワークによる努力が、諸事窮乏の創設期の難関を乗り越える上で、蔭の大きな力となったことも指摘しておきたい。

ちなみに、私は、26年8月、文部省大学学術局学術課長となり、以後11年間その職をけがし、その後も6年間事務官を勤め、遺伝研とも随分永いお付き合いとなってしまったが、不敏非才で、御要望に添い得なかった点多々あったこととお許しを頂きたいと存じます。

最後に一言。遺伝研の創設時は、以上のような時勢であって、所轄研究所

として発足をみたことは妥当であったと思う。しかし、その後、時代の進展とともに、研究体制の上にも種々工夫改善が加えられた。特に46年度高エネルギー物理学研究所の創立を機に、特定の大学に附置しない国立大学共同利用機関という全く新しい研究機構が生れ、現在この種の研究所は6を数えている。もし今日、遺伝研の設立がはじめて企画されたとしたならば、私は当然この新しいタイプの研究所として構想したに違いない。国立大学の教官との人事交流が容易となり、人事の流動化が確保され、大学院における教育への協力も公に認められる等のことはもとより、一所轄研究所の硬直した予算から国立学校特別会計の大きな枠に入ることはもとより、財政面においても実際に多くの利点があるからである。私は、遺伝研さえその気になれば、国立遺伝学研究所の名称も変更せずに、この新しい研究機構へ転入することは可能であると思う。多少経過的には問題はあるにせよ、研究所の将来を遠望し、近い将来このような措置が講ぜられ、30年前には想像もつかなかった整備された研究設備施設のもと、常に清新の気力がみなぎり、三島の地から世界の水準を抜くすぐれた成果が続々と生れ出ることを切に期待するものである。

3. 国立遺伝学研究所「設立残念記」から

「設立に至るまで」

宮 山 平八郎*

国立遺伝学研究所が創立30周年を迎えられ、心よりお喜びを申し上げますとともに、今さらながら歳月の経過の速いのに驚いている。生れた子供が30才になるのであるから、我ながら歳をとったものである。今年の7月で満65才になるから、表題の記事を雑誌「遺伝」に連載させていただいたのは、まだ私が34.5才の頃であったわけである。遺伝研の田島所長から「思い出の記」を書くようご依頼を受けてから、改めて「遺伝」の記事を読み直してみた。

私は戦時中、田中義麿先生の教室を出て、内閣技術院に勤務していたが、終戦とともに技術院は廃庁となり、私は技術院から文部省へ配置換えされたグループに組込まれていた。文部省では科学教育局の中西勝治課長のもとで、終戦後のわが国科学技術の建て直し体制に若き日の意欲を燃していた。このようなときに、国立遺伝学研究所設立の夢が文部省に持ち込まれた。北大の小熊捍先生から研究所設立の急務を力説されたお手紙（昭和20年11月17日付）をいただいたのである。この手紙は直ちに文部省内の関係部局長に回覧され、日本遺伝学会との連絡もはかられ、早速候補地探しもはじめられた。

そもそも国立遺伝学研究所設立の烽火は昭和14年12月、米内内閣時代に小熊先生が「国立遺伝学研究所設立の急務」と題する20頁のパンフレットを作成され、議会の要人に配布してその急務を説かれたことに始まる。幸い国会の質問で取りあげられ、米内総理から考慮するとの答弁を引き出したが、そ

* 〒229 神奈川県相模原市淵野辺1-17-71、麻布獣医科大学教授、

当時、文部省科学教育局研究助成課事務官

れなりになってしまった。その後、昭和16年春に日本遺伝学会は「遺伝学の振興をめざして」なるパンフレットを出し、重ねて遺伝学研究所設立の緊要性を説き、輿論喚起の第2弾を放ったのであるが、戦争のため立ち消えとなり、終戦の年を迎えたわけである。

日本遺伝学会の中に遺伝学研究所設立準備委員会が設置され、この委員会名をもって「遺伝学研究所設立についての依頼の件」が文部省に提出されたのは昭和21年4月であった。次いで、8月には昭和22年度予算編成を前に、駒井卓、木原均、増井清、篠遠喜人、田中義麿、古畑種基、和田文吾の設立準備委員の諸先生が大挙して時の田中耕太郎文部大臣、山崎匡輔文部次官を訪問されて、研究所実現方について懇請された。

雑誌「遺伝」の連載記事の第1篇は、こんなところから始っている。すなわち国立の遺伝学研究所がどのような経緯を経て誕生したかを、行政機関サイドから、できるだけ詳細に記録にとどめたつもりである。いま読み直してみても、当時の一コマ一コマがありありと懐しく蘇ってくる。

予算の経過を追ってみると、22年度予算編成では文部省議でアウトとなった。一方、候補地の一つであった旧中島飛行機谷田工場の施設については、賠償施設であったため、商工省下島技官の斡旋によって静岡県を通じて静岡軍政部へ、管理区域からの除外について申請され、22年2月に施設使用の許可がきている。また、国立研究所を前提とした財団法人遺伝学研究所の設立は同年の5月下旬に認可された。この頃には、竹中要先生が事務局長役で書類作成や官庁との交渉を精力的に進められていた。

昭和23年度概算要求のための文部省予算省議は8月が9月に持ち越され、森戸大臣から「自然科学の中でなぜ遺伝学だけを取り上げるのか」ほか4項目の厳しい質問が出されて、またしてもお流れかと思われたが、在京の篠遠、古畑、和田、竹中の諸先生と会合して、間髪を入れず詳細な回答資料を作成し、再三揉み抜いた結果、ついに9月28日に省議決定となり、2年越しにど

うやら文部省を送り出すことができた。

一方、増井先生を委員長として国立遺伝学研究所設置の請願が新憲法制定後初の第1国会に提出された。総理官邸において片山首相を囲んで種なし西瓜の試食会が催されたのもこの頃である（8月27日）。

国立遺伝学研究所設立のための初年度予算（6ヵ月予算で3,356,000円）が国会を通過したのは昭和23年7月5日であった。ところが、設立予算が国会を通っても、その官制が出ないうちは陽の目をみないわけである。まず、8月17日に第1回の創設準備委員会が、文部省科学教育局長室で開られている。これには学術研究会議の亀山直人会長、柴田桂太第4部長、岡田要第4部副部長、財団法人遺伝学研究所より小熊捍所長、増井清理事長、日本遺伝学会より篠遠喜人博士（木原会長渡欧中につき代理出席）、農林省関係から盛永俊太郎農事試験場長が出席されている。文部省としては、当初文部省設置法案の中に入れて改めて政令で出す方針を固めていたが、各省設置法案が臨時国会に提出されないことになり、急ぎ単独法案に切り替えて暫定措置法案として出すことになった。ここで清水局長から茅局長へバトンが渡される。

政府としては国会提出に先だち、例によってG.H.Q.関係者との定例懇談会の席上改めて意見を求めるわけであるが、E.S.S.のDr. Henshawから自紙的な質問と異議が述べられ、C.I.E.のDr. Edmistonが修正意見の助け舟を出してくれたが、Dr. Henshawは法案提出の事前了解を求め、大学、農林省、厚生省関係者と十分論議する必要ありとして、折から開催される高野山における遺伝学会大会で話し合いの場を作るように提唱した。一方、この日の次官会議では臨時国会提出法案の中に遺伝学研究所の分も含めることがすでに議決されていた。ところが、幸か不幸か、昭電疑獄事件で芦田内閣は臨時国会を待たず総辞職、若干の時を稼ぐことができたわけである。

10月12日にはG.H.Q.の申入れで会合が持たれ、E.S.S.、C.I.E.、N.R.S.の関係者と農林省（大野技術研究部長）、厚生省（古屋芳雄公衆衛生院長）が

出席し、学会からは小熊捍北大教授、篠遠喜人東大教授ほかが出席して選ばれて篠遠教授が座長となった。長時間にわたって活発な意見の交換が行われたが、一歩も進展が見られなかった。茅局長が東大の嵯峨根教授と同道、E. S.S.のDr.Kelly をその私邸に訪問されたのは10月14日の夜であった。15日は研究所の具体的プランについて、主として法案に書けない局長の覚書の内容について、小熊、増井、篠遠、和田の諸先生、それに農林省から明峰技官が出席して会議が持たれ、16日にはC.I.E.にその後経過を報告、18日には篠遠先生とN.R.S.にDr.Leonard を訪問、重ねて了解説明を行う。21日～24日は高野山において日本遺伝学会第20回大会が開催され、22日には真言宗の総本山金剛寺の一室でDr.Henshawを囲んで懇談会が開られた。26日にはG.H.Q.との月例連絡会でDr.Henshawの高野山報告、一方、次官会議で農林省側からクレームが出され、11月上旬は農林省工作に時間をとられる。正に息づまる毎日交渉が続けられたが、11月9日の閣議で研究所法案の提出は見送りとなった。第4国会は引続き12月1日に召集されたが、年内には法案提出の機会がなく、国会は解散となって新春を迎え、2月総選挙、3月12日の国会再会を期して法案提出の機会をうかがうが、人員増加は頑として吉田総理が受けず、一同の努力にもかかわらず23年度も見送りとなる。幸い三島の土地購入が大蔵省の了解を得て、23年度予算で実現したことは、静岡県、地元錦田農業協同組合のご協力によることが大であった。

第5国会には、単独法でなく、文部省設置法案の中に折込んで提出することになり、またしても、E.S.S. C.I.E.およびN.R.S.と了解工作が続いたが4月30日までに間に合わねば次期国会に再び単独法として出すことになる。幸か不幸か、各省設置法案の国会提出が関係方面との接渉でおこなわれているので、G.H.Q.より指令が出された。このため遺伝学研究所設置を含めた文部省設置法案は、そのまま国会に出てしまった。驚いたのは交渉中のC.I.E.関係者であった。早速4月25日、小熊、駒井、木原、古畑、和田、竹中の諸先

生が文部省へ参庁，E.S.S. N.R.S. を訪問して重ねて学会側の熱意を伝え、また、遺伝学研究所の問題は日本学術会議においても諮られ、亀山会長から茅局長を経て5月2日にE.S.S. へ届けられた。5月5日C.I.E.の法規担当者が文部次官と会談、正式に司令部の了承が伝えられた。5月26日、遺伝学研究所創設準備委員会が召集され、茅局長より研究所の設立が国会を通過した旨報告され、6月1日に、文部省の機構改革とともに、国立遺伝学研究所が発足した。当初予算は5,469,000円、職員は34名であった。

研究所設立のドラマティックな経過の背景として、当時は(1) G.H.Q.の統治下であったこと、(2)戦後の農地解放運動下に用地の確保を行ったこと、(3)政情不安定でこの間に内閣が5回も代ったこと、などをあげることができよう。しかし、何よりも深く印象に残ったことは、当時の遺伝学会が一致して研究所設立に動いたことと、お名前を掲げた諸先生が労をいとわず、最後までねばり強く奔走されたこと、そして、それに応えて清水勤二、茅誠司の2代にわたる科学教育局長の熱意と努力がなければ、あの困難な時代に陽の目をみることはでいかなかったであろう。

〔文 献〕

H. M. 生：国立遺伝学研究所設立残念記(1) 遺伝2(6) 1948；全上(2) 遺伝2(7)1948。

H. M. 生：国立遺伝学研究所の設立に至るまで 遺伝2(9) 1948；全上(2) 遺伝2(11) 1948。

宮山平八郎：国立遺伝学研究所の設立に至るまで(3) 遺伝3(9-10) 1949；全上(4)

遺伝3(11) 1949。

4. 追 憶

塚 本 盛 平*

昨年9月下旬、修善寺温泉のあさば旅館で私立大学関係の会合があり、二日目は慶応大学附属病院の月ヶ瀬にあるリハビリテーション施設を見学することになっていたが、それを断ってこの国立遺伝学研究所にお邪魔した。伊豆地方ではよく似た機会があり、その都度立寄らせてもらっているので珍しいことではない。私の生涯の楽しみかも知れない。勿論序でなくても出向けるだけの健康があつてのことである。

さて、私がこの研究所に直接関係するようになったのは、昭和24年5月下旬、当時の科学教育課長の福田繁さん（現国立科学博物館長、元文部事務次官）から、挨拶だけでよいからと云って科学教育局長の茅誠司先生の部屋に案内されたことに始まる。局長室に這入って見るとそこには既に小熊捍、駒井卓、田中義麿の三先生がおられて、早速紹介され、そのまゝこの研究所の創設事務を手伝わせてもらうこととなった。そして6月1日付で所長事務取扱に大学学術局長の劔木亨弘さん（後に文部事務次官、参議院議員、文部大臣）と私が発令された。小熊先生が正式に専任の初代所長になられたのは、所轄機関の長はその評議員会の推薦により文部大臣から発令されることになっていたので、その手続の間だけ後れたのである。評議員会の会長は岡田要先生で、副会長に茅先生がなられたが、先生は専門でもない自分が何故副会長にならねばならないかと、冗談を言っておられた。

さて、この研究所が三島に設置された経緯やその他については、既に多くの人の記述で明らかであるから省略するが、その後遺症にも似た問題が幾つかあつて、直ぐに現地に行って仕事をするわけにいかなかったので、取りあ

*〒277 千葉県柏市酒井根886-31; 第1代庶務部長

えずは仮事務室を文部省内(大学課の一隅)におき、駿豆鉄道三島田町駅前の三芳館を足がかりとして諸準備を進めることとなった。仮事務室を引き払って三島に移ったのはその年も12月になってからである。幌馬車のような自動車ですら寒々と箱根の山を越えたのをよく覚えている。

準備の中で一番複雑な思いが残っているのが土地の問題である。本来的には解決されていることであつたが、研究所の予定地が戦争末期に急に進出して来た旧中島飛行機の跡地であつたため、先祖伝来の土地を強制的に収容されたとの思いが残っている旧地主には、急にはしこりを掃払しきれないものがあつたようである。そこで澱粉工場のある農協の2階やその他で毎日のように話合いを重ねることとなった。しかしもう問題は筋ではないのでゴリ押しは勿論いけな。お互いに心と心の振れ合いをよくする外にない。こゝでまことに幸いであつたのは、いろいろの人と話をしているうちに、研究所に非常に理解のある青年が現れて、我々と地元の人達との間を上手に取り持ってくれた。おかげで大きな蟻も残さずに話合いが納つたのである。その青年の一人が青野政夫君である。同君はその後特殊教育の学校の先生になり、今は沼津盲学校の校長さんの筈である。多謝。

この研究所は戦後の最も困難な時期に発足したので、あらゆる面で苦勞が多かつたのは当然であるが、自然科学に関する研究所でありながらその基本ともいふべき光、熱、水がちつとも揃つておらず無に等しかつたのは大変であつた。当然先づその整備が急がねばならなかつた。その中で電気だけはどうか赤茶けた電灯を点すだけはあつたが、電圧が低いのでそれ以上の役には立たない。先づ電圧を上げねばならないが占領下でGHQの許可を得なければならぬ面倒があつた。それでも電気関係が一番早くものになつた。

次は水道である。工場時代には敷地の北西隅の崖下に大きな井戸を掘つてそれを使つていたようだが、恐ろしく水質が悪くて研究用にも飲料にもならない。職員は工場時代の出入口や自転車置場を改造して住居としていたので、

飲料水はやむなく道路を隔てた崖下の墓地を通り抜けて寺から貰い水をして
いた。雨の日など崖が滑って難渋したものである。一口に三島と云えば誰で
も水の名所を思い浮べるから、そこで水に苦勞するとは思ってもよらないこと
であった。しかし水の名所なるが故に公共用の上水道の施設は皆無に等しか
った。漸く研究所から東に水田と谷と小丘を越えて小川の中流にボーリング
して、その水を研究所の一番高いところの貯水槽に送ることができるように
なったが、それはいつ頃であったか。その送水管の敷設には地元の人達の勤
勞奉仕があり、ポンプの管理もその人達のお世話になった。最初は土地の問題
でお互いに随分嫌な思いをして言い争いをしたが、この頃ではこのように
協力的になってもらって本当に有り難いと思った。

もう一つ瓦斯がある。これが一番難しかったかも知れない。三島の瓦斯は
静岡瓦斯会社の沼津営業所から供給を受けていたが非常に小規模であったの
で、研究所に供給するとなると少くとも3つの大きな難点があった。その第
一は市内の末端から研究所までの約2料の配管である。第二が沼津・三島間
の元管と三島市内の本管を大きいものに取り替えねばならないこと。第三は
瓦斯の圧力を大きくしなければならぬこと。第二、第三は会社としても將
来市内営業の強化につながるかも知れないが、第一は途中殆んど人家のない
水田地帯であるから急には営業の見込が立たず最も難物であった。これまで
は専ら沼津営業所長（取締役）と交渉して来たが、以上のどれ一つを取って
も沼津だけでは処理できないことが分ったので、静岡本社に社長を訪ねるこ
ととした。社長に対しては研究所の意義、我が国遺伝学の国際的地位、そし
て県内に所在する誇りなどを強調して格別の理解と協力を切望した。現今
のようにプロパン瓦斯が普及、発達しておればこんな苦勞もいらぬし、茶番
劇を演ずることもなかったが、当時としては一生懸命であった。結局、市内
末端から研究所までの配管は研究所の専用管として国で持つこととして、会
社は瓦斯の供給を了承してくれた。社長は別れるときに「国はあまり民間会

社をいじめるな、と久保田に言って下さい。」と云った。始めて知ったことだが管理局長の久保田藤麿さんは社長の甥であったのである。

なお専用管については特別に追加予算を計上してもらったが、それには途中で一切他に瓦斯を分岐供与してはならない、との条件がつけられた。前記の水道管と共に今でもまだ生きていだろうか。

最初に書いたように、私はこの研究所が出来た24年6月から、静岡大学に移った28年5月まで3年11ヶ月お世話になったが、その年月を超えて、いろんな意味で懐しい思い出が一杯である。只残念なことに毫碌した頭ではそれらが走馬灯のように駆け巡るだけで、年月も前後も定かでないことが多い。研究所本来の仕事でなくても、例えば専売公社からの依頼研究のたばこや、全国養鶏家協会からのニワトリの品種改良や、または種なし西瓜の種の話など興味は尽きないが、最後に土川さんとネズミの話を書き添えさしてもらって、この締りのない追憶を終らせてもらうこととする。

研究所の建物はすっかり改造されて以前の面影は全くないが、位置だけは大体変りないようである。その玄関を這入って左手に大きな空室があった。勿論以前の木造建物であるが、今の講堂のあたりまで含まれる。土川さんは北大の牧野研究室から実験用のネズミを貨車一台分、自分もその貨車に寝起きを共にして一週間がかりで運んで来た。そうしてこの大きな部屋一杯に飼うこととなった。餌は市内の料亭から残り物をもらって来て、それを炊いて与えるのである。今の飼育室や餌料から見たら嘘のようで、全く大変なことであった。私がこの研究所に来て最初に出会った驚き、と言っては失礼かも知れないが、感心した現実であった。研究とは姿・形は変わってもどこか一脉相通するものがあるのかも知れない。

5. 地元市民の回想記

小 出 正 吾*

終戦の年帰郷して第1回の農地委員に選ばれていたため、私は三島市錦田地区における農地改革の実際に直接触れていたものであった。

そこで錦田の丘陵地帯にあった中島飛行機工場の跡地処理についても当然所管事項として審議に加わっていたのである。

戦後創設されることになった国立遺伝学研究所の候補地としてこの工場跡地の一角が狙上に上っているという話は初代市長だった花島周一君から聞いていたし、同居の北大時代の級友、木原博士もしばしば来島され、下準備を進めておられるとも伺っていたが、いよいよその申請が農地委員会に出てみると、意外に強硬な反対意見や質疑が地元農民代表の中から現われた。つまりマッカーサーの方針による農地改革は自作農創設法によって農民に耕作地を与え、それによって生産意欲を興させ、戦後食糧の窮乏を緩和させようというのが主旨のはずだから、軍需工場の跡地処理についても、これを農地に復帰させ、しかも実際の耕作者に解放するのが本筋ではないかという主張である。

もうひとつ、たとえ国立機関とはいえ、増産を先決とする現状の中で学者先生たちの研究というものが、どれだけ役に立つのであろうかという疑義であった。

私は花島周一君の兄孝一君（元海軍中将・航空工廠長官・航空研究所長）から日本人があらゆる分野において、いかに基礎的研究ということをおろそかにしてきたかという事例を繰り返し聞かされていたし、また戦時中、鷺津山下の海軍施設で行われていた風洞試験の経験から箱根山によって首都から

* 〒411 三島市小山1330-2; 当時三島市錦田地区農地委員、三島市教育委員長

適当に隔てられているこの北伊豆の地勢が研究所のような仕事にとっては正に適地というべき条件を備えているのだとも聞かされていたのであった。従って文教を中心とした文化都市を目指す三島の将来にとっては、国立研究所を迎えることは何よりの朗報というべきだと考えていた。

しかし、元来この場所は箱根山西麓の末端における舌状丘陵地帯の一角にあつて隣接する塚原部落の名称にも示されているように古墳時代の遺跡が多く残存し、更に縄文時代にまでさかのぼる竪穴住居の集落跡は、埋蔵文化財として登録されているものだけでも三島市地籍内だけでさえ60余ヵ所を数えるほどで、正に、弥生時代以後集落が平坦部水耕地帯に移るまでの祖先の地で、いわば三島市発祥の郷土というべき地域だが、特にこの丘陵一帯は俗に「谷田っ原」(ヤタツバラ)と呼ばれてきた畑地であつて、富士・南アルプスから伊豆の山々を見渡しながら早春の麦畑の空を上り下りする雲雀の歌声のどかなこと、正に別天地というべき田園風景であつたのが、戦時下軍需工場用地として買い上げられ、いまだ操業の成果も見ない間に早くも終戦となり廃棄の運命に立ち至つたのであった。

従つて従来の耕作者諸君が、この跡地を畑地に復帰させ、しかも自作農創設法によつて増産を計るべく、土地所有者になる手続きを取るとするのは当然のことというべきであつた。

そこで委員会は、三者択一を迫られたわけだが、その決定に当たつて痛感されたことは研究所という機関の目的・内容についての理解がまだ一般には、はなはだ不足していたという事実であつた。そこで、まずその実態を知ろうというので、農民の有志諸君が自ら文部省まで出かけていって熱心に質疑応答を行った結果、一応の納得ができたので一件落着、研究所の誘致に決定したのであつた。

それと前後して私は、公選教育委員会の初代委員長を勤めていたため、この地域にも六三制による中学校を建てる必要上、研究所に隣接する飛行機工

場の鉄骨建物を改造利用する仕事に携わったが、この方は運動場まで含めて別に問題もなく進行した。しかし、やがて研究所の充実とともにこの学校の敷地との関係が地形の点でも、距離の点でもはなはだ不便であることが明らかになったので、いろいろ紆余曲折を経た後、最近に至って校舎を箱根国道側に移転拡張し、名称も東中学校から錦田中学校に変わったのである。

研究所の隣接土地問題については、もうひとつの難関にぶつかったことがある。それは高度成長の波に乗って某化学薬品製造工場が研究所の隣地に進出してきたという計画を持ち込んだことであった。市議員や商工関係の有力者間には盛んな誘致運動が行われたが、私たちが心配するまでもなく、研究所の諸先生がその結果によって起こるべき環境汚染の影響を憂慮されて次第によっては研究所自体が他へ移転しなければならなくなる事態まで予測されるので、ぜひとも善処してほしいということであった。

それにもかかわらず、誘致派の一新聞などは、「研究所がお移りになりたいならば、どちらへなりともご自由に！」などと書く始末であった。

折から駒井先生がドイツへ講演に出かけられる直前だったので、小熊所長先生を初め、竹中、松村、古里等の諸先生御同道で拙宅までもお越しになり「とにかく私が帰ってくるまでの間にこの問題を片づけておいてください。」などとおっしゃって出立されたのだったが、そのうちに会社の方の事情からか、間もなく自然消滅の形で片づいてしまった。

一方かつての反対派農民諸君の中にも研究所内の圃場の仕事に労力をもって協力する人々も出てきていたのだが、それらの中からもひそかに遺伝学の研究は品種改良をして増産に役立ってくれるものと思っていたのに、さっぱり結果が現われず、出てくるものは「三島ざくら」とか柳の葉っぱのお化けみたいな朝顔の花といったものなので、そろそろ首を傾げる連中も出てきた。

折も折、多分創立10周年記念行事の時だったように記憶するが、天幕の中で木原・朝永両先生が研究所作の種子なし西瓜を「見事に種子なしでありま

したならば、喝采を！」とばかりに大包丁で割ったところが正真正銘の種子なしだったので、私たちはそのお福分の断片を頂戴いたのだったが、これにヒントを得て「三島特産種子なし西瓜」というのを作って売り出したらどうだ、という話を持ちあがった。そこで早速、松村先生夫人たちの肝入りで古里先生を煩わし、研究所の一室に集まって、まず種子なし西瓜の栽培法についての講義を聴かしてもらうことになったが、何分にも「種子なし西瓜からどうして種子を採るのかな？」などと首をひねっている連中だったが、「種子なし西瓜をならせるするには、まず種子なし西瓜をならせる種子のある西瓜をならせる親西瓜を作らなければならない」と聞いて、「そんなに手間のかかるものを作って、一体商売になるのだろうかなあ？」などと早くもため息をつくという有様だったから、折角の名案も、あたら一炊の夢に終わったのであった。

それはさておき、遺伝研と三島市民との交流関係は年を追って深まるばかりで、その内、特筆すべき実例の二・三を挙げれば、あの歴史的な石油化学コンビナート阻止運動の際に三島市によって組織された自主的な公害調査団に松村・松永両先生が参加された他、研究所を挙げて全面的に協力して下さった結果が、この運動の成功の上に大きな力となったことは今更記すまでもない。

その後、箱根山を乱開発による自然破壊から守るために三島市によって箱根山西麓調査団が組織された際には、木原先生が団長として率先協力され、各種の分野にわたる科学調査を実施し、この結果が三島市域における自然環境保護政策における基礎的な指針・資料となっているのである。

その他、研究所内の公開見学とか、三島ざくらの苗木作りを初め、市内緑化運動の指導とか、あるいは市民諸集会における科学講演等を通じて、地元住民との交流に積極的に努められたこの30年間の過去を回顧する時に私たちは感謝の念を新たにするのである。

元より、研究所の使命は研究そのものにあるはずだから、地元住民との交流そのものは二次的な問題に過ぎないであろうが、私たち市民の立場としては、研究所の研究所たる使命が十分果たされるように、まず日常生活での心なき騒音の防止を初め、およそ文化都市のいうにふさわしい静かな環境をつくるべく努めるといようなことが、望ましい協力の第一歩ではあるまいか。

これは遺伝研創立30周年に当たっての地元一住民の回想及び反省の記なのである。

6. 遺伝学研究所と私

滝野 清之助*

早いもので研究所は本年六月をもって、創立三十周年を迎えられる由、大慶の至りに存じます。その記念の一環としての思い出の記に執筆するようお願いをいただきましたので、拙文で誠にお恥しく存じますが、書かせていただきます。尚創立以前のことについては、昨年十月裏話として書きましたので省略いたします。

私終戦当時、中島飛行機の整理会社である富士産業三島工場に勤務いたして居りました関係上、研究所の設立にかけながらお手伝いすることが出来ました。そのご縁で創立当時の方々、小熊先生・竹中先生・事務局では塚本さんやその他の方々と親しくさせて頂きました。当時、研究所の看板が掲げられていても、今まで自分達の会社だったので、我が家の様な気分で、気軽に出入りさせて頂いて居りました。

*〒420 静岡市大岩本町5-3；当時、富士産業三島工場整理部主任

西瓜のこと

思い出と申しますと、先ず頭に浮かんでまいりますのが西瓜でございます。西瓜の時期になりますと非常に楽しみでした。

「これから西瓜を割りますから食べに来て下さい」と電話がかかって参ります。黄瀬川の工場から三十分あまりもふうふう自転車をこいで、汗びっしょりになって研究所につきます。そこには色んな種類の西瓜が並んで居ります。それはどれもこれも実にうまかったこと、今だにその味が忘れられません。今になって考えますと、恐らくどれにしようかと迷って居るのを見て、特においしいのを選んで下さったためでなかろうかと思ひます。

それから木町の国道沿いに、古めかしい種屋さんがございました。ある日その店のガラス戸に「種なし西瓜の種あります」と云う紙が貼られてありました。それを見て落語的なおかしさを感じ思わず笑ってしまいました。私は木原先生の種なし西瓜について色々伺って居り存じて居りましたが、何の予備知識のなかった当時の方々は、恐らく変に思ったことでしょう。

竹中先生のこと

始めに申し上げました通り皆様に親しくして頂きましたが、中でも竹中先生とは特にご昵懇にお付合して頂きました。

先生と初めてお会い致したのは研究所が出来ます前で、私共の会社にお見えになられたしか静岡県庁に御出張に行かれる打合せを頂いた時ではなかったかと思ひます。あまりにも飾り気なく素朴な御方なので、単なる事務の方と思ひましたところ、あとでご立派な学者であられることをお聞き致し、人は見かけによらないものと思ひました。

頻繁にお会いする様になりましたのは研究所が設立されてからでございます。研究所のそばに長泉寺という曹洞宗のお寺があります。既に故人になられました、当時の方丈に山本克己と云う方が居られました。極めてご立派

な方で、その方丈を中心に色々な方々が集って話し合う会がありました。後に参禅懇話会といういかめしい名称をつけましたが、別に会則があるわけではなく、出席したい人は自由に集まり、座禅をするのはせいぜい一時間か二時間位で、あとはどぶろくを飲みながら語り合うということでございました。もう時効になっていることですので申し上げますが、このどぶろくは谷田地区の檀家の方々の自家製で方丈がお酒好きなので寄進される、方丈はそれをお一人で召し上らず、お使いを出し話相手を集められ飲み乍らお話をする、これがこの会の発端であります。

この会に私が竹中先生をお誘い申し上げたわけではございませんが、いつとはなく御一緒致すことが多くなりました。

先生は飲む程にお話が弾み、まるで青年の様に若々しく、皆さんと議論を戦わすのが、常でございました。ある日激論の末相譲らず、本堂で取っ組み合いのさわぎになった事がございました。その相手の方は、私の記憶では三島広小路近くの洋菓子店ララの御主人だったと思いますが、

竹中先生はおみ足がご不自由でお身体もすぐれない様でございましたが、お気持は何時も若々しくお元気で、お付き合い致して居りますと、こちらの気持迄すがすがしくなってほんとに魅力のある方でございました。私三島を離れましてからはお会い致すこともなく、新聞等で桜の博士としての記事を拝見致します度に、先生の御活躍をお慶び申し上げて居りました。もう一度先生と愉快に飲み明かしてみたいと思ひましても今はそれもかないません。大変残念でございます。

皇太子殿下にお茶を

次の思い出としては、たしか昭和三十一年の春の頃、私の知人の娘さんを研究所に入れていただいたことでございます。知人に頼まれ気易く引き受けて、研究所に行きお願い致しましたところ、定員がないとかで仲々むづかし

く、特別のご配慮をいただきやっとなんとか入れていただけることになりました。

それだけならよくあることでございますが、四月より入所となって居りましたところ、研究所より本人に連絡がございまして、繰上げて出勤せよとのこと、本人が出勤致しますと、皇太子殿下が研究所にお成りになられるのでお茶を差上げるようにとのこと、本人はびっくり、御両親は感激、そして私は大いに感謝されました。そのことで当時お恥しいこと乍ら、はばがきくなどとちょっぴり得意になっていい気なものでございました。

思い出と申しますとこの他数々ありまして切りがございませんので、このへんで終わらせて頂きます。私事のみ申し上げ失礼いたしました。(昭54.3.15)

遺伝学研究所の誕生にまつわる裏話

三芳館にて

終戦の翌年、昭和21年の春頃だったと思いますが、ある日、前三島市長花島周一氏から私の会社に電話がかかってまいり、私にすぐ三島市田町にある三芳館に来るようにとのこと、何事ならんと、とるものもとりあえず駆けつけましたところ、同氏の北海道大学時代の友人木原均氏をご紹介くださいました。氏は当時、京都大学の教授で、ご専門は遺伝学とのことでした。私はお恥かしいことですが、遺伝学の世界的権威であられる木原博士を存じ上げておりませんでした。

ご用件は、国立遺伝学研究所の設立計画が進んでおり、目下その敷地を物色中であるが、中島飛行機三島工場の跡地が最適であるのでそこに決めたい。しかしまだ予算がとれていない。議会がとおるまで相当な日時を要する見込みなので、その間三島工場の跡地を他に処分しないでほしい、という内容のお話でした。

小生、当時中島飛行機の整理会社である富士産業三島工場の整理部主任をしていたため、花島氏より名指しでお呼び出しにあずかった次第でございます。高度成長下の最近の経済状況とは及びもつかない戦後間もない当時としては、三島工場の跡地のような辺りなところは、たやすく処分できる見込みもありませんし、たとえ万一処分することができても、相手は公共機関以外は考えられませんでしたので、現地担当者の私にとっては大変よいお話でございました。私は大賛成でご協力を惜しまない旨申し上げ、富士産業の本社にも直接お声を掛けてくださるようお願いいたしました。

お話をいろいろと伺っている途中でしたが、私が「研究所は必ずできるでしょうね。駄目になるようなことはないでしょうね。」と念を押しましたところ木原博士は、「この研究所は是非日本に必要なのだ。いや、人類のために必要だ。必ず実現する。実現させる。」と目を輝かし、声を大にしておっしゃいました。花島氏も「大丈夫だ。」と熱心に口添えなさいました。花島氏は単に木原博士の友人、紹介者というだけでなく、研究所設立計画の片棒をかついでおられるように感ぜられました。

木原博士にお会いいたしましてからは、研究所の予定地である三島工場の柵内の土地建物は、一応整理済のものとして、私共の念頭よりはずれ、他の物件の処分に専念いたしておりました。

農 地 買 収

ところが、翌昭和22年夏、突如として、錦田農地委員会が、三島工場の柵内の建物の軒先まで農地買収をかけてまいりました。寝耳に水とはこのようなことと、早速異議の申し立てを行いました。

この買収は研究所側が内密に事を運んでおりましたのが表面に現れ、どうせ三島工場などは転用できっこないと、高をくくっておりました農民側がそれを知り、慌てて行ったものでございます。早速異議の申し立てはいたしま

したが、すぐに解決できず、最後は、県農地委員会までまいり、もめにもめ、約1年半もごたごたいたしました。

今でも思い出されますのは、田方地方農地委員会の時のことでございます。約30名ぐらゐの傍聴人が、狭い会議室に押しかけ、やじは乱れ飛び、まるで人民裁判さながらのすさまじさで、しばし立往生する始末でございました。この農地問題のいざこざの1年半の間、私の相棒の吉田蕃氏は、土地関係の専門家であり、かつ地元出身でもあるので、いろいろな面で大変ご苦労なさいました。

すったもんだもみあって約1年もたってからのこと、ある日、田方地方事務所の農地課長・長谷川孝作氏より「このままでは解決の見込みが立たない。本省のお偉いさんにでも来て頂いて、皆さんに事情を説明して頂き、頭を下げてもらえると、何とか説得し解決にもって行けると思うがどうだろうか。」というお話がありました。

当時私は、失礼でしたが、長谷川氏が陰で皆をあおっているのではないかと、あまり感じよく思っておりませんでした。私の方も手の打ちようがございませんでしたので、渡りに船とばかり、本社に急行いたしました。小口担当重役に状況報告をし、何とか文部省の担当局長を現地にお迎えできるようお願いいたしました。その結果、小口重役のお供をいたし文部省にお願いにまいることになりました。

担当局長は科学教育局、局長は茅誠司博士でした。後に日本学術会議会長、東京大学学長になられた方でございます。

担当課長にお目にかかり、まずその旨お話をとおしましたところ大変なおかんむりで、「何んでもかんでも皆局長を引っ張り出されたんでは、局長が何人いたって間に合わない。会社側だけで何とか解決してほしい。」とのことでした。それでは困るので、粘りに粘ってやっと茅局長にお会いすることができました。茅局長は、ご熱心にいろいろと現地の状況をご質問なされ、「私が

現地に行き、皆さんにお願いして解決できるならばこんな有難いことはない、喜んで三島にまいりましょう。」と進んでお引き受けくださいました。

以上のようないきさつがございまして、文部省側は茅局長及び担当課長他、農地委員及びその関係者、それに会社側の三者が、三島広小路にあります料亭『登喜和』に集まり、会合を持つことになりました。

今でもありありと目に浮かぶのは、まず、農地委員の方々を床の間の上座にすえ、茅局長ご自身は、はるか下座にすわれ、丁重な態度で、「是非国立遺伝学研究所設立にご協力願いたい。」と深々と頭を下げられたお姿でございます。

結局、この会合を契機として、急きょ解決の方向に進みました。地元のOKがなくともあるいは強引に研究所はできたかも知れませんが、私は茅局長のこのような謙虚なお気持ちがあってこそ円満裡に研究所が誕生したものと信じて疑いません。

終りに

私、当時研究所のすぐ下の小山中島町に住んでおりましたが、そこを離れて現在の静岡市（大岩本町5の3）に移りましてからもう20数年になります。三島に立ち寄るのは、年に2・3回あるかなしかでございますが、三島は私にとっては懐かしいふるさとのようなもの、特に研究所の場所は思い出の地でございます。

私は昭和18年より中島飛行機三島工場建設委員会の委員の1人として工場建設にタッチいたし、戦後は、その整理会社の富士産業三島工場整理部に残され、その後始末をしてまいりました。その関係で研究所を陰ながらお手伝いできたわけでございます。研究所前の桜並木の下にたずみますと、木原・茅両博士にお会いした時の様子が、スポットライトに照らし出された舞台のように心の中にありありと浮かび、ジーンと来るものがあります。

このことは、一生忘れることのない思い出でございます。と共に、私がそこに居合わせたことを誇りに思っております。この感激を自分だけにしまって置かず、せめて私の子供たちだけにでも書き残して置きたいと筆をとった次第でございます。

7. 遺 伝 研 の 敷 地

木 原 均*

国立遺伝学研究所が三島に設立されるまでの経緯を記憶によって綴って見よう。ここではどうして三島市の谷田に決定したかを述べるに止め、外の事は触れないことにする。いわば歴史的の記録でなく、回顧である。

1947年（昭和22年）1月に私が御講書始の帰りに三島駅に下りた。その頃の汽車は超満員で窓から出入りする人が多かった時代であった。私はモーニングを着て、混雑の3等車に座っていた。

この時の目的は“研究所”の敷地を検分するにあつた。しかし、この研究所は財団法人興農学園の研究施設を三島附近に求めていたからでした。この学園は東京渋谷の宮益坂に本所を置き、久連（くづら）に農園と学校をもっていました。そこの理事長は森林学の老家白沢保美氏で、専務理事は友人の田中次郎氏（創設者渡瀬寅次郎氏の次男）でした。私はこの久連農園に度々行きましたが、三島から遠く不便なので、研究施設を三島附近に建てたいというのが私の希望でした。それで東京の帰り道に三島に途中下車して、二・三の候補地を平沢理事長と見て歩きました。その時に修善寺附近の候補地を二ヶ所見ましたが適當のがなかった。

その頃、三島町長花島周一氏（後の三島市初代市長）が、北海道大学時代の同級生だったので、三島の中島飛行機の工場跡を推薦して来ました。そこが今の遺伝研のある敷地です。当時は戦後で、この工場は事務所（木造）とその北側に工場の一部があつた。その工場には飛行機製作に関する機械が保管されていたと聞いた。

この土地を見に行った日付は覚えていない、古里和夫氏（現浜松フラワバ

* 〒233 横浜市内南区六ツ川3-122-21, 木原生物学研究所; 元所長 当時京都大学教授

ーク園長)と一緒に見たのでした。直に分った事は、興農学園の研究施設を造るには広すぎるという事でした。その時広い荒れたままの土地を見たり、今はどこかにあるか知らないが、機関銃の試射施設も見ました。

その頃国立遺伝学研究所設立の機運が盛り上っていたので、直ちにその候補地に推薦する事に決めました。ところが、まだ米国占領軍の管理下にあった日本では、吾々が勝手にきめるわけに行かなかった。その上、占領軍の中に教育の部門と農学関係の部門があって、一方が許可しても他方は反対するという具合であった。

反対といっても、遺伝学研究所は必要でないという主張の占領軍農林部門の意見と許可しても三島は東京から離れすぎて適当でないという文部関係部門の二つがあった。前者は根強かったが、遂に Salmon, Leonard の両博士の了解で解消され、三島候補地の許可があればよい事になった。

23年10月高野山で日本遺伝学会の第20回大会が開かれた。それに占領軍から Henshow 博士が出席したので、学会の有志で口説いたがナカナカ承知しない。一度よいという返事をしたが、後になって反対だなどという状態であった。しかし候補地は東京附近にない事が分り、三島に落着いたのは、日本側の文部当局(当時茅誠司氏が科学教育局長)の力であった。

かくして三島に敷地を定め、現在の所に国立遺伝学研究所を造る事に定まった。その始めには中島飛行機製作所の木造平屋建の事務所を改造して、三研究部門で始めたのであった。ここで二つだけ記録したい事がある。

一つは、その頃中島飛行機の敷地は、旧の所有者(農家)があって、返還を求める機運があった。もう一つは、三島市が中学校を建てる土地を求めている。

後者をうけ入れて、最近まで中学校が建っていた。その校舎は、既存の建物を改造したものであるが、改造前は恐らく冶金の工場と見えて天井の高い、がらんとした建物であった。今では、その中学校は、ここから附近に校舎を

新設して移っており、初期の要望どおり研究所の土地となっている。

遺伝研は紆余曲折の後、建てられたが、もう一つ研究所が出来上ってから大きい事件があった。それを一つだけ記してこの稿を終る。

1964年(昭和39年)頃、石油コンビナートが三島・沼津地区に進出したいという申込を三島市に送ってきた。その時、三島市はこの誘致について賛成と反対の二つに別れていたが、県や文部当局は賛成の模様であった。中には、費用を出すから新しい土地を求めて引越したらという誘惑もでた。私はそんなに悪い環境を作るなら、吾々の愛する箱根にも及ぶであろうと反対の態度を硬化した。松村・松永両部長が遺伝研を代表して、石油コンビナート問題の三島市委員会に出て活躍された。

当時の長谷川市長は、賛否両派の争いの激化を心配して、遂に石油コンビナートの進出を承諾しないと決定した。

この事が、三島市並びに周辺の土地を公害から救ったというので、遺伝研の存在を認めてくれた人々が多い。今迄は無いものと同じであった遺伝研が初めて市並びに市民に貢献したので大いに喜ばれた。

今後も遺伝研が三島市と共に市の大問題には努力して欲しいものである。

(米国ホノルル宿舎にて記す。1978年3月28日)

8. 研究所ができた頃の思い出

故竹 中 要*

箱根を越える

丁度15年前、昭和24年10月29日、それまでたむろっていた文部省の片隅の暗い狭い部屋を引払って、わが研究所はいよいよ三島に移ることになった。それまで東京に駐在していた職員は小熊所長・塚本庶務部長・宮沢会計課長・門脇・中野両事務官と私の6人であった。1日も早く三島へと思ったのであるが、土地や家屋の貸借契約・職員の任命・来年度の予算編成・宿舎の修理等々について、庶務部の手が抜けないので、とうとう10月も終りとなったのである。

東京からの引越荷物は文部省からもらった古金庫（今も使っている）が第一のもので、その他古い戸棚などとそれに当座にまにあわすために新しく買った机・椅子などで、わずかトラック2台であった。われわれは当時としては自慢の幌型バックカードに乗って箱根越えときめた。この車は昭和16年戦前最後に輸入された唯2台のバックカードの1つで、これらは天皇陛下のお車の前後につくためのものであったと言われる。つまり戦時中も軍に取り上げられることなく宮内省に属していたのであろう。それがGHQ時代で不用となり、古くもなったので、払い下げられたのであろう。昭和24年当時は、役に立つような車はまだ中々手に入らなかったのである。たまたまこの車が90余万円（修理費は別）で手に入るというのであるが、遺伝研の予算ではどうにもならない。ここは塚本君の腕の見せどころであるが、とにかく入金を打って押えておかなければならぬ。その金がなくて困り抜き、財団法人和田薫幸会から財団法人遺伝学研究所（今の普及会）が借りて間に合わせた。そして

* 前細胞遺伝部長、1966年3月18日逝去、「若葉」1965年No.10より転載

この車の修理にかかってもらったのであった。

さて幌型120馬力のパッカードに塚本、門脇の両君と中野嬢と私の4人が乗って、秋山君の運転で午後1時頃文部省の内庭を出発した。途中中野嬢は芝の大門のところで下車し、われわれは門脇君の布団をとり、多摩川溝の口の門脇君の義兄である根岸さんのところに回った。その当時のこのあたりの道は、道といわれるようなものではなかった。

10月末の陽はどんどん沈んでいく。小田原の手前で日はとっぴり暮れてしまった。いよいよ箱根越えであるので、寒さをしのぐために、また幾らか腹の足しにもと宝焼酎1本とりんご数箇を買った。普通の食物はまだ買えなかったが、焼酎や果実ならば、やっと買えるような時節になりかけていた。いよいよ出発となったところ秋山君がガソリンがないという。あぜんとした。文部省を出るときに十分ガソリンをつめておくよう注意したのであったが、怒ったって致し方ないので顔を見合わせただけである。当時はガソリンは切符制で、しかも1台当たり少量であった。そこで街には進駐軍等から横流れしたものが闇で売買されていたのである。もう7時は回ってしまったであろう。町は薄暗い電燈のともったところだけがポーッと明るい、まず闇である。この暗い中で地の理の分からない者が闇のガソリンを探さなければならぬとは困ったものである。いよいよ今晩は車の中で夜明かしかと覚悟したが、さすがは運転手、しばらくぐるぐる回っている内にガソリンをかぎ出した。

夜も大分おそくなって闇の中を箱根へ向かった。上るに従って濃い霧がたちこめ、寒さはぐんぐん増してくる。今のように車は多くなかったが、それでも時々進駐軍のトラックが濃い霧の中から突然顔を出して肝を冷やした。われわれ3人は門脇君の布団を広げて脚を突っ込み、焼酎を飲んで寒さをしのいだ。11時頃警笛を鳴らしながら門を入ると、松原・大山・小野・宮沢(明)・栗原・西川・薄の諸君と松本・土屋の両嬢が提灯をふって出迎えてくれた。よほど待ちくたぶれたらしい。腹がすいたろうと、玄関の広場には

山盛りの握り飯と沢庵がだしてあった。薄暗い電燈の下にそこだけが白く浮かんで美しい。何年も食べたことのない銀飯を見て目頭があつくなった。そして3年間の設立のための苦闘が走馬燈のように脳底を過ぎ去った。

開業のころ

翌の日からの毎日は全員掃除掃除で明けくれた。ここの敷地や建物は戦時中の中島航空機KKのものであった。初めの中島社長は戦後は文化的の仕事に、この敷地や建物を寄附してもよいような話であったという。しかしこのときにはすでに中島航空機KKは解体し、富士産業KKと名乗っており、すべての財産は日本興業銀行の担保となっていた。その上進駐軍に賠償物件として封印されていた。これの外側だけ、すなわち敷地と建物とを財団法人遺伝学研究所と財団法人興農学園とが共同申請して賠償物件から解除されていたのであった。

玄関を入ると広いロビーがあり、左側前列には小部屋、その左隣りを庶務部長の部屋にした。左側後列には細長い小部屋があって、後に遺伝学普及会と遺伝学会とが使うようになったが、初めは辻田さんが養蚕室とした。右側前列はずっと後まで受付にした部屋で、その右隣りは庶務会計課で、最初は宮沢会計課長・杉生庶務課長（しばらく遅れて赴任した）、門脇・中野・松原・大山・小野・松本などの諸君諸嬢がたむろっていた。電話の交換手は土屋嬢であった。廊下を境えて裏側には暗い部屋があり、後に物置に用いた。あとの部分は左右両翼とも1つずつの大広間であって、会社の古い什器類がほこりまぶれになって一杯入っていた。後に左翼の大広間は講堂と、その控室及び庶務会計課の室に改造したし、右翼は幾つにも間仕切りして研究室にした。その右端は現在通り、リリエンさんの部屋とし、その隣り前後は専売公社の分室に使ったことは大多数の皆さんが知っている通りである。

階上は階段を上った所を会議室に、その東隣りを所長室、その隣りを所長

実験室（これは2年後駒井先生が使うこととなった）。その隣りを私、その隣りが酒井さんと辻田さん、その東側の中広間を古里さんと圃場関係室とした。西側は表裏2つのがらん洞の大広間であった。古里さんの部屋は後に間仕切りして、リリエンさんの室の上は松村さんが入るようになった。これらの部屋の窓は1枚はガラス、1枚は板であった。

今の別館のあるところは戦時中には表の建物と同形同大のものがあったそうであるが、戦争がし裂になった終戦間際に左右両翼を切りとって、私ができるようになってからは、中央部3分の1が残っていたが、これは横浜ゴムKKの希望に応じて売却し、昭和24年の秋には既に取り除かれており表（前）の建物との間の渡り廊下が半分残されていた。

構内には東側圃場の現在桑の植えてある段と私が使っている園芸植物圃場と諸温室のある段（東第2圃場）とには1棟ずつの工場が敷地一杯に建っていた。他の段にも初めは工場の建物があったが、昭和24年秋には、後に東中学校の建物となった鉄骨の建物以外は全部取り除かれていた。建物をとった後の敷地は雑草も生えないやせ地で、マツヨイグサ、ハマヒルガオ、ハマエンドウ、アカマツがわずかに点在するというあわれなものであった。また会社が植えた樹木はヤマモモの外は緑色というより黄色というのが当たっているような小葉を樹梢にしょぼしょぼつけているだけで、枯死寸前という有様であった。

さて以上のような状況であり、10月30日からは毎日が掃除に明け暮れた。もちろん水道はないから下の長泉寺から水をもらって、その井戸水をくんでくるのが栗原・西川両君や若い事務の人達の仕事で、他の人々は泥とごみを掘りだすのに精をだしたが、何遍繰り返しても中々きれいにならない。また雨が降ると2階には柱をつたって雨が滝のように流れこんだ。私がおこなった調査するところにはこんなに屋根は傷んでいなかったのであるが、アイオン台風のため徹底的に傷んだのである。これにはその後3、4年悩まされた。

宿舎としては構内に会社時代の従業員入口（タイムカード室）とトラック車庫とを改造することにしてあったが10月29日にはまだ完成していなかった。われわれはその未完成のものに入った。今鬼丸君と先般まで海老君がいたところには薄君、宮沢君、門脇君の3人が入った。その隣の佐渡君のいるところに私、向井君のところに中野嬢、田村君のところは車庫だった。丸岡君のところに宮沢会計課長、残りの西側の部屋は最初は空いていたが11月になって赴任してきた酒井さんがしばらく入ったし、私も10日間ほど入った。12月には県で買ってくれた町の宿舎が3軒できたので塚本君と酒井さんとがまず入り、年末ぎりぎりに私が町に下った。

11月中頃になると竹倉からの水道も通って、水くみだけは不要となった。しかし電燈は相変わらずホテルの火のようであった。冬の間は研究する材料も設備もないので、床の泥をはがしたり、爆風よけの窓ガラスの紙をはいだりした。私は若い人達をつれて盛んに植物採集をした。また小熊先生のお供をして研究員たちは伊豆の研究所巡りなどをした。

松村さんは任官していたが、京都の繊維専門と兼任で25年秋までは京都滞在となっていたし、駒井・田中の両先生は少し設備のできるまでは、それぞれ京都大学と九州大学とで研究するとのことで赴任されなかった。そのようなわけで、冬の間常駐した研究員は、私と酒井さんの外は伊藤太郎君と宮沢（明）君が主で、古里さんが圃場整備のためときどきやってきたし、加地早苗君と大垣昌弘君が関西から時折あいさつにやってきた。春めいて辻田さんが赴任するようになり、後藤寛治君・遠藤徹君・木村資生君・坂口文吾君等が前後して赴任してきて、研究陳も少しにぎやかになってきた。

春になっても、まとまった研究用の植物の栽培も動物の飼育もできない。養蚕用の桑苗がきたけれども畑を整理する時間も人夫賃もないので、工場跡に無理を承知で植え込むというような状態であった。そのため数年後に新しく東第5圃場に桑を植え、それが大きくなって元の桑畑東第4圃場から桑を

抜き取り、今日のように整理したのである。工場跡には土地をよくするために豆科植物をまいたり、サツマイモをさしたりしたが、最も効果をあげたのは種子無し西瓜である。土壤改良を目的として、工場跡を深く掘って石ころを除き、沢山の堆肥を入れてそれに西瓜を作ったのである。また私は東京で作っていたダーリヤ60~70品種をもってきて、正門横の先年まで中野さんの住まっていた旧巡視室の横に植えた。夏になると種子無し西瓜のできばえは上々で、さすがに研究所であると名をあげた。またダーリヤが見事に咲いて新聞が書きたて、遠近から何人もの見物人が集まった。ともにそれ自身研究しているわけではないが、世間にはまだ余り知られていない種子無し西瓜であるし、幾らか心に余裕ができた頃に珍らしい大きなダーリヤが咲いたからであろう。この2つはその後3~4年間は遺伝学研究所を世間に広める大きな役割をした。しかし研究材料がふえ、人手を西瓜やダーリヤに割くことができなくなり、一途影がうすれたことはご存知の通りである。

酒井さんは長年稲をあつかった方であるから、郷愁からわずかの稲をポットに作ってうさばらしをした。辻田さんは蚕が忘れられず、あちこちと桑畑を追って買いあるき、飼った蚕の染色体を階下東側の大広間で、ごみにまみれて検鏡した。私は野草、殊にヤマユリをとってきて玄関の東側の空地（現在芝生になっているところ）に植えた。しかしヤマユリはバイラスにおかされて花をつけなかった。酒井さんの集団遺伝の研究の1つとしてなされた後藤君のナスビとトウガラシの作柄は上々で、食物の乏しい折柄、研究済のナスビはわれわれの食卓をにぎわしてくれた。

夏になるとリリエンフェルトさんがはるばる米国からやってくるし、専売公社の田中さんたちが来るようになり、段々とにぎやかになってきた。松村研究室の遠藤君がタバコ属の細胞学的研究をやる約束で赴任してきたのであるが、気が変わってやらないので、植物細胞遺伝の室にいる関係上、私はいやおうなしにその研究をはじめた。財団法人遺伝学研究所所属のけちな顕微

鏡を渡り廊下（私はかけだしと呼んでいた）に持ち出して、天然光で検鏡した。午後になると西日がさすので転々座を変えた。何といても専売公社は当時としては大スポンサーであったのであるから。

その頃若い人たちは研究テーマについて大いに討論したし、新しい有名な論文をガリ版ずりにして（紙も活字も悪くてかすれていた）輪読会をさかんにやった。私は眼鏡の度が合わなくて読むに苦労した。食うや食わずで眼鏡までには手が回らなかったのである。

9. 遺伝研創立の頃の思い出

古里和夫*

敗戦の翌年（昭和21年）は虚脱状態の社会情勢と食糧をはじめあらゆる物質が不足し世相は混乱していた。その頃からすでに30数年を経て記憶もうすれたが思い出すままに当時のことを綴ってみた。

この年の春、木原均先生から遺伝学研究所設立の手伝いを命ぜられ先生のお伴をしたり、単独で各所へ出かけたりしたが、その主なる訪問先はつぎのようなところであった。

商工省（下島儀貞整理課長）、文部省、静岡県庁（小林知事、大隅商工課長）、同庁内米軍静岡軍政本部（米軍将校名忘失）、田辺寿之助県会議員（三島市）、三島市役所（花島周一市長）、遺伝学会長増井清先生並びに遺伝学会の諸先生、財団法人興農学園農業科学研究所（理事長白沢保美先生、常務理事田中次郎社長、理事木原均先生、小生、関係者美濃部洋三（元大蔵省主計局長）、富士産

* 〒431-12浜浜松市館山寺町195、フラワパーク、園長；当時研究第1部室長

業（中島飛行機）本社並びに三島工場（工場長）。

候補地の視察

善通寺師団跡を見るために木原先生のお伴をする。

昭和21年8月7日京都駅22時出発、翌朝宇高連絡船にて高松へ着く。町は一面の焼野が原で県庁の四角いコンクリートの建物だけがぼつんと建っていた（帰路先生が県庁へ知事を訪ねられたが、そこへ行くには建物を目がけて歩けばよく人に道を尋ねる要はなかった）。

午前7時善通寺へ着く。駅に松浦町長が出迎えて下さり師団跡を案内される。広い練兵場、司令部などの建物を見て廻ったがどこにも人影はなくなるとしたものであった。

翌9日9時善通寺発高松へ、高松にて知事訪問。連絡船の乗り場附近に露天市があり当時都会では手に入らない白魚の干物を売っていたので木原先生と一諸に買う。

高松から宇野へ着いたところ宿泊予定地の倉敷行列車はすでに出たあとで、仕方なく和気行きに乗る。和気に着いた頃はもう真暗であった。それから町中の宿を訪ねて歩いたが泊めてくれるところがなく万策尽きて警察の駐在所へ訳を話して泊めて貰う。

翌10日早朝静岡へ向かう。静岡では田中義麿・増井清・和田文吾・古畑種基の諸先生と会い一泊、翌日宮崎通之助静岡市長の御案内で大岩、聖一色、用宗などを見て廻った後一同は三島に行き富士産業（中島飛行機）三島工場跡（現在の遺伝研）を見る。

なお手元に残っている木原先生からのメモには「23日16時50分東京発三島着、17時京都より三島着（長岡泊）」とあり24日同工場跡を視察された（増井清・篠遠喜人・梅谷・木原均の諸先生）。

この工場は米軍管理下に置かれていたので最初にその解除を必要とした。

そのため商工省整理課、静岡県知事、米軍静岡軍政本部と交渉の要があった。

この後寒川の明治護謨の工場も見る。

木原先生からその時受けた手紙には「8月31日午前11時22分京都発東上します。同夜は三島にて一泊し翌9月1日7時4分にて三島発東上、茅ヶ崎にて下車、明治護謨の土地を見ます。三島にて貴君に会い度し、山下君同行す。8月24日」とある。

候補地としてはこのほかにもあったが小生は見えていない。

東京、三島、京都の旅

当時汽車に乗るには切符の発売枚数が制限されており、特に遠距離ほど発売枚数が少ないので手に入れることは容易でなかった。列車の運行回数は少ない上に急行がなく常に超満員で窓からの出入が多かった。窓にはガラスがなく冬の夜は風呂敷などで風を防いだが寒風が吹き込み電灯のつかない真暗な客車で互に体をすりつけていた。この頃貨物車も客車代りによく使われていた。

東京駅で始発の窓ガラスのついた列車がプラットホームに入ってくると乗客が窓から乗り込むため一斉にガラスを割りはじめ、そのけたたましい音が構内に響き渡り異様な光景であった。この頃シラミも多く、駅で一夜を明かしたためにうつって困ったこともあった。

しかしこのように苦勞の多い旅ではあったが、敗戦後の国家目標を失った廃墟の中で叫ばれた文化国家建設の一端を遺伝研設立と云うことで少しでも役に立つことができればと思うと九死に一生を得て南方から帰国した身には生き甲斐を感じるのであった。

終戦後東京では旅館は全く営業していなかったので知人宅を頼るしかなかった。木原先生は一時上野の等覚院に泊られて一諸に泊めて頂いたこともあった。

竹中要先生が帰国されてからは宿泊所としておられた東大動植物学教室の地下室へ泊めて貰った。

時々配給の僅かばかりの貴重な野菜を外から持ち帰られ小さな電気コンロに小さな鍋をかけて蒸て御馳走して下さった。

夜は暗い裸電球の下で話し合ったが停電の始まるのが10時頃だったので、その後は真暗になり冷たいコンクリートの上に薄いムシロを敷いて寝た。夜中に床からの冷気が体に伝わり仲々眠られないこともあった。

岡田要先生は自分の教室に泊って居られ、夜になると元気な声をあげながら階段を下りてきて話し込まれることが度々であった。

当時ヤミ市が各所にありここでは外食券がなくても飯を食べられた。新橋駅前のは仲々大きく多勢の人でにぎわっていた。木原先生に当時他では見ることもできなかった豚カツを御馳走になった。その時先生はリュック姿だったように記憶している。

実験圃場の開設と整備

研究所は創設当時圃場がなかったので、それを作ることが急務であった。

何しろ工場跡のため敷地にはコンクリートの床や土台が多くそれらを取り除くために機械力のない時代だったので人力で片づけなければならなかった。その他の大部分の土地も耕土は全くなく固い赤土で草も生えない状態であったが、それでも堆肥を入れれば何とか実験用植物は育ったので部分的に圃場として使い始めた。

当時堆肥は農家から入手できなかったのでワラを買い集め露天で作った。

しかし堆肥作りにも限度があり全面積に使うほどの量はできなかったので、未使用の裸地は耕起を繰り返して土壌の風化を計り、石灰窒素を散布し、土中の有機物増加を試みた。

創設当時圃場の周囲の境界が不明確だったので取り敢えず松苗を目印とし

て植えた。

桜、椿の植林は室長会議で竹中要先生が両種の優秀な遺伝質の失われるのを懸念しその保存の必要を提案され実現することになった。

戦時中は農家自身の食糧確保や食糧供出割当のため苗木の生産は中止状態であったので探すのに苦労した。

関西では佐野藤右衛門氏（京都）、笹部新太郎氏（大阪）、関東では安行方面を訪ねようやく安行の小清水氏から里桜の十年生位の苗20数本を入手することができ構内の中央道路の両側へ植えた。研究所前の道路の両側には安行の知人から染井吉野の1年生苗を入手して植え、また研究所への上り坂の両側には江戸時代に山桜の優秀なものを集めて植えられていた東京小金井の桜の子孫（自型交雑種）を植付けた。この苗は岡部長景先生（元文部大臣）が育苗されていたものであった。

小熊所長とは伊東市逆川へ寒桜の株を買いに出かけたこともあったが、その後竹中先生が各地から多数の種類を集められ保存事業を充実された。

椿は安行の皆川椿花園から分譲して買った。この園は古くから椿を専門に保存、育成をしていたところで戦時中も重要品種保存のため食糧供出割当が免除されていた由である。

玄関前の蘇鉄は沖永良部島自生のものを同島から送って貰ったものである。本館前のコルクガシは渡瀬寅次郎先生が日本へ最初に導入された原木から種子を採って育てたものであり、メタセコイアは木原先生が米国のCHANEY先生から頂かれた苗の1本である。他の処のものはそれから挿木で増殖したものである。

最後になったがナツミカンは天皇陛下が最初（昭和29年11月4日）に研究所へおいでになった折に温室内で鉢に播かれたものである。

以上は創設時の思い出であるが、当時の日本の状況からは今日のように立派に発展した遺伝学研究所の姿を想像することはできなかった。

実に感慨無量である。

10. 遺伝研のできたころ

篠 遠 喜 人*

竹中要博士が書かれた“国立遺伝学研究所のできるまで”(1959年)をよんで、そのころのことがこもごもと思いだされる。竹中さんは京城大学からひきあげてこられ、本郷の東大理学部植物学教室の私の室に寝とまりしておられた。そのころ小熊捍博士を中心とする遺伝研創設の具体的運動が進むにあたり、これの事務運営に専念するものが必要となった。そこで和田文吾博士(東大)と相談して竹中さんを推薦した。上記の竹中さんの記録にあるように、“昭和22〔1947〕年1月竹中は国立遺伝学研究所設立請願に関する事務を遺伝学会長増井清博士から懇望され、それを引受けた”のであり、“それより請願その他に関する事務が統一され、順次軌道に乗ってきた”のである。竹中さんは、“なるべく自己の感情を現わさないように、表面にあらわれた事柄を列記したつもりである”とむすんでおられる。竹中さんはすでに故人となられたが、当時この運動にたいへんな熱情をもって献身されたことは、関係者のみんながみとめるとともに、感謝したことをここに銘記したい。政府すじと関係諸官庁とに、県や市、また農地関係に、日本遺伝学会と関係学会、諸団体に、占領軍総司令部にと、諒解、請願、協力後援の懇請などに、私たちは手わけをしてでむいたが、それらはみな竹中さんの采配にしたがったとってよい。とにかく、考えられるだけの方法を練り、見透しや手順をつけ、熱心に各方面にでむいて、ねばりにねばったという感がひじょうに深い。

竹中さんが忠実に始終を記録され、宮山平八郎博士(当時の文部事務官で現麻布獣医学大学教授)が、“国立遺伝学研究所設立記念記”、“遺伝学研究所設立に至るまで”などをかいておられるので、遺伝研設立についてもはや加え

* 〒154 東京都世田谷区弦巻5-6-16-315; 当時東京大学理学部教授

ることはないが、田島弥太郎所長のなにか思い出をしろすようにとのおことばにより、私ごとが多くなるが、すこしく記して創立30周年をお祝いすることにいたしたい。

大戦のとき、東大理学部植物学教授の遺伝学講座と植物学第4講座とを担当していた私は、若い命と貴い機械器材、研究と教育との伝統をまもるため、関係職員と家族、大学院学生を加え、30余名とともに、山梨県韮崎在の塩崎村駒沢に疎開し、農家に分散居住し、ある農家の蚕室をあてた研究室にかよい、畑を実験圃場とした。また藤井健次先生と牧野富太郎先生とのご両家とは、1里余山の上の農家に、韮崎駅からリヤカーにおのせして、みなしておしあげ、藤井先生はお倉に、牧野先生は蚕室にお住いになった。前面には富士山が美しくたち、そのまわりをB29がめぐって東京方面にとびさるのがみえた。

8月には終戦の大詔を、私たちは駒沢できいた。塩崎研究室は翌年3月本郷にひきあげをおわり、室員はそれぞれひきあげていった。

そのとき、戦争と敗戦とでうちひしがれた日本の、ことに学会のみじめさを私はひしひしと感じ、これが希望へとたちかえるにはどうしたらよいかと考えた。塩崎研究室の諸設備で疎開させたものはすべて東大に正式な手続きをして返還した。残った多くの不完全な設備をととのえて、ここですこしでも研究と知識の普及とをしようと考えて、藤井・小熊・木原先生方諸先輩にご相談して、昭和21(1946)年7月に、“染色体研究所”を設け、機関誌“染色体”を創刊した。なぜここに私がこれを記してきたかといえば、これが国立遺伝学研究所設立運動にすこしく関係をもつからである。

染色体研究所は、1947年4月25日に文部大臣の許可をえて、財団法人となった。

このころ、前記のように、遺伝研設立運動が進められていた。そこで(財)木原生物学研究所長の木原均博士と(財)山階鳥類研究所長の山階芳麿博士

とはかり、事情によっては、この三つの研究所は合同しても一つの研究所をつくり、国立にもっていこうと申しあわせをした。

竹中さんが記されたように、いろいろ曲折をへて、国立遺伝学研究所がついにできることになり、3研究所の併合の必要もなくなったが、(財)染色体研究所は、その所有の機械器具類を遺伝研(初代の所長は小熊捍博士)に提供して、財団法人染色体学会に寄付行為の変更を文部大臣に申請し、1967年8月28日に許可をえて今日に及んでいる。(竹中記録のP164に、染色体学会とあるが、当時は染色体研究所であった。)

文部省がわとして尽力された科学教育局長の清水勤二博士のことは竹中さんの記録にもたびたびでるが、すでに故人である。1932年に文部省の海外研究員として清水さんと同じ靖國丸の同室で、インド洋を40日も親んだのであった。遺伝研設立には、占領軍総司令部の承認をえなければならないが、これが意外に難行した。私は主としてD.W.H.LeonardとDr.Vivian Edmistonに面会してたのみこむ役にまわった。これが縁で、このお二方とはごく親しくなり、そのご米国のご両人のお宅には再度あがっておもてなしにあずかった。レナードさんは先年なくなられたが、エドミストン女史(いまはTodd夫人)は昨年東京にこられた。いまでもコドモの科学教育に心をよせておられる。

清水さんのあとをうけて科学教育局長になられた茅誠司博士は司令部のDr.Kellyとは親しく、遺伝研設立についても尽力されたことが、竹中記録にもでている。

竹中さんが“一つのエピソード”として記されたタネナシスイカと片山首相とのおはなしは、私も同席したのでよくおぼえていて印象がふかく、そのごも語り草となったので、ほかの方も記されると思うが、ここにくりかえしておきたい気がする。

1947(昭和22)年8月27日に、首相官邸で私どもは、議会からおかえりに

になるのをおまちした。この会見は有光次郎文部次官のおとりなしで、文部省からは、次官、中西勝治研究助成課長、こちらは木原均・増井清の両博士に篠遠も加わった。汗をふきながら入ってこられた首相は、はじめに、遺伝研の設立理由とお願いとをきいてくださった。そのあとで、木原博士はまずふつうのスイカを二つに割られた。たくさんの黒いタネが目に入った。つぎにもう一つの同じような大きさのスイカにナイフをいれてまっ二つになった。そこには美しい紅色の肉だけで黒いタネは一つもなかった。

首相は、“ホーこれは科学の魔術だ!!!”と声をあげられた。

“ふつうの魔術にはタネがあるが、科学の魔術にはタネがない”と、一同を笑わせられながら、みなとなごやかに、この珍品を味わわれた。

一度、閣議で否決された案が復活するのは珍しいといわれたが、国立遺伝学研究所はついに実現した。首相に直訴ともみえるこのタネナシスイカの実演の効果が、どれだけ役にたったかどうか、コンピューターもまだ示してはくれないが、とにかく私たちの遺伝研は、もう創立30周年をむかえる。ますます発展を祈ってやまない。

11. 忘れ得ぬ思い出

増井清*

遺伝学研究所設立に関して遺伝学会役員会は、早くから（昭和14年10月）北大教授小熊博士の主張に基づき、国立の研究所を設立することに意見がまとまり、政府及び議会の有力者に働きかけていた。筆者が設立運動に携わっ

* 〒251 藤沢市善行3-15-5; 当時東京大学農学部教授

たのは、昭和21年4月遺伝学会会長としてであった。この時学会に研究所設立準備委員会を設けて、すでに話しのまとまっている線に沿って活動したに過ぎないのである。

総理大臣を初め、関係各大臣、衆参議員の有力者に国立遺伝学研究所設立一本槍で働きかけたのである。多くの方々は、賛成して下さったのみならず、松村真一郎氏のように積極的に援助して下さった方もあったが、それぞれ卒直に意見を述べられた。それらの中で筆者の感激したのは、田中文字部大臣の意見であった。

文相は、遺伝学研究所設立には異存はないが、国立の研究所ではどうかと思う。研究所は、学術的研究をするのであるから、学者が主体となるべきで、官僚は助成連絡にあたるべきではないか、というのである。つまり、国立研究所では学者が自由に活動できないではないかというのである。

すじの通った考えではあるが、研究所を設立するには莫大な経費を要する。一とまず国立研究所を設立し、機を見て組織を変換することを主張された方々もあった。

研究所は間もなく創立30年を迎える。この長期間にわたり、研究員は学者として自由に活動し、世界的に知名の研究所に発展してきた。しかし問題はこれからである。できればこの際学者を主体とし、そしてこれまで以上に自由に研究ができるように発展して行くことを熱望する。

第2の思い出は研究所敷地に関する問題である。研究所が三島市谷田に建設することに内定した時のことである。この土地は中島航空機株式会社が軍の力で強制的に利用したものであるから、元の所有者に開放されたいという運動が起っていたが、研究所建設予算の編成に当り（昭和24年8月23日）関係官庁のお役人5名（？）が候補地の視察に三島市え来られて、農民代表者とお役人とが会合し、交渉が行われた。筆者は研究所設立委員とし座長となって会議を進めた。

会場は蓆を旗にして100名余の農民が威嚇包围し、穏かならぬ会議であった。農民の反感はお役人に集り、筆者に対しては至って穏かであった。筆者は研究所ができると農作物の品質改良にも力を入れる。決して農家の方々にとって不利にはならない。農家の方々は研究結果を自由に利用できると説得した。農家の方々に筆者に対しては至って好意を持たれ、会議も何ごともなく終了して事務所へ引上げると事務室には筆者より一足早く、数名の農家の方々が待ち合せていて、先生のお話しくよく研究所の仕事の内容を理解することができたと感謝して帰られた。農家の方々がお役人に反感をもつお陰で、筆者の考えが心よく受け入れられたように感じた。

12. 国立遺伝学研究所創設ころの思い出

山下孝介*

国立遺伝学研究所（遺伝研）は学術振興会第四特別委員会（通称四特）の諸先生（古畑種基・木原均・駒井卓・増井清・小熊捍・篠遠喜人・田中義麿その他の諸先生）の御肝入りで設立されることになったのでありますが、それに先立って財団法人遺伝学研究所が組織されました。理事長は東大農学部畜産学教室増井教授（現在は名誉教授）で同教室に事務所が置かれました。この間の事情については創立25周年記念誌に詳しく述べてあります。所長は小熊捍先生、所員には多くのかたがたの名が挙げられていましたが、地方分散のままで研究を促進することになっていましたので竹中要さんが専任として諸事をきりまわして居られました。竹中さんは外地（京城大学）から帰ら

* 〒233 横浜市南区六ッ川3-122-21木原生物学研究所；当時京都大学教養学部教授

れて間もないころで、研究室暮らしをして居られました。私もこの研究所のメンバーの1人で、木原均先生のもとに京都勤務という優遇をうけていました。時折上京しては竹中さんの御手伝いをしました。

はじめて遺伝研の敷地を見に出向いたのは私であったと思います。木原先生からの紹介状をもって三島市長の花島周一さんを訪ね、当時賠償施設になっていた中島飛行機発動機製作所工場の跡地を見せて貰いました。五万坂の赤土混りの石ころ道に沿って竹やらいの囲いがめぐらされていました。私はたぶん膝や肘につきの当たった国民服を着ていたと思います。ついこの間三島を訪ねた折に乗ったタクシーの運転手は「あそこは子供のころ昆虫採集に走りまわったところです」と話していました。

竹やらいの間からのぞき見た様子を木原先生に報告し、ここが有力な候補地として取り上げられることになりました。私がこの様な敷地を物色してあるいていましたのは、当時向日町物集女にあった木原生物学研究所の移転候補地の物色ということがあったからだと思います。

三島が遺伝研の候補地として決められるまでに、四国の善通寺の師団の跡地や静岡県軍需工場跡地その他を見て廻ったことを思い出します。いまになっても何故三島に定まったのかといういきさつをきかれますが、それはそのまま研究棟として利用できる建物と広い実験圃場用の土地があったからで、研究所誘致というような政治的な働きかけは皆無であったと思います。

三島は東京から遠くて不便だとか、子弟の教育環境がよくないといったような反対の声もありました。

候補地が三島に定まることになりましたので前述の諸先生や(財)遺伝学研究所関係者の方々、久連の興農学園の古里和夫さんらがしばしば三島に来られることになりました。修善寺行の伊豆箱根鉄道の田町駅の近くにあった三芳館という旅人宿がこれらのかたがたの常宿でありました。そのころは木造の田舎宿風でありましたが今では改装されてアパート風のモダンなホテルに

なっています。

実際三島に遺伝研が創設されて、そのころ赴任された研究員や事務職員のかたがたにはたいへん御苦労があったと推察します。三島駅から遺伝研までは徒歩であることがふつうでしたが、近くに学校施設もなく、日々の生活のための買物も不自由であったことと察せられます。

30年たった現在の状況は全く変わって来ています。今昔の感にたえないというのはこのことでありましょう。新幹線の駅もでき、市内バス網は四通八達、遺伝研の近くには幼稚園から高校まで建設され、駅の近くには日本大学の学舎もできています。遺伝研の近くにはスーパーマーケットさえできています。

遺伝研創立25周年記念誌が出版されたのはついこの間の様に思いますが、はや5年の年月が過ぎて30周年記念誌が出される時ききますと、年月の経過はことのほか早く、5年が1ピッチのように流れて行くように思われます。この向きですと、この先50周年60周年…というピリオッドもすぐにやって来るような気がします。70才という日が近い私の年令のせいでありましょうか。

Ⅱ. 研究活動の始まり

13. 遺伝研創設の頃と駒井卓先生の思い出

木村資生*

創設時代の遺伝研が小熊捍、駒井卓、田中義麿という当時の日本遺伝学会の長老を中心に、また木原均をはじめとする遺伝学会の実力者の支援の下に発足したのは今から考えると大変幸運であったと思う。これら三長老はいずれも若い頃に外国へ留学し、先進国欧米での研究のありかたを知り、また世界の有名な学者の幾人かとも親交があった。特に駒井先生の国際感覚は抜群で、片田舎の三島に出来たばかりの遺伝研を世界の遺伝学の流れに接続する上で余人をもってしてはかえがたい役割を果たされた。もし、これが外国留学の経験のない次の世代の人たちであつたら、とてもこんなふうにはいかなかったであろう。やがて私や飯野徹雄氏（現 東大教授）がアメリカ留学出来たのも駒井先生のお力添えに負う所が大きく、先生からの御援助なしに私は到底現在の地位を築くことは出来なかったと思う。

これら三長老はいずれも学者らしい感じのする方々で、大学教授を停年でやめられた後三島へ来てここに学究的な雰囲気を植付けられたのである。所長の小熊先生にしても、どうしたら良い研究所が作れるかについて確かな感覚を持っておられたように見える。世間に多々あるような管理中心で、所員の才能を伸ばすより、不満を平等化することに腐心するといった感覚の持ち主でなかった点も実に良かったと思う。たとえば、小熊先生は文部省と掛け

*集団遺伝部長

合い研究員は超過勤務手当を受取らぬ代りに、通常の勤務時間に縛られなくても良いという約束を文部省から取付けてこられた。この伝統は後になって研究員にも超勤手当がつくようになって消え去ったことは私には残念なことに感じられる。これに関連して思い出されるのは、私が今から十数年前に招かれてウイコンシン大学にある数学研究所（マセマティックス・リサーチ・センター）に行った時のことである。この研究所はアメリカ陸軍から財政的援助を受けて運営されていたが、ここへ着いた日、所長のランガー博士から手渡された所員のための心得えなどをするしたパンフレットの冒頭に「研究者には一律に決まった勤務時間などというものは存在しない。各人は自分にもっとも適した時間割で研究に専念すべきものである」とあった。さすがはアメリカの研究所だと感心したことを覚えている。もっとも、アメリカでは業績評価に関して日本とは比較にならぬ程の厳しさがあるので、両者を同列に論じることは無理かも知れない。ともかく小熊先生が遺伝研をなんとかして立派な研究所に育てたいという悲願というか意欲は大変なもので、当時は所員が論文を書くとき、これを所長室に持参し、小熊先生はそれを見て、手ずからコントリビューションナンバーの帳面に著者名と題目を丁寧に書込まれた。第1号は駒井先生がGENETICS誌に出されたものである。業績の有無が遺伝研の興亡につながるという真剣さが感じ取られた。これに比べると発表論文の数が1,200を越え、他人の論文の発表の事など大して誰も関心を払わぬ現在とは大変な違いであった。

田中義麿先生はわれわれ若い者にはうわさに聞いたようなこわい先生という感じはなく、今から考えると厚かましい気もするが、私などほとんど対等なような顔をして遺伝学の問題を論じ、先生の御意見に反論することもしばしばで有ったが、先生はそれを頭から押えつけられるようなことはなかった。当時、先生はカイコで量的形質に選抜を加えると、加えた方向に世代と共に変化が起るのを遺伝子そのものが変わるという概念で説明しようとして熱心

にやっておられた。英国ではK・マザーの有名なポリジーンの本が出た頃で、私の方はそんなものはポリジーンの選抜で説明出来ると申し上げたが、先生は一向に耳をかそうとされず、ある時さんざん議論した末先生は「君の言う事はワシには全部分かっているが、君はワシの言う事が分かっていない」と主張された。カイコでの変化は「不安定遺伝子」の変化によるもので、ポリジーンの選抜によるのではないと言うのが先生の主張であったと思う。田中先生が九州分室をたたみ、三島に移って来られたのは昭和26年の10月末か11月の初め頃で初めは独身寮に住まれたので先生と議論をたたかわす機会が多かった。その後田中先生は私がアメリカ留学から帰った年の翌年の昭和32年に日本学士院会員になられ、皆で祝賀会を行い私もお祝いのことばを申し上げた記憶がある。話が前後するが創設時代は戦後間もない頃で、もう、年寄りだめでこれからは若い者の時代であるとマスコミでしきりに言われた時代である。当時室長だった竹中要氏なども、年寄りの三先生が頑張っておられるようではだめだからはやく引退してもらい研究所の若返りをはかる必要があるとしきりに主張しておられた。大学を卒業して間も無い私もそれに大いに共感を覚えたが今考えるといささか恥ずかしい気もする。事実30年近くたった今振り返って見ると、遺伝研退職後も大著「遺伝学に基づく生物の進化」を含め次々と労作を発表された駒井先生の活躍を見ても、ほんとうにだめだったのは決してだめだと批判された側でなかった事が痛感される。その頃、遺伝研には停年制はなく、小熊所長が研究所年報第2号に本研究所の性格の一つとして「大学においては停年制によって、能力の如何に拘わらず研究者は一定の年齢に達すれば研究の場を見捨てなければならない。しかし本研究所では研究者の能力が衰えない限り、その人の能力を十二分に使って学問の進歩に資することができる。」と述べておられる。これなど現在では想像しがたい事かも知れない。

当時、非常な勉強家でわれわれ若い者をひきつけたのは室長の酒井寛一氏

(現 名誉所員)でこれに対し竹中さんは遺伝学の最先端の問題に弱気で「ワシは新しい学問の進歩にはついて行けない。新しい事は若い君等がやってくれ」といった調子で、タバコの染色体を調べたり、サクラ、アサガオの交配やツバキの品種集めに熱中しておられた。竹中さんは終戦直後苦勞して朝鮮から引揚げられたが、それが竹中さんの人生観に大きな影響を与えたようである。振返って見ると、当時の竹中さんは現在の私より10才近く年下だったわけで、それだけ私自身が年をとった事を感じざるを得ない。そんなふうに、竹中さんは学問的には弱気であったが運営面では小熊所長の補佐役として遺伝研の発展と所員の融和に努められた事を記しておきたい。小熊先生は自らは研究はされず、所長職に専念され、学問的な面は駒井先生が受持っておられた。若い研究員の教育やお互の勉強のために遺伝研で外国論文の抄読会を始められたのも駒井先生で、第一回は昭和25年2月の初め頃酒井さんと、当時研究員として着任されたばかりの加地早苗氏(現 甲南大学教授)の両名が話されたようである。

わたし自身は研究員としての発令が昭和24年11月であったが実際に三島に着任したのは翌年の3月の終り頃だったように思う。京大の木原研究室を去って、三島に赴任して感じた事は京都に比べ余りにも大きな文化的な落差であった。わたしは駿豆線田町駅の近く、奈良橋の農家に下宿したが、この家は当時庶務部に務めていた小野久雄氏の実家で、その離れに住み、その家族の方にいろいろ親切にいただいた。そこから毎日研究所に歩いて通勤したが、一人ぼっちで急に京都が恋しくなった事を覚えている。当時は遺伝研の周辺には家らしい物はほとんどなく、坂下の駄菓子屋とその近くにある銭湯ぐらいしか目につくものはなかった。研究所の坂の道の悪さも大変なもので、ひとたび雨が降ると泥沼と化し、ゴム長靴でぬかるみと悪戦苦闘しながら坂をのぼっていった。三島に来てせめて良いと思った事は朝夕のすばらしい富士のながめであった。特に夕方の姿には見とれる事が多かった。それ

と背後にある箱根山や遙か彼方に見える伊豆の山々の姿も美しいと思った。もう一つ思い出す事は、午後四時頃になると、どこともなくスピーカーから「春の海」の音楽が流れて来て、なんとなくのどかな気分になった事である。また、市の各所に豊富に流れ出る澄んだ湧水も魅力的であったが、この方はほとんど見られなくなったのは寂しい。当時、研究所での会議は物を買う時など研究員も含め全員が参加した。もっとも、研究員の数はせいぜい数人とあったところで全部集まってもしれた数であった。研究所は戦争中中島飛行機の工場の事務系の建物だった物をそのまま受継いだ天井もろくについていないガタガタの木造であった。研究機関としては最悪の状態で、外国雑誌どころかガス・水道もなく（ただし水は竹倉から井水を引いて使っていた）、それこそないないづくしであった。終戦後間も無い、世間にも物資の乏しい頃にショウジョウバエの餌を作るための寒天や黒砂糖も貴重品であった。わたしは集団遺伝学の数理的研究を志していたが、GENETICSその他の重要な外国雑誌が研究所にないので新しい文献を読むには東大の図書館まで出掛けて行かなければならず大弱りした。

そんな訳で昭和26年の春になって、研究員になって1年半ほどたったばかりの大垣昌弘氏（現 大阪府立大教授）と加地君がこんな所で働いていたのではとても将来の見込みがないと遺伝研を去り、関西の大学に赴任して行ったのは無理からぬ事であった。わたしも、もっと良い所へ移りたいと思わない訳ではなかったが、行く先もなく、集団遺伝学の計算に専念していた。しかし、昭和25年の夏の前からしばらく京都分室（京大の木原研究室）に行く事を認めてもらい、三島を逃げ出すように京都へ帰った。この夏竹中さんが理学博士号を受けお祝いの会を三島でやったというニュースなども京都で受取った事を覚えている。京都にいと、三島に帰るのがいやなので滞在も一日押しになりわたしが三島に一向に帰る様子を見せないで9月になって駒井先生から「万障を排してこちらに移って来るように」という駒井先生とし

ては珍しくきついお手紙が来た。その頃の事で忘れられないのは昭和25年にアメリカ輸入のモンロー電動計算機の当時としては最高の機種を42万円で買っていた事である。(丸善が戦後輸入した第1号であったと聞いている)。当時、遺伝研で買った小型トラックが39万円で、また、わたしの月給が二千数百円だった事を考えると、わたしも結構優遇してもらっていたことになる。

所長の小熊先生は昔風のこわい先生のはずであったが、気さくにわれわれ若い者に接して下さった。昼食後は日課のようにわれわれを引連れ近所の丘などへ散歩に出掛けた。北海道から研究員として赴任した後藤寛治氏(現北大教授)、加地、大垣の両君、わたしなどが常連であった。加地、後藤両君は同年輩だったせいか接触が多く研究の合間にいろいろの事を話合ったり、日曜日には一緒に沼津などへ遊びに行ったりもした。後藤君は酒井さんのもとで遺伝育種学の勉強中で、加地君は発生遺伝学の研究を志していたように思う。今でも覚えていることの一つは、加地君がわたしのやっている集団遺伝学の数理的研究がピンとこないというので、同君に対し「僕は数学を使って自然現象を記述するのにすごく魅力がある。」と言ったことである。それから18年後にわたしは分子進化と集団遺伝学の拡散モデルとを結びつけ、分子進化中立説の形でこの夢をささやかながら実現することができたと思うと感慨が深い。もう一つ忘れられないのは昭和26年4月にアメリカの遺伝学者H. J. マラー博士がインド旅行の帰りに日本に立寄り、三島の遺伝研を訪問された時のことである。マラー博士は(その頃みんなはミュラーと呼んでいたが)、会議室でわれわれを相手にアメリカにおける遺伝学の進歩について話された(写真18)。今でこそマラー博士は今世紀における最大の遺伝学者という評価が固まっているが当時われわれの知っていたのはエックス線によってショウジョウバエで遺伝子の人為突然変異を起こさせてノーベル賞を得た学者であるということ位で、日本の生物学者にもその偉大さは余り知られていなかった。マラー博士の講演があった数日後だったと思うが、岡田要氏(故人で

当時は東大教授) が遺伝研を訪問されわれわれを相手に「あんな者は学問的な深さがなく大した事はない。」と放言される有様であった。わたしは英語も分からずマラー博士の話の内容そのものも程度が高すぎて何も理解できなかった。そのあとで同博士は小熊、田中、駒井先生などと一緒に各研究室を回られ、われわれはそれぞれ自分のやっている仕事をたどたどしい英語で説明した。わたしは有限集団の中で遺伝子の淘汰係数に偶然の変動がある時遺伝子頻度の確率分布がどうなるかを計算していたのでそのグラフを用いて説明したが、くどくどしていて要を得なかったと見えマラー博士は「要約するとどうなるか」と言われたらしいがその英語の意味すらわからずそれを田中先生に教えていただく有様であった(“nutshell”と言うその時の英語が今も忘れられない)。しかしその頃 S. ライトと R. A. フィッシャーとの間の論争は集団進化の分野で有名であったからマラー博士にはわたしが何の目的でやっているかすぐに分かった様子であった。その後になって酒井さんの所へ研究生としてやってきた東海大学の数学専攻の若い人がいて、その人を相手に確率過程の数学的扱いを議論した。今でも覚えているのは吉田耕作著の物理数学概論を買ってきて、偏微分方程式の境界値問題をいっしょに勉強した事である。

私が集団遺伝学の数理的研究に志すようになった動機は、数理遺伝学に対する興味からで、それは細胞遺伝学と関連して生じたものである。昭和18年頃、第八高等学校の生徒だったとき、生物学の熊沢正夫先生が講義の中で木原博士による小麦のゲノム分析を説明され、それが世界に誇るべき業績であることを述べられた。私はそれに大きな興味をおぼえ、自分で細胞遺伝学を勉強するようになり、やがて確率や統計の知識と雑種染色体の行動とを結びつけたら面白いと考えるようになった。八高卒業後、京大の植物学科に進んだが、ワディントンやドブジャンスキーの本(当時は海賊版のお世話になったと思う)を通し、進化機構の研究に数学が使われることを知った。学生中

に読んだのは主としてホールデーンの原論文で、良く出入りした木原研究室の仕事にも刺激され、いろいろ自分でも計算を行った。ライトの論文に取組んだのは植物学科卒業後、木原研究室に置いていただくようになってからで、周囲に教えてくれる者はだれもおらず、ライトの有名な1931年の「メンデル集団の進化」の論文を前にして、たとえ十年かかっても理解したいと決心したことが忘れられない。やがて、遺伝研が出来、木原先生のお世話でここへ就職することになったが、私の集団遺伝学の知識は当時全く独学であった。

遺伝研へ来てからは、駒井先生に大変お世話になったが、私が数理集団遺伝学の研究に着手するようになったのは駒井先生の御指導によるものではない。この点、一部に誤解があるようなので、この機会にはっきりさせておきたい。

小熊所長は所員の融和をはかるといふ点から親睦会には特に熱心であった。これに関連し若葉会の由来を記しておきたい。昭和25年の春も終りに近い頃で、若葉の美しい季節だったが、箱根へ研究所から遠足に出かけた。その時親睦会の名前をつける事になり一同から名前を募りその中から投票で選ぶ事になった。一人でいくつ名称を応募しても良いというのでわたしは何十も作って出したところ他の諸君全部が出した数に負けぬ位になり、結局わたしの出した「若葉」が運良く当選し採用になった。その賞品として、当時会計課にいた門脇君からもらったのがワイシャツ1枚で、どこから仕入れて来たのか、やせっぽちのわたしですら窮屈で着られないような代物で、結局使い物にならなかったことを覚えている。物のない時代らしい話である(写真23)。

そうこうしているうちに研究環境の方もすこしずつ改善されていったがこれは小熊所長、駒井・田中両部長、さらに研究所の中堅の人たちの努力のたまものであったと思う。外国文献の方は昭和26、27年にかけてゴールドシュミット文庫が購入され、また遺伝研の図書室としても外国雑誌を少しずつ購読するようになり改善されたがそれでも物資の乏しい時代で困難が多かった。

昭和26年の春には研究所の構内に独身寮が出来、わたしは4月に奈良橋の下宿を引払ってここに入った。この独身寮に寮母役となってこられたのは戦争未亡人の宮内千枝さんでこれは塚本盛平庶務部長の時である。宮内さんは最近停年で退職されたが、昭和26年以後長い間入居者の世話をされ、わたしを含め当時若かった研究員の多くがお世話になった。独身寮の個室は南に面し、残り三方が壁に囲まれた構造で通風が極く悪く、ひさしが短いので日が差込み、夏になるとまるで蒸し風呂の様な暑さになった。わたしは暑さに敏感な上に、生来胃腸が弱いので、入居した年の夏にはすっかり体の調子をこわしてしまった。それで、運動と気晴らしのために研究所の裏山には毎日のように散歩に出掛けたものである。箱根のはじまりとも言えるこの地帯はわたしの郷里の岡崎市の山野に比べ植物の種類が豊富で植物の好きなわたしを楽しませてくれた。胃腸の調子が悪い事を駒井先生に訴えと、先生は御自身が胃下垂で胃腸が弱く苦勞された事や養生法などを親切に話して下さい。次の年になり今度は夏にどうなるかと心配したら先生は研究費から旅費を工面して下さいって北大へ出張の形で避暑に行くよう取計らって下さい。その頃駒井先生は御殿場の別荘から沼津を通り三島へ通勤しておられた。わたしが北海道に立つ日は先生と沼津まで御一緒に行きそこでお別れした。当時北大では友人の倉林正尚氏（故人）が理学部植物学教室の細胞学の助教授で、札幌では同氏に大変御世話になった。医者にもさんざんかかったが胃腸の方は少しも良くなりずわたしを大変不幸にした。これはアメリカへ留学するまで治らなかった。しかし、昭和28年にフルブライト留学生となり夏に横浜を立ち氷川丸で2週間船に揺られ、続いてシアトルでオリエンテーションを受けている間にそれまでの2年間わたしをさんざん悩ました胃病はすっかり良くなった。これがアメリカ留学を一層楽しいものにした事は間違いない。昭和31年に帰国した後、10月からその翌年の1月まで独身寮のお世話になったがその後は市内に移り、夏通風が良く涼しい所に住み通勤には毎日なるべく

歩いて運動するように心掛けることにした。おかげで胃腸は弱いにしても、なんとか人並に働けるようになったのはありがたい。ともかく、独身寮の事を考えると、どうしてこんなばかげた構造の建物を造ったのか、徒然草にも家は夏涼しく造るべきであると書いてあったように思うが、これを設計したのはどんな建築屋だったか今考えても腹立たしくなる。話を昭和27年頃にもどすと、私は胃腸の調子が悪い事や、自分の仕事が余り周囲から認められないという感じや、いろいろな事で何となく厭世的な気分になっていた。そんな遺伝研発足後3年ほどたった時の事であるが、せっかく出来た遺伝研がつぶされはせぬかとわれわれを心配させた小事件が起きた。正確な事は覚えていないが、行政改革のため政府が作った委員会のようなものの委員長が統合廃止すべき政府機関のリストを報道関係に流し、中に遺伝研が入っているというニュースだったと思う。この時の事情をもう少し詳しく知りたいと思い、庶務部の関根係長に助けていただいて当時の研究所の室長会議の記録を調べたが具体的な事がどうしても分からない。しかし昭和27年の3月から4月にかけての室長会議の記録を見ると協議事項の中に「行政機関の統合廃止について」とあり、「かねて新聞紙上に報道されていた事について」近日中に所長が文部大臣に面接し折衝するか文部委員、学術会議会長などに何等かの手を打ってもらうとか書いてあるし、また別の記録には「駒井部長が文部大臣に面接懇談の結果研究所は絶対廃止しないと言明された」とあることなどを見れば当時としては研究所にとってかなり重大な関心事であった事が伺える。わたしなどもやっと軌道に乗った遺伝研がつぶされはせぬかと気がかりであったが、駒井先生は「そんな事をくよくよよしないでも良い。大丈夫つぶれたりなどしないから。それに、つぶれたって木村君はまたよそが雇ってくれるだろう。」と言う意味の事を言われた。幸いこの問題はしばらくして立消えになった。

その翌年の夏わたしはアメリカ留学のため三島を離れたが、私の留学中(昭

和28～31年)に起きた大事件は、遺伝研の横の中学運動場だった場所(現在は遺伝研の土地)に三島市が過酸化水素の工場を誘致する話が持上った事である。もしそんなものがきていたら今ごろ遺伝研などどうなっていたか分からない。これについては当時室長だった辻田光雄氏(現 名誉所員)が思い出話を書かれるはずである。この時研究所におられた人たちの心労は大変なものであったと聞く。幸い三島市の見識のある有力者の助力もあり、事無きを得たが後になって田中義麿先生が口ぐせのように言っておられた話がある。それは、先生が当時の三島市の市会議長の所へ陳情に行ったら、誘致反対に協力してくれるどころか「もっともっと工場を誘致し三島中に工場の煙突を林立させてみせる。」と見栄をきったとかで、一時はどうなる事かと心配されたという。

これに関連して思い出すのは後(昭和39年)に起こった三島地区石油コンビナート誘致問題とその時市長をしておられた長谷川泰三氏、さらに遺伝研所長だった木原均先生と今は故人になられた松村清二氏(当時変異遺伝部長)の事などである。長谷川さんは遺伝研の創設当時は長谷川木工の主人として研究所に本箱、机、その他の家具を納めるためよく出入りされた。今でも記憶に残っているのは昭和27年頃私が友人の建築家の設計図で作ってもらった本箱のガラス戸がそってしまって開閉がうまくいかないの、文句を言ったら自らやって来てカンナをかけてくれた事である。市長になられてからも、不思議とわれわれ遺伝研の者と付き合いがあり三島市として遺伝研のためいろいろ便宜をはかるよう配慮されたと聞いている。遺伝研ともっとも深いかわりは石油コンビナート問題を通してであろう。当時これは私にとっても重大関心事で、もしコンビナートが三島に来たら煙突から出る亜硫酸ガスのため喉の弱い私などは健康を害し到底三島にはおられないと心配した。幸い市民の反対運動が功を奏しコンビナートが実現しなかった事は実に幸運であったと思う。忘れられないのは当時所長だった木原先生がコンビナートに強く

反対され長谷川市長の要請を受入れ松村さんを団長とし、さらに松永英人類遺伝部長も重要なメンバーとして加わる調査団を作るよう配慮されたことである。こうして出来た松村調査団は政府がさし向けた御用調査団に対し独自の調査を行い、コンビナート公害の重大性を市民に警告する報告書を作製した。これが長谷川市長をして誘致反対の決断を下させる大きな理論的支柱となった。

この事件を思うたびに、わたしは、その時の所長が木原先生で、公害問題に見識もあり政府の役人も一目置くような人だったから良かったが、誰か別の事なかれ主義のスケールの小さい人だったらどうなっていたらうか、また何よりも、その時の市長が長谷川氏でなく、政府に密着した、大企業に弱い保守系の人だったらどうなっていたらうかと考え、長谷川・木原の取合せが幸運だったと感ぜざるを得ない。

話しが脇道にそれたが、わたしが留学から帰る前に小熊先生は脳軟化症にかかれ所長職を去られ、代わりに木原先生が所長に就任された。幸い小熊先生はその後すっかり快復され小田原で小鳥や草花を相手に長く余生を送られた。先生は随筆の名手で「遺伝」とかその他の雑誌に実に上手な詩情あふれる文章を発表された。その随筆集によってエッセイスト賞を得られたのもその時代であったと思う。われわれは時々先生を小田原の御宅に尋ね研究所の事などをお話したものである。

わたしがアメリカ留学から帰ったのは昭和31年の夏で、日本で初めて開かれた国際遺伝学会議の直前であった。この秋、駒井先生は遺伝研を退職され11月3日に三島駅を立って京都に去られた(写真19)。その頃駒井先生のもとで研究補助員をしておられた平塚(旧姓 内藤)幸枝さんが、現在は城の内に住んでおられるが、平塚さんから伺ったりわたし自身でも思い出すその頃の事をちょっと記しておきたい。先生は巻貝の多型を集団遺伝学的に調査し、また人類遺伝学の研究としては小頭症の家系を調べておられた。その頃研究

対象となった小頭症の人が（二人いたうちの一人が）三島駅の前をよくうろついていた。駒井先生が立たれる日に、この小頭症の人も丁度駅にいた。

三島での駒井先生の生活は極めて規則正しく、城の内官舎から徒歩で朝9時頃研究室にこられ12時きっかりに坂を下って官舎に昼食をとりに行かれた。午後1時にはまた研究室に帰ってこられ、5時になると帰って行かれるという、印で押したような毎日であったという。わたしの記憶に残る駒井先生は茶色の背広を着、帽子をかぶりステッキを手に、やや前かがみに遺伝研内の道を歩いて行かれる姿である。そして、近くの変畑の上空を春には雲雀がにぎやかにさえずりながら飛んでいた。

その少し前、わたしの留学中の1955年（昭和30年）にコールド・スプリング・ハーバーで集団遺伝学に関するシンポジウムが開かれ、わたしも講演に招待されたが、日本からは駒井先生と酒井さんが招待を受けやって来られた。その途中に駒井先生はわたしの留学していたウイスコンシン大学のあるマヂソン市を訪ねて来られた。当時この大学の遺伝学教室は小さな木造の粗末な建物でここにわたしの先生 J. F. クロー（写真24, 26）、集団遺伝学では歴史的な S. ライト（写真20）、飯野君の先生で後にノーベル賞を受けた微生物遺伝学の J. レーダーバーグ、トウモロコシの遺伝研究で世界に名を知られた A. プリンク、免疫遺伝学の M. R. アーウィンなどそうそうたる学者がいるのに感心された。その事に関連して先生が話された事は今も忘れられない。駒井先生はかつてコロンビア大学の T. H. モーガンの下へ留学されたが、日頃モーガンは偉大な研究はボロの建物から生れると言っていたという。

遺伝研の存在意義に関し、駒井先生は大学では学生の教育に多くの時間を取られ、そのため研究には十分な時間が当てられぬのでこうした国立の研究所を作り、学者はそこで落着いて研究に専念することが日本の学問の進歩にとって重要であると強調された。また大学と違って、研究所にいながら研究業績があげられない者は実に不適格者であるとももらしておられた。

京都に去られた後も駒井先生は毎年避暑のため御殿場に来て夏を過ごされた。それで、夏になると松永部長と連れだって、丸岡さんの運転する研究所の車で一度は必ず御殿場の別荘に先生をお尋ねし、遺伝研の近況やわたしの研究に関連した事を御報告したり、また先生からもいろいろお話しを伺うのが楽しみであった。先生の人間的な魅力以外に、そのまれに見る勉強家ぶりに感心した。いつお目にかかっても、遺伝や進化の分野で世界の最新情報に通じておられるのは驚きであった。昭和44年の夏に御殿場の別荘をお尋ねしたら丁度先生の机の上にアメリカの科学雑誌SCIENCEがあり先生はそこに載っているJ. L. キングとT. H. ジュークスの「非ダーウィン進化」の論文に触れられ、わたしの研究が彼らの論文に大きな影響を与えた事が分かると言われた。その一年前、イギリスのNATURE誌に出たわたしの分子進化中立説が日本ではまだ余り知られていなかった頃である。翌年の夏、御殿場にもう一度お尋ねしたのが最後で、その後は先生は御殿場には来られなかったと思う。それから、二年たらずのうちに不帰の客となられたのである。

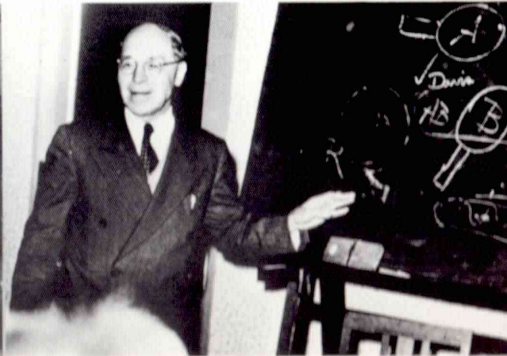
駒井先生は温厚な方であったが決して時流におもねるような方でなく、常にしっかりした意見を持っておられた。今でも忘れられないのは勲章制度が復活してしばらくした頃だったと思うが、それに対する意見を述べられた事である。先生はこれに批判的で「勲章制度ほどバカげたものはない。一方では地方の福祉のために一生身を粉にして働いた婦人が七等、八等といった最下位をもらうかと思うと、他方ではまったく尊敬に値しないような政治家でも、議員をやったというだけで最高位に近いものをもらったりする。こんな制度は納得が行かない。自分は勲何等などという勲章を政府がくれるといっても絶対お断りしたい。」と言われた。これに続いて先生は「ただし、文化勲章だけは別である。この方はくれるというなら喜んで頂戴したい。」と言うのが先生の御意見であった。駒井先生を常日頃から尊敬していたわたしはその事が忘れられず、先生こそ文化勲章を受けられるのに値する人だと思ってい

た。その先生がもらわれず、先生の死後数年もたたぬうちに若輩のわたしが思いもかけず文化勲章をいただく事になってしまった。先生に申し訳ない気がする一方、もし先生が生きておられたら誰より（両親は別として）喜んで下さったと思わずにはいられない。

最後にこの紙面を借り最近研究所に飾られた駒井先生のレリーフについて記しておきたい。先生のレリーフがもし研究所にあればわたしの様なお世話になった者にとって先生をしのぶよすがとしてうれしいだけでなく、将来遺伝研で働く若い研究者の諸君のためにも、駒井先生の高邁な求道の精神を伝える上で有意義であると真剣に考え始めたのは今年の夏のことであった。その後、松永、大島両部長にも計画に加わっていただき、その他多くの方々の御援助を受け計画の実現にこぎつけた事はわたしにとって大きな喜びであった。その過程で特に印象に残る事、ありがたかった事を二、三述べてみたい。第一はこのレリーフが研究所に置かれることになるので、どうしても田島所長の御承認がいるわけで、この案を持って所長室に行った時の事である。所長は人間関係についての配慮とか行政的な考えに基づき、厳しい条件でも出されるかと内心心配していたが実際にはその心配は全くなく、実に気持良くこの案に賛意を表された事で、ありがたかった。第二に幸運であったのは地元の三島に下山昇氏（日展連続入選12回）という優れた彫刻家がおられる事を知り、同氏にレリーフ作製をお願いしたところ心良く引受け、生前の駒井先生そっくりの実にすばらしいレリーフを作って下さった事である。第三には御遺族の駒井喜雄氏（東京電気社長）から大幅な財政的御援助を受けた事で、これなしには計画の実現は不可能であったと思う。3月15日午後4時半から研究所正面の階段をあがった踊り場の所で除幕式が行われた事も付記しておきたい。



17 統計学で有名なR. A. Fisher博士が来訪され、人類の進化について話された。左は木村室長、右側に小籾所長のレリーフが見える。1960年5月29日。



18 H. J. Muller博士が訪問され、アメリカにおける遺伝学の進歩につき講演された。1951年4月11日。



19 駒井先生が退職され、1956年11月3日、三島駅を京都に出発された。田中義麿、松村清二、近藤宗平、成瀬隆（以上前列）、平俊文、津田誠三、坂口文吾、石原隆昭、名和三郎、内藤幸枝、酒井寛一（後列）などが写っている（敬称略）。



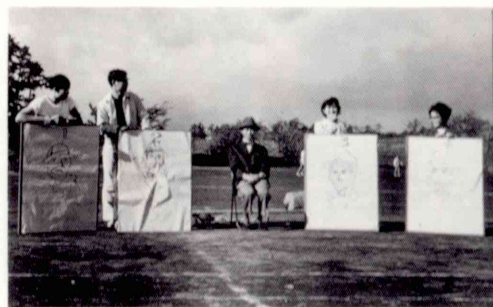
20 S. Wright博士夫妻と木原所長。1968年8月31日。



②1 小熊捍先生と御夫人を案内される竹中要先生。ポケットに手を入れた竹中先生の得意のポーズが見られる。1959年吉田俊秀撮影。



②2 R. A. Fisher博士。ロックフェラー補助金により設置された短日圃場を岡室長が案内した。1960年5月29日



②3 木原所長時代には毎年隣の東中学校の運動場を借りて若葉会の運動会が行われ、その種目の一つに似顔絵書き競争があった。この写真は木村資生氏がモデルになった時のものである。1967年10月28日



②4 J. F. Crow博士が1957年7月1日から10月10日まで滞在された。写真は7月某日、研究所玄関左側で撮影。中央に現在のイロハモミジがある。



②5 タバコの苗床の御見学中の皇太子殿下，左へ田中正雄，駒井卓，田中義麿博士。1955年4月13日。



②6 右上よりJ. F. Crow, S. S. Rajan, W. A. Warid. 1957年7月某日。



②7 竹中要博士と露木正美嬢。おしろいばなの調査。背景はいわゆるねずみ御殿（第1ねずみ飼育舎。1953年12月竣工，1973年3月とりこわし）。



②8 皇太子殿下に染色体を御説明申上げる吉田俊秀室長，その左は田中義麿博士，待従，森脇大五郎博士。（1955年4月13日）

14. 赴任の頃一特に小熊先生、竹中先生のことなど一

吉田俊秀*

北大理学部講師、助教授を経て昭和27年4月に国立遺伝学研究所研究第3部研究員の発令で、私は遺伝研へ赴任した。当時、駒井卓先生が部室長を兼任しておられたので、その下に私は入った。研究所はまだ古い木造の建物で、現在の所長室辺に駒井部長室があり、その北側の一室が私にあてがわれた。がらんとした室には唯机1つと本箱1台があっただけで、室の半分は物置代りに使われていた。顕微鏡が無ければ仕事にならないので顕微鏡の借用を申し出た所、たしか小熊先生が使用しておられたツアイスの古い型の顕微鏡を私に貸して下さった。これが私の初期の研究を支えてくれた唯一の武器で、この一台で可成りいろいろな成果を上げたと自負している。

その頃駒井先生はショウジョウバエやマイマイ(カタツムリ)を研究材料としておられたが、研究補助員を2名ばかり雇っておられたので私には殆んどその手伝いは命ぜられなかった。先生は私がすでに細胞遺伝等の方面でネズミの仕事をしていることを充分理解して下さっていたためと思う。当時、蛭海啓行君(現ナイロビ在住)が研究補助員をしておられたので、同君にショウジョウバエの飼育や唾腺染色体の取り出し方などを教わり、ショウジョウバエの腫瘍に興味を持ったのもこの頃である。しかし私は北大時代からネズミの系統育成とそれを用いての腫瘍細胞の染色体研究をしていたので、ネズミからは離れることができなかった。ただ、当時のネズミの飼育舎といえは掘建程度の極く粗末な小屋が建てただけで、(写真29)しかもその建物は私が入所する1年前に北大理学部を卒業した土川清君が研究員として入所しており、同君がマウス飼育のために使用していたので、私のネズミを飼育

*細胞遺伝部長

する余地は全くなかった。そこで旧木造本館の西側1階（現在の本館の展示室あたり）北側にあった便所を借用して（写真31）、そこで主にラットを飼育し、マウスは仕切りのある大便所用の室内に納め、寒い時はコモをかけ電球を入れて保温しながら飼育を続けた。こんな環境でも何とかネズミの飼育は出来たし癌の細胞遺伝学的研究も間断無く続けることができた。戦時中と終戦時の物資が全く欠乏していた頃に、北大でネズミ飼育を経験した私には、便所であろうがどこでも耐えしのぶことができた。

みんなからうらやまれる様なネズミ飼育舎（いわゆるネズミ御殿）（写真27）が建ったのは、その翌年（昭和28年）であった。実際に作動したのは昭和29年からと思う。主に、土川研究員が設計の任に当たったので、私はその1飼育室を借り便所から開放される身となった。28年に研究部の編制変えが行なわれ、私は細胞遺伝部に移り、第1研究室長となった。竹中要博士が部長と第2研究室長を兼任された。このようないきさつから私は小熊先生、駒井先生および竹中先生に深いつながりをもつようになると共に、これらの諸先生からいろいろと御指導を受けた。駒井先生については別に書かれると思うので、私は主に当時の小熊先生や竹中先生のことなどを思い出すままに記しておきたいと思う。

小熊先生は私が北大の学生の頃に学部長をしておられて、私が動物学教室で牧野先生の御指導を受けて形態学教室へ入った頃も、時々研究室へ来られて雑談などしておられ、先生が札幌から三島へ移られる時も荷造りなどのお手伝いをしたので、先生は私をよく知っていた。私は昭和27年4月1日付の発令で三島行が決まっていたが、その頃丁度牧野教授が米国へ出張されたので、私はその間形態学教室の留守番と細胞学の講義を命じられ遺伝研へ赴任したのは6月1日であった。家族を引きつれて三島駅へ着いた時、小熊所長が駅までお出迎え下さったことを今も尚、忘れることが出来ない。一先づ研究所の宿舎に落ちついたのであるが、その宿舎は研究所

前の長屋で、誠にお粗末なものであった。壁は落ちるは、ふすまや障子はぼろぼろという感じで、少々のことではおどろかない私もこれには閉口した。何しろ押入れにフトンを入れておいても壁が落ちて砂ブトンの様になってしまう。この頃宿舎を修理する予算が取れなかったらしく、2、3ヶ月目に壁の手当をしてもらったことを覚えている。左隣りに辻田御夫妻（現名誉所員）、右隣りに専売公社の田中さん一家がおられた。田中さんの後には後藤さん御夫妻（現北大教授）が入られ、この宿舎に数年間留まった。長男がここから市内の幼稚園に通い、次男がここで生まれた。近くの独身寮の客間に田中義鷹先生がおられ、寮には木村さん、飯野さんら数名が生活して居られた。

ここで、小熊初代所長の面影を思い出すままに記しておきたい。先生は非常に厳しい古武士の様な御性格であった。小田原に御住居を定められ、小田原と三島の間を毎日列車で通っておられた。研究所にあっては厳格な反面慈父のように暖かく私達の研究を見守っていて下さった。先生御自身は全く研究はしておられなかった。それだけに私達の研究の面では殆んど口出しをされたことが無かった。時々研究室を廻ってこられて、どうだ頑張っているかとおっしゃる程度であった。当時、所員の数も少ないので、昼食時には所員と共に会議室で会食するのを日課にしていた。先生は常に人の和ということを大切に考えておられ、御退官のお別れの挨拶の時にも人の和を強調されて研究所を去られた。先生は話題が豊富でしかも話術に長じ、私の様な若輩でも別に窮屈な思いをしないで昼食を楽しむことができた。どんなことが話題になったかはよく覚えてはいないが、先生のお若い頃の留学当時のお話、絵画やオペラのこと、またネコ、犬、雀などの話を面白くして下さいた様と思う。先生は常に科学者の眼を通して自然を眺めておられたので、ちょっとしたお話の中にも我々の研究の中にヒントを与えて下さるようなことがあった。先生はまた名文で随筆をよく書かれた。雑誌「遺伝」の巻頭に長い間所見を述べられ、それをまとめて随筆集を出された外、いくつかの随筆集を出

版された。かってエッセイスト賞が先生に与えられたことでも、いかに先生の随筆が優れていたかが伺われる。

さて小熊先生の奥様のことについて一言したい。奥様には私は北大時代から面識を得ていたので、三島へ来てからも家族ぐるみ時々小田原の先生宅を訪問した。先生御夫妻にはお子様がおられなかったので、家の中はいつもきれいで静かにお暮しの御様子だった。そんな所へ私が腕白盛りの息子を連れていっても、先生も奥様もよく面倒をみて下さって孫のように可愛がって下さった。先生のお庭のすぐそばに小川が流れており、きれいな水には小魚やザリガニなどがいて、御夫妻でそれを息子達に取って下さったことなどが思い出される。小熊先生は遺伝研御退官後に脳軟化症で倒れられ、一時かなり重態だったが、奥様の日夜の手厚い御看病で奇蹟的に一命を取り戻されたことがあった。その御看病のお疲れからか、先生が御回復になられたら今度は奥様が御病気で倒れられた。元来ワンマンだった先生も奥様の御病気には非常に心配され、本当によく御面倒をみておられたことを思い出す。先生御夫妻はお互い思いやりが厚く、夫婦愛の美しさを私は訪問する度に見せられたように思う。先生は一時、殆んど完全に回復されたが、晩年徐々に衰弱され、昭和46年9月6日に殆んど大樹が倒れる様に86才を最後に御逝去になった。奥様は大変御元気で現在も小田原にお住みになっておられます。

私は三島へ来て細胞遺伝部第1研究室長になったが、その時の部長は竹中要先生であった。竹中先生は小熊先生とは御性格が全く対照的で、野人そのものの思いのする部長であった。竹中先生の奥様も先生とよくおつり合いのごくさっぱりした方であった。竹中先生は研究所設立のいわゆる裏方を一手に引き受けられ、小熊先生の片腕として活躍されたことは、今更申すまでもない。京大京大予科の教授をしておられたが、終戦の時に負傷をして足を悪くしておられ、御不自由な身をも省りみずに研究所設立当初の雑用を一手に引き受けられ、今日の基礎を築かれた御努力は忘れられない。小熊先生は殆

んどお酒を口にしないようだったが、竹中先生は大の酒豪で、先生の豪遊は三島市内でも有名で、桜の花と共に今も当三島市民の間に語りつがれている。竹中研究室にも先生のとっておきの果実酒があって、時々御馳走になったことがある。研究部の忘年会の時などに二次会だの三次会だのといっておつき合いをしたこともあったが、年をとられるに従って急にお酒が弱くなり、二次会はおろか忘年会でも早く引きあげられるという御日常に一変した。そして間もなく胃癌で倒れられ、御停年前の61才で他界された。先生は朝顔、サクラ、タバコ等の研究に専念され、特に朝顔については系統の集収や遺伝子分析の研究に専念された。1954年、戦後日本で初めて開かれた国際遺伝学シンポジウムの際には、その集収が遺伝研で展示され、多くの外国人研究者の称賛を得たのも先生の業績である。晩年は桜の研究に興味を持たれ、特に染井吉野の起源を明らかにするため、いろいろな品種の交配を行ない、その産物の1つとして白い清楚な花の咲く通称三島桜を育成されたのもよく知られている。殺風景な遺伝研周辺に多くの桜を植え、桜が丘の染井吉野は今や三島市内の名所の一つとなり先生を記念する桜の碑も市民の有志によって建てられた。そして今年も、今ちょうどその桜が満開である。

　小熊先生も竹中先生も共に遺伝学普及会に力を尽され、小熊先生は永く会長を努められた。竹中先生は実務を担当された。ここにも小熊、竹中両先生の名コンビが生かされていた様に思う。遺伝学普及会は、現在もその活動を続けている。

15. 草創のころのはなし

酒 井 寛 一*

昭和24年11月15日の三島大社は、たまたま七五三でござった返していた。庶務の門脇君が、終戦後のどこだかの官庁からのお下がりというパッカードで三島駅に出迎えてくれて、北海道から来た私達家族は、その雑踏をぬいながら三島市街を抜けると、あとは見渡す限りの水田の連なりの間を走り、断崖の間につけたような坂道を上って、中島飛行機製作所のもぬけの殻のような木造のガランとした建物の正面におりたつた。階下の一室にとりあえず家族をおしこめて、二階の所長室で小熊捍所長と竹中要さんにあった。そのとき、小熊所長がどんな大切なことを言われたかまるっきり覚えてはいないが、ただ、この研究所の周囲には楽しい自然の小径がどこにでもあるよというようなことをいわれたのを覚えている。そのあと、一室にとじ込めておいた家族を、構内の棟割長屋の一戸につれて行って、まず谷田の第1日が始まったのである。

そこで一番困ったのは、山の上の住宅には水がないことだった。坂下のお寺の好意で、井戸水をくませて貰えるという話だったが、こちらは人間が移動してきただけで、寝具以外の家財道具の一切は、多分東北本線のどこかの引込線の貨物列車の中らしく、なかなか着かない。止むを得ず鍋や洗面器を動員して、家族全員で水を運び上げる日課の作業は半月ほど続いた。あのお寺の墓は土葬だという話をきいて、家族があわてたのはそのあとである。水運びの合間には、米の配給で、女達がリュックサックや乳母車で坂下から、ふうふういいながら運び上げていた。

棟割長屋の宿舎には窓硝子がほとんど抜けていた。11月も半ばをすぎると、1

* 〒350-03 埼玉県比企郡鳩山村石坂、鳩山ニュータウン23-2; 名誉所員 前応用遺伝部長

日1日と夜温の下がる山の上で、しみじみと戦争の続きを感じさせられた。特に社会からの隔離には苦しめられた。ちょっとした買物、特に本などが欲しいときには、その度毎に、徒歩で遺伝研の坂を下り、長い田圃道を通って街までゆかねばならなかった。バスなどがついたのはずっと後である。

そういう日常生活の中で、竹中要さんの、新任者達への心遣いはうれしかった。周辺の農家と親しくして手に入れた赤肉のサツマイモをたいては、構内居住者達に配ってくれたのは、一度や二度ではなかった。そのサツマイモは余りおいしくはなかったが、ただその頃はまだ、多くの人が空腹をかかえていた時代だった。

こういう所員達の四苦八苦の生活の中で、研究所も徐々にその体制を作り上げていった。開所第1年目のそのテンポはのんびりしたものだった。何しろ所員が出勤してまず全員の仕事が、泥まみれになっていた室の床を、水をだぶだぶ浸したモップで洗滌することと、室の南側全面に広がるガラス窓に、戦争中丹念に糊ではりつけた空襲爆弾の被害よけの日本紙のアミ目模様をはがして糊あとを洗い流すことだったのである。広い室をいくつもった横長の研究所の床板と窓硝子を少数の所員達で洗滌することがどの位続いたかは記憶に定かでないが、くる日もくる日もそうだった様な気がする。そしてお昼になると、都合のつく限り一室で会食したが、そのあと、小熊所長に誘われて、竹中要さんと私は、研究所のまわりの林の小径を歩きまわった。この散歩は、雨の降らぬ限り連日で、毎日2時間位にわたった。この意味では三島はとてよもよい所だった。真冬でも日中は暖かだったし、箱根に続く谷田のあたりは、残された自然が豊かであった。

研究所がだんだんその形を整えてくると、まず所員会議が開かれた。その頃はすでに、松村清二、辻田光雄、古里和夫、宮沢明の諸氏がいて、それに引続き木村資生、後藤寛治、伊藤太郎、藤井太郎の諸氏が三島へ移ってきたように記憶する（どうもこの辺の記憶はあまり定かではない）。この所員会議

はその後室長会議となり、更に部長会議と呼ばれるようになったようである。駒井卓、田中義麿両先生が三島に来られたのは大分あとだったように思う。

さて植物の遺伝研究をしようとしていた私は、北海道農業試験場から来た後藤寛治君と、畑管理に来てくれた近藤和夫君の3人で、まず実験圃場の整理にかかった。ところが中島飛行機が工場を建てるために、畑の表土をすつから剥ぎとって整地した土地は、火山岩が露出して、土気のない平坦地だった。これが畑になるには10年にかかるなど思いながら、古里さんの助力を得て堆肥を多量にすきこみ、知らないうちに、現在応用遺伝部で使っている圃場ができたのである。

国立遺伝学研究所が箱根続きの高原にできると、自然に社会との結びつきが生まれていったが、その中で最大の事件といえはやはり、三津あたりの海岸をとりまく石油コンビナート建設案に対する反対運動だったと思う。これは松村清二氏が中心となって三島や沼津の人達との間に作られた強固な民間のチーム運動だったが、その精力的な運動が効を奏して、伊豆半島は清潔な空を保つことができたのである。

このようにして国立遺伝学研究所は、急速に発展し、その学問的貢献に対する国内外の評価も固定してきた頃、不幸なことが相次いで起った。それはまず、桜の研究に打ち込んだ竹中要さん(1966年)の、桜の花にさきがけた死去にはじまり、年を次いで松村清二氏がやはり春をまずに死去されたことである。それまで私は、過去17年にわたった大学と農業試験場の勤務の中で、現職中死んだ人にあったのはほんとうに稀だった。そして私は、人間は現職中でキビキビ動いている間は死なないものだというような信念にかたまっていた。それが突然に、身近に年を次いで起ったのだからショックは大きかった。そしてもっと大きいショックは2人とも植物研究者だったことだ。植物研究者としての最年長者は竹中要さんであったし、それに次ぐ年長者は松村清二さん、そして3番目が私自身であった。家族にも言わない心の中で、来

年の春は、いよいよ私があの世界の番かもしれないというおかしい不安がどっしりと根付いていた。それから10年以上もたったいま、妙なことを考えたものだと思える年令に到達して、さらにこの御両人の冥福を祈る心がしきりである。

こういう貴重な経験をふくみながら、国立遺伝学研究所はすでに30年目の誕生日を迎えようとしている。小熊捍、駒井卓、田中義鷹の3先生もすでになくなり、リリエンフェルトさんも谷田の一角で世を去られた。国立遺伝学研究所の土台固めと初期生長のために、この先生方の果された貢献はまことに甚大であった。これらの貢献の数々を吸収しながら、国立遺伝学研究所は今日をつくり上げた。そして今や更に大きい飛躍への羽ばたきがきこえるようである。定年退職してすでに7年目になろうとして、関東のチベットともいえるような埼玉の丘陵に居を定めた私は、はるかに、国立遺伝学研究所のますますの発展を祈ってやまない日常である。

16. 三島の頃の思い出

林 孝 三*

遺伝学研究所の創設と発展に大きく貢献された駒井卓先生のレリーフの除幕式に列席するため、私は去る3月15日に久しぶりで遺伝研を訪ね、まず田島所長のお部屋へ挨拶に伺いました。その時、所長から、研究所は今年で創立30周年を迎えるので記念事業の一つとして「思い出の記」を計画中である。ついては私にも何か思い出して書いてほしいとのお話がありました。全く

* 〒158 東京都世田谷区上用賀2-4-28、進化生物学研究所；元生化学遺伝部副部長

寝耳に水でしたのでその場で確かとお約束はできませんでしたが、振り返ってみれば、私は研究所の創立4年目に当る昭和28年8月から31年3月まで遺伝研に在籍し、前後2年8ヵ月という短い間でしたが、わが国の遺伝学草創の先覚である所長の小熊捍先生はじめ駒井卓、田中義麿両先生にもつね日頃ご薫陶をいただき、また研究所の生みの親ともいべき竹中要博士の温かい人間味にも触れるなど、私自身にとって有形無形にどれほど大きな恩恵をうけたことか、到底筆紙には尽せぬものがありました。そのほか、松村清二、酒井寛一、辻田光雄各博士をはじめ若い研究員の方々や事務部の乙藤寛一郎長以下すべての職員の方々とも昼は職場で夜は風呂場で文字通り裸かのお付き合いもできたことはいまだに忘れえない懐かしい思い出であります。

私が小熊先生に招かれて資源科学研究所から遺伝研へ移ったときの経緯なども今感慨深く思い出されますが、これは個人的のことですから、ここでは差し控えたいと思います。駒井先生や田中先生には学問研究に対する悠揚せまらざる姿勢と人間性の豊かさなどが忘れ得ぬ印象として強く残っていますが、これらの方々については「創立5周年」と題した小冊子や「創立25周年記念誌」の随所に窺うことができますし、今回の「思い出の記」にもきっと多くの方々がお書きになることと思いますので、私はこの際遺伝研の蔭の功労者である竹中さんについて思い出の一つ二つを書きとめて責を塞がせて頂きたいと思います。

竹中さんは心から遺伝研を愛し、その将来の発展を願い続けた人であると思います。研究所としての仕事はチームワークで達成されるもので、それには「人の和」が基調になるという話しもよく聞かされたものです。人にはあまり気兼ねせず、いつも談論風発的などところがありますから、とかく誤解されたこともありまじょうが、それは抹稍的なことで竹中さんの本心は違ひ先を見通して遺伝研の発展を考えておられたと思います。私が初めて遺伝研へ赴任したとき、竹中さんのお部屋で、「遺伝学には全く素人の私が果して研

研究所のお役に立ちうるかどうかと案じています」と挨拶しましたところ、「そんなことは気にせず、遺伝のことはこれから追々と勉強して貰えばよい。遺伝学は生物の根本になる学問だから、何も遺伝学という狭い枠には扱われなくてよい。僕はもっと広く、生物学研究所といいかえてもよいと思っている。進化の研究なども将来はここでどんどん進めていく必要がある。君はこれまで植物の色素を専門にやってきた。花の色素は遺伝学でもメンデル以来取扱ってきた歴史的なものである。この研究所でも今年は生化学遺伝部が認められたので、僕はこれを機会に花色の遺伝について新しい分野を開拓しなければならないと考えている。小熊所長も全く同感であるから、何も気にすることはない。君は遺伝を道具にしてこれまでの研究をじっくり推し進めればよい。」この頃は私もまだ40才あまりの若僧であり、こんな大らかな考えはまだ持ち合せていなかったもので、竹中さんの話で大いに安堵するとともに、その壮大な気宇に深い共鳴を覚えました。

竹中さんは、どなたもご存じのように、大の酒豪で、酒気さえあれば気炎万丈、「自分は終いには酒に呑まれるかも知らんが、それもまた本望だ」などと時折洩らしておられました。そんなわけで、竹中さんは研究室の机の下やロッカーの片隅などにアルコールを忍ばせて時どきチビリチビリ楽しみながら元気をつけて顕微鏡を覗いておられた姿も目にみえるようです。

たしか、私の赴任後まもない頃と思いますが、ある日竹中さんの気分上乘の折にお部屋を訪ねて談合の途次、たまたま話がわが国の植物学に及び、「日本における先駆的な業績を継続して、それを育てていくことが最近はどうもおろそかにされている。たとえば、日本の桜についての三好学先生の研究がその一つで、誰も受け継ぐ者がいないから僕はこれを遺伝研に集めながら、併せて染井吉野の起源も研究したい。こうして、行く行くは研究所を桜の花で埋めたいというのが僕の夢である。もう一つは、古くから民間で作りだされた朝顔の数々の品種を正確に維持して将来の研究に役立てるようにしなければ

ばならない。こんなことは今どきの研究には適しないかも知れないが、国としてはどこかでやらねばならない。僕は差当りこれをこの研究所でやる。君もこの仕事の一環として花の色素について研究してほしい。」

このような話は所内の古い方ならどなたでもご存じのことと思いますが、私には私なりの受けとめ方があり、今なお強い印象として私の中に残っています。

このほか、竹中さんから断片的に伺ったこととして遺伝学研究所創設の苦心談があります。これについては竹中さんの手記として書き残されたものが、遺伝研の「創立25周年記念誌」の巻末に載っています。今これを読み返してみると、終戦後の最悪の条件の中で遺伝研の創設のために竹中さんが、大きな言葉ではありますが、身命を賭して奮闘されたことが手にとるようによく判ります。私もまた国立基礎生物学研究所の設立のために10余年の間同じような道を歩み続けましたので、竹中手記の行間に隠されているものまでも読みとることができるような気がします。小熊先生は、竹中さんの意中もさらにその難行苦行をも充分に知り尽しておられたことと推察されます。竹中さんは終に酒に吞まれて昭和41年3月18日に亡くなられましたが、そのあとで小熊先生は「僕にとって唯一つ心残りなのは、竹中君の労に何一つ報いることができないままで世を去らせたことである」と私に述懐されました。

竹中さんは報いられずに逝かれたかも知れませんが、しかし、私はこのたび駒井先生のレリーフ除幕式に出席して、遺伝研の正門に通じる坂道の両側に、竹中さんが約20年前に植えられた染井吉野の苗木が今や見ごとに成長して、三島の名所となり、年ごとに多くの市民を楽しませているとのこと。この桜並木の中ほどに「桜の碑」が建てられており、裏面には「遺伝学研究所の桜博士竹中要先生の遺業を記す 昭和四十二年四月 三島文化協会」と刻まれているのをこのたび所員の名和三郎さんの案内で知ることができました。

竹中さんがおそらく30年前から持ち続けられた念願の一つが、今日三島の

名所として立派に花を開いていることは嘸かし本懐でありましょう。

思い出ばなしを書いていると、いろいろのことがだんだん頭に浮かんできますが、あまり雑駁になりますから、この辺で筆を擱かせていただきます。

(54・4・17記)

17. 創立当時の思い出

後藤 寛 治*

昭和25年の2月初旬、私は雪深い札幌を後にして、三島市に新設された国立遺伝学研究所に着任し、第3部の酒井研究室に所属することになった。研究所への登り道を踏みしめながら、大きな希望に胸をふくらませた当時が、昨日のこことのように思い出される。坂の両側の大きな桜の並木は、当時はお細い苗木であった。“苗木に牛をつながないように”といった注意書きが下っていたものである。寒中にまづ椿が咲き始め、正門を入れて右側近くの緋寒桜がほころぶ頃、至ってのどかな春が研究所を訪れるのであった。

木造2階建の南側の一室に、酒井先生と私が入っていた。机と椅子にタイガーの計算機が当初の備品のすべてであった。しかし、窓からの眺望は、北国育ちの私には夢のようなものである。とくに、春霞に浮ぶ墨絵のような伊豆の山々は、心なごむ最高の借景であった。室の天井から、時々しゅくいが落下するようになり、私は北側の室に移動した。そこからは雲がない限り、朝夕、四季折々に変化する富士山の容姿を望むことになった。峻厳な、孤独な、そしていつも語りかけるような姿が忘れられない。

* 〒060 札幌市北9西9、北海道大学農学部教授；元研究第3部研究員

家の中まで入ってくるトカゲ、ムカデ、諸々の昆虫や畑で時々みかけたヘビや大きな蛙などは、気になるとは言え、自然の一部として身近かな存在であった。したがって、研究所をとりまく環境は、至って温和なものであった。

一步研究所の中に入ると、そのような夢のような世界とは別の雰囲気が漂っていた。数々の若い研究員は、“吾々は、研究をするためにやってきたのだ”という意気に燃えていたように思う。毎週続けられたセミナーは、かなり激しいものであった。2ヵ月に一度ほどの割合で順番が廻ってくる。駒井卓先生と田中義麿先生は、いつも黒板に近い位置を占めておられ、度々厳しい質問を寄せられた。

昭和26年にゴールドシュミット博士の別刷などが寄贈になった。この別刷が納められた図書室と小さな調節温室（昭和27年設置）が初期に整った施設である。廊下づたいに図書室に入ると、別刷の山が待っている。図書委員は、毎週1回集合し、この山と取り組むことになった。遺伝学の各分野ごとに分類し、カードを作製するのが目的であったようである。

最初の頃は夢中であったが、論文の題名や少々の内容をみて分類する段階に入ってから、次第に目の前が開けるような気がしてきたものである。遺伝学という分野が、とてつもなく広いものであるということ、ある研究者が長年に亘って苦勞して開拓してきた道程が、20年、30年のベースでとらえられることである。これには驚歎せざるをえなかった。今度は、そのような面で夢中になった。従って、図書室の整理が順調に進んでいたのかどうか、少々疑がわしくなるのである。

エノテラの遺伝学者として有名な、R.R. ゲーツ博士が、昭和29年来日された。同博士の当時の興味は、人類遺伝学のものであった。駒井卓先生が御案内の予定であったが、風邪をめされて都合が悪くなり、先生より“君、行ってくれないか”ということになり、ゲーツ博士の訪問先である藤沢市のエリザベス・サンダースホームにつめることになった。出迎えてまず聞かれ

たのは、両替についてである。“私は、お金をもっていない”と聞いてびっくりした。要するに、日本円に両替しないまゝやってきたので、藤沢市と次の訪問先三島市までの経費をどうすればよいかという質問なのである。途方に暮れたのは、ゲーツ博士ばかりではなかった。しかし、この件は何んとか落着いたようで、藤沢市での仕事は無事済ませた後、鎌倉を案内することになった。仕事の面ではどうやら助手が勤まったが、観光となると、パンフレットもない上、言葉が不自由でひや汗をかきながらの説明であった。駒井先生には、論文の御校閲をいたゞくなど、温かくそして時に厳しい御指導を受けた。とくに留学に際して、出発の御挨拶に参上した時、“君、勇気をもってやりなさい”と一言元気づけて下さったことが、今もって強く印象に残っている。また、田中義麿先生の御指導の下で、ラーナー博士が書かれた集団遺伝学に関する本を輪読したことがある。田中先生が、きわめて熱心に勉強して来られ、適切な御指示を下された姿が偲ばれる。

独身であった私は、伊藤太郎氏(現帯広畜産大学教授)の家に寓居することになった。事情があって、2人で自炊したわけである。燃料の薪は、畑の周辺から集めて十分間に合った。北側の3段になった畑の奥に、2階建の中学校があり、その下でオオムギの調査をしていると、英語の授業などの様子がよく聞えた。その後、結婚してからは、研究所の入口、向って右側にあった元守衛室に住んだ。正面の門を出て、路傍のぼけを見ながら丘を南側に降りると、防空壕の跡が何ヵ所か残っており、さらに下ると竹倉温泉に出た。散歩道としてはやゝ淋しいというよりもいささか物騒な坂道ではあった。子供を連れて裏の鶏小屋をよく見に行った。その北側は桑畑であった。また、職員の親睦会ができて、若葉会と名づけられ、時折レクリエーションが企画された。家族同伴で、富士五湖周り、箱根・強羅温泉周りや日本平行を楽しんだことも思い出される。

研究所が開設された当初、駒井先生、田中先生が心痛をかくさず語られた

ことが印象深い。遺伝学研究所の目的は、またその将来像はと、その筋からの意見を求められるためであった。若い研究員には、どの程度厳しい事態になっているのかはよくわからなかったが、雲行きが悪いことだけは伺い知れた。その都度、先生方が、その意義を強調され、生みの苦しみを克服されたようで、いつも頭が下る思いがした。若い研究者は、“研究に打ち込んでよい業績を残す以外に道はないのだ”と、時々誓い合ったのである。

研究所を去ってからは、訪問する機会が多かったとは言えない。しかし、仕事の都合でお邪魔するたびに、研究所は拡充強化が計られ、“将来、ここは遺伝学のメッカになるんだ”とあって力んだ頃とは、隔世の感がある。文字通りのメッカになったものと思われ、御同慶に堪えない。創立以来30年の月日がたった。その間、研究所に関わった各位の御努力に深い敬意を表するとともに、今後の一層の御発展を祈りながら、拙ない一文を結びたいと思う。

18. 創立30周年におもう

加 地 早 苗*

この6月1日に研究所は創立30周年を迎えることになり、今日の花々しい発展は発足当時のことを思うと全く夢のようで心からお祝い申し上げる。

昭和24年、私は京都大学大学院に在籍していたが、京都からは、駒井卓、大垣昌弘、木村資生、松村清二の各先生方と相前後して所員として発令になった。30年前を思い出し感無量である。当時の記憶をたどって思い出すまゝ、に述べてみたい。

* 〒606 京都市左京区北白川下池田町93、神戸、甲南大学理学部教授；元研究第2部研究員

昭和24年も暮に近い日、就任の挨拶のため大垣さんと京都から夜行列車に乗り初めて三島にやって来た。所長の小熊捍先生とすでに京都でお目にかかった時、三島は気候の温暖な静かなところと伺っていた通り、水のきれいな町という印象をうけた。しかし、旧中島航空機製作所跡の敷地は石ころがごろごろして、木造の建物は廊下を歩くと振動した。京都勢は一応京都分室として京都大学で研究を始め、なるべく早い機会に研究所に赴任するようになった。

私は昭和25年1月下旬、京都勢の中で一番早く赴任した。宿舎は正門の左手にあった官舎の中央の家を借り自炊をはじめた。発足当時の組織は、研究1部（形質遺伝—田中義鷹部長）、研究2部（細胞遺伝—小熊捍部長）、研究3部（生理遺伝—駒井卓部長）の3部だけであった。私は田中研究室の研究員となっていた。赴任した当時、第1部の研究室は2階中央の所長室の西側の広い部屋であった。研究室とは名ばかりで、机が2、3あるだけで部屋の隅に水道がついていた。勿論、実験設備、器具は皆無で水道もつい先日配管されたと聞いた。しかもその水たるや、チョロチョロ出る状態であった。正直なところ、これは大変なところに来たものだと思った。そのような状態であったので、実験をはじめることなど全く不可能で、自分で本を読んだり、他の分野の先生方と遺伝子全般にわたる問題について話を伺ったり、議論をしたりして日をすごした。私より先に赴任しておられた酒井寛一先生からは、ポリジーンの発現作用についていろいろ教えていただいた。京都大学で発生学の仕事をしていた私はポリジーンという考え方は理解しやすく、先生と共鳴するところが多かった。先生のお話しは懐かしい思い出の一つである。また竹中要先生からはよくルイセンコを非難されるお話しを聞かされた。たまたま東京大学の篠遠喜人先生のところから赴任して来ておられた伊藤太郎先生（現帯広畜産大学教授）とは同年配の気安さから親しくしていただいた。

赴任直後、遺伝学の啓蒙のためということで、地元の三島高校と沼津西高

校へ伊藤さんと2人で講演に行くように指示され、その頃珍しかった研究所のバックカードに乗せてもらって出掛け、講演に集った高校生に遺伝の話をしたこともあった。この頃は勿論、外国の新しい雑誌などは研究所に無く、時々文部省への使いを頼まれ、帰路日比谷の図書館で新しい文献を見て来るのも楽しみの一つであった。

25年2月、遺伝研で初めてセミナーをやろうということになり、私が昆虫の変態機構、酒井先生がたしか植物育種における量的形質という課題で話をしたと記憶している。小人数で専門の違った研究者の集りであったが活発な討論が行われた。これを機会に今後セミナーを続けてゆこうということになった。

2月中旬、静岡市公会堂で遺伝研主催の初の公開講演会がもたれ、京都から駒井先生が来られて講演された。大垣さんと私などがお世話したことも記憶している。丁度この頃、北海道大学から後藤寛治先生が赴任して来られた。後藤さんが来られてから小熊先生は毎日昼食後よく散歩に行こうときそわれ、伊藤・後藤・私がいっしょにお供をして1時間ばかり田舎道を歩いた。後日、木村さんが赴任されてから散歩グループに加わられた。小熊先生は博学で遺伝学の話だけでなく、野外の植物の話もよくされた。2月というのに暖かく外套も着ずに歩き廻った。このような時に先生は、君達が次の遺伝学を背負って立つのだからしっかり頑張れよと何度も言われたことを記憶している。

25年2月中旬すぎ、実験台がやうと2台入った。少しずつ実験のまね事でも始めたいと思い、京都大学へショウジョウバエの系統をとりて帰った。そして三島の町で黒砂糖や棒寒天を買い求め、電熱器でエサを作って、ともかくハエを飼い始めた。話しに聞くショウジョウバエとはどんなハエかということで、次から次へと珍しそうに見に来る人が多かった。また、昆虫の変態ホルモンの実験をするため、エリ蚕の飼育をしなければならないので、ヒマ

の種をさがし求めて建物の横隅を掘り起して蒔いたり、神樹を入手する手配をしたりした。この頃、辻田光雄・古里和夫先生も赴任して来られ研究所も少しずつ活気を帯びて来た。当時の会計課長の宮沢正夫氏（現栃木県河内町在住）、庶務課長の杉生純義氏（現福岡県行橋市在住）は若い研究員に非常に好意的で何かにつけて便宜を計っていただいたことを懐しく思っている。

しかし当時は研究費に乏しく、昭和25年度予算で購入計画を立てる時など、皆、非常に厳しく、1台の実体双鏡顕微鏡、計算機の購入さえ要求を通すのに悪戦苦闘の時代であった。

このような時期を経て、今日の世界的な研究所への発展と最先端に行く研究成果はひとえに30年間にわたる研究員のたえまない努力のたまものであり、旧所員として心からお祝い申し上げるとともにさらに飛躍的發展を祈るものである。

19. 遺伝研初期のころの思い出

大垣昌弘*

昭和24年9月末で京大理学部大学院特別研究生の第1期を終了し、引きつゞき10月より第2期生として進学するはずであった。ところが駒井先生の命で創設間もない遺伝研に赴任することになったので、第2期生を辞退して席を物理学教室の方に譲り、10月末日附で研究第3部の研究員となった。

京大からは加地早苗氏が研究第1部の研究員として一諸に三島に行くこと

* 〒586 大阪府河内長野市千代田台町15-7: 大阪府立大学総合科学部教授
元研究第3部研究員

になった。また駒井先生は同年12月末第3部長として発令を受けられ当分御殿場の別荘から三島に通勤されることになった。当時研究部門としては第3部までしかなかった。

研究棟としては木造の本館が1棟あるだけで研究設備は殆ど無いに等しかった。我々の研究室は2階にあったが、ある時科学朝日にショウジョウバエの記事を載せるというので記者が来てショウジョウバエの顕微鏡写真を撮ったことがある。ところが風で建物が常に揺れていてピントを合わせるのに苦心した。当時恒温器が一台あったように思うが、ショウジョウバエの飼育室がなく、飼育室建設の下準備をしていた。東京の東洋キャリアを訪ね空調設備の調査をしたことがあるがあまり高価で驚いた記憶がある。飼育室については私の在任中全く具体化しなかった。

開所当時このように研究設備が整っていなかったのも、三島では主として「ショウジョウバエの遺伝と実験」(培風館)の編集事務を行い、研究は京大の動物教室で行っていた。当時京大は遺伝研の京都分室になっていた。この分室は昭和25年秋頃まで存在したように思うが、廃止の正確な日時は失念した。

京都分室と三島の両方で、行ったり来たりの生活で、三島では市内の下宿で一室を借りた。京都へ行っている間に私の部屋に見知らぬ人が入ってしまった。どうしても三島になじめなかった。月給は6,000円位であったかと思うが大学院手当より少なかった。月給も2回に分割払で国民全部が苦しい時代でもあった。

研究費の方はわりに豊富?であったのか次のような思い出がある。ある時関西学院の小島氏のお世話でショウジョウバエの飼料用寒天を購入したが、1万円分買ったところ、何とトラック一杯分あって、私が研究所を辞任した後も何年間もこの寒天が使用されたという。

遺伝学の宣伝普及のため講演会が時々行われていた。昭和25年頃のことで

あろうか、静岡市公会堂で駒井先生の講演が行われたときのことである。先生のお供をしてスライド係を命ぜられていた。当時のスライドは手札型位の大きなガラス製で、公会堂のプロジェクターに合わないことが講演の直前に判明した。会場は既に満員の盛況である。時間的に先生に相談する暇もなく街へ飛び出してブリキ屋を探し、何とか急造で粗末な枠を作り間一髪講演の間に合わせた。ところが講演の途中で枠がひっか、って仲々スムーズに動かない。ついに引っか、ってしまった。それが丁度美人の一卵性双生児の写真の所で、何回でも同じ美人の写真が出るので万場爆笑となった。

研究としては低温抵抗性とか、光力学的な変異の誘発とか色々のことを単発的に試みていたが、発生学者の加地氏と一緒に赴任したことから、棒眼の発生遺伝学的な研究を共同で着手した。後に私の方は殺虫剤抵抗性の研究に移ることになるが、加地氏は30年後の今日まで棒眼の研究を続けておられる。駒井先生はよく同じ研究をずっと長く続けないと本当のことが判らないと言っておられたが、正に感服する。

昭和26年3月当時京大農学部の中村教授と理学部の中村教授のお世話で浪速大学（現大阪府立大学）へ転勤することになった。全く偶然にも加地氏も甲南大学へ転勤されることになった。同時に2名の研究員が転出することになり、駒井先生や小熊先生に申訳なかった。

任期も短かくあまりお役に立てず申訳ないことであるが、その後の研究所と遺伝学の発展に感慨無量である。

20. 九州分室から三島へ

鬼丸喜美治*

私が遺伝研へ奉職する事になりましたのは創立間もない昭和24年10月の事です。

「どうかね君、今度静岡県の三島に国立の遺伝学研究所が出来たんだが行く気はないかね、仕事は今やっている様なカイコの飼育と遺伝の調査なんだがね」

今から30年前、福岡市にある九州大学農学部の養蚕室で半年程前から7～8人の仲間と一緒に遺伝実験用のカイコの飼育や調査に明け暮れていた私に、当時カイコの遺伝学では神様の様な存在で、私達から見れば雲の上の人であった田中義鷹先生に初めて声をかけられました。話には聞いておりましたが、初対面の私は先生の威厳に圧倒され、一瞬とまどいましたが、お話を伺っている内に不安も消えすべておまかせする事にしました。この時から私の遺伝研の生活が始まったのです。子供の時分に家でたくさんのカイコを飼っていた記憶のある農家の三男坊の私には格好の勤め先といえましょう。

“雇を命ずる”といういかめしい正式の辞令を遺伝研から持ち帰られた田中先生がうやうやしく私に手渡されたのは終戦後日も浅い24年11月の事でした。筆で書かれた立派な辞令書を有難く拝受したものの、私の知識では三島に出来た筈の国立遺伝学研究所とは一体どんな所で、どういう人達が働いているのか見当もつかず、九州分室に居て研究所の経理係から毎月きちんと送金して下さる給料を有難く頂いているだけでした。当時の私の給料は初任給で月額三千円でした。

九州分室は九大農学部の図書館二階の一室をお借りして事務室兼研究室に

* 遺伝実験生物保存研究施設、技官

あて、実験はすべて蚕学教室と養蚕室の一部を使用させて頂きました。当時はストーブもないので火鉢に木炭をたいて暖を採ったものですが、真冬の寒い日には部屋が温たまらず、先生はオーバーを着て寒さをしのぎながら論文や報告を書いたり研究の思索にふけておられました。後に、先生の代表作の一つといわれるようになりました「基礎遺伝学」を完成されたのもこの頃です。

当時の世相は騒然たるものがあり、朝鮮戦争の勃発や、帝銀事件などを思い出します。九大の裏手にある箱崎海岸には戦争に行くための米軍戦車や、武器弾薬類が山と積まれ、武装した兵隊たちがジープで走り廻り物々しい有様を呈していました。ジェット機で30分といわれる朝鮮半島の南端にある飛行場が北鮮軍の手に落ちた時など、福岡市にも“空襲の恐れあり”というような警報が一時出されて大変驚いたものです。

現在、九大教授として活躍しておられる坂口先生は、この頃まだ養蚕教室の学生でした。卒業論文をまとめるのにねじり鉢巻で夜中まで蚕室で頑張っておられました。たしか「遠心力による畸型蚕の誘発と解析」というテーマで、カイコのいろいろな畸型を分類してスケッチをしながら実験データの整理をしておられました。私も時々お邪魔をしてお話を伺ったものです。卒業されてすぐ遺伝研の研究員に採用された事を知り、私も知人が一人増えた事を大変心強く思いました。

彼は25年の発令ですぐ三島へ赴任されました。すでに発令になっておられた辻田室長の下でカイコの生化学研究に従事される事になったのです。何も設備のなかった遺伝研で、圃場とは名ばかりの荒地に桑を植え、カイコを飼って実験を始められたお二人の苦労は並大抵の事ではなかったと伺っています。田中先生と私は大体地ならしが出来た後から三島へやって来たわけです。

約2年半お世話になった九州分室の閉鎖に伴い、待望の遺伝研へ田中先生

のお伴をして引越して参りましたのが昭和27年の2月です。博多発の急行“筑紫”に乗り込んだのが夜の8時で翌朝6時に沼津に着きました。戦災を受けた市街は復興の途上にはありましたが、駅前はまだ見る影もない有様でした。大手町付近まで大きい建物はほとんど見えず、道の両側には粗末なバラック建ての商店や夜台がズラリと並んでいました。早朝で人通りもないので一層淋しく目にうつりました。

列車に乗り換えるためしばらく待つ事になりました。天気は良かったので私はたしかこの辺から富士山が見える筈だとあたりを見廻しましたがそれらしい山は見えませんでした。先生にお尋ねしたら、「君、あそこに白い頭が出ているの見えるだろ、あれが富士山だよ」といわれたのには驚きやらガッカリやら何とも云えない妙な気持でした。間もなく上りの鈍行に乗り換えて三島に第一歩を印したのは朝の7時半頃だったと思います。8時半になれば研究所の車が迎えに来てくれるというのでそれまで駅で待つ事にしました。三島の町は沼津よりは大分町の感じを残していたので安心しました。こゝからは真白に雪化粧をした富士山もよく見えましたので私の気持も大分なごんて来しました。

やがて研究所の車が辻田先生を乗せて迎えに来て下さいました。空色の幌付きのトラックです。田中先生が助手席に乗り、私は初対面の辻田先生と後ろの荷台に乗って研究所入りをしました。

車は駅前通りから三島の本通りを抜け、三島大社から二日町通りを下って行きました。荷台の後ろの幌の間から初めて見る三島の街は戦災の跡も見えず、落着いて見えました。「街の家並の真中に富士山が見える処は日本中でこゝだけかも知れないね」と辻田先生が云われました。なる程きれいな富士山が道路の真中に大きくそびえて見えました。車は途中から左折して細い道路へ入り、田圃の中をどんどん山の方へ向って行きました。一体どこへ連れて行かれるのか少々心細くなりましたが、両側に竹が生い茂っている切通しの

坂道を上りきってやっと研究所に着きました。本館は古い木造ながら大きくて、玄関も立派に見えましたが、中に入ると空き部屋が多く寒々としていました。裏の方にはまだ工作機械の入った工場の建物が立並び、戦時中の軍需工場の名残りがそのまゝでした。事務所で着任の挨拶をすませて私達は早速蚕室へ向かいました。荒れ地の中に小さいながらも新しい蚕室が建ち、その裏手に桑畑も出来ていました。研究室での最初の仕事は、冬でしたのでまず木炭を運んで来て大きな角型の火鉢に火を起すことでした。天井へ塗ったペンキが床へ落ちているのをナイフでけずり取るのも毎朝の日課としてしばらく続けました。

4月に入って桑の芽がふくらみ始めるといよいよカイコの飼育の準備をしなければなりません。蚕具の洗い場がないので大きい物はトラックで下田街道沿いの桜川の下流まで運んで洗いました。今の森永製菓の前あたりだったと思いますが、その頃は全く田圃の中でした。まだ楽寿園や菰池に富士の雪溶け水がこんこんと湧いている頃で、公害の心配もなくきれいな水が小川一杯に流れていました。

宿舎は合宿（当時そう呼んだ）に入りました。今も本館前に当時の姿を止めている建物です。先輩が3～4人居られました。勿論自炊ですが、まだガスが入っていませんでしたので七輪にナベをかけて板片を燃やしてご飯やおかずを作りました。燃料は裏の方の工場跡へ行けばいくらでも拾って来る事が出来ました。炊事の時は部屋の中まで煙が入って来て今から見れば浮浪者の生活のようでした。

この様な生活も当時はそれが普通でした。カイコの飼育が忙しくなるといちいち宿舎へ帰るのが面倒になり、蚕室の廊下の隅にフトンを持ち込んで寝泊りしました。蚕室の天井裏へ板を張って物置きに使っていましたが、そこへ紙を敷いてフトンを持ち込んだ事もあります。しかし周りが畑ばかりでしたので少し西風の強い日には物凄い土埃が屋根の空気抜きから舞い込んで

閉口しました。

木原先生が第二代の所長になられたのが30年10月ですが、この頃から研究所も創立の苦しみから脱出して発展の時期に入って行きました。カイコの研究室でも田中先生が退任され、31年12月に新しい部長として田島先生が東京から着任されました。この頃になると蚕室も増築され、調査室や洗い場も出来て、ずいぶん便利になって来ました。新しい研究体制に入ると私にとっても全く無経験の放射線照射という仕事が与えられ、カイコを飼育するかたわら毎日X線の照射をする日が続きました。アメリカのピキニ水爆実験もこの頃です。

やがて日本の経済状態もだんだん立直りを見せ始め、遺伝研でも研究面は勿論の事ですが設備の点でも目に見えて充実して来た様に思います。わがカイコでも34年度の原子力予算で立派な蚕室が建てられ現在も活動を続けています。

遺伝研創立30周年を記念して昔の事を知っている私にも当時の様子を何か書くようにいわれましたが、私は自分の職場であるカイコを中心にして自分の身の周りで起きた事や当時の模様を思い出すままに書いてみました。

現在の遺伝研をまのあたりにして、これ程までに発展するとは当時予想もできなかった事です。30年の間にはカイコの関係だけでも多くの方々の出入りがありましたが、この方達の思い出は残念ながらすべて割愛させて頂きました。(昭和54年3月)

Ⅲ．建設と運営

21. 専売公社三島分場とタバコ委託研究についての

思い出

田中正雄*

今から30年も前のことですから最近遺伝研に勤務された方はご存知ないかもしれませんが、遺伝研が開設されてまもなく、すなわち昭和25年から、旧遺伝研の木造二階建の庁舎の階下防火壁の東側に日本専売公社秦野たばこ試験場三島分場（開設当時は分室）が設けられ、昭和39年2月まで研究業務を担当してきました。分場には4室があり、南側の東端にはリリエンフェルト博士の研究室があり、タバコやウマゴヤシの研究をやっていました。その西側に私たち三島分場の研究室が、北側には化学実験室とたばこ作業員の控室とがありました。分場員が最も多かった時には、私と、その後磐田たばこ試験場に転勤された今井さんと、秦野でタバコの講習を受けて赴任された川口、綾部の両君と、たばこ作を担当していた長島、木下さんという年配の二人の計6名でした。分場の使命は遺伝研が専売公社から委託されたたばこ育種の基礎研究をたばこ耕作や品質鑑定の面でお手伝いすることにあつたのですが、分場独自の立場からの研究も行なっていました。分場の附属建物として遺伝研の庁舎北側に長方形で広さ100㎡のガラス温室が建てられ、その東側に1戸建2室の葉たばこ乾燥室がありました。ガラス室内には約35種のタ

*〒560 豊中市熊野町2-5-12; 前秦野たばこ試験場三島分場長

バコ属野生種と多数の種間雑種が植えられ、色とりどりの花を咲かせていました。ガラス室中央の大部屋には高さが4 m 以上にも育った *Nicotiana tomentosa*, *N. tomentosiformis*, *N. otophora* などが露地栽培され、それらの幹が入り乱れて昼なお暗い森林を形成していました。このガラス室は当時γ線照射室やネズミ御殿と共に遺伝研の三大名所の一つとされていました。

専売公社からの委託研究は公社の初代総裁秋山さんの構想によって設けられたものです。秋山さんは前任地の台湾においてサトウキビの品種改良によって砂糖の生産高を飛躍的に増大させたという実績を持っていました。専売局が廃止され、日本専売公社が設立された当時はタバコ黄色種はブライトエロー1品種に統一されていました—これは行政面の必要からそうされていたのですが。秋山さんは他の農作物と同様、タバコも適品種、適地主義で進むべきだとの持論から、専売公社で緊急必要な研究は育種であると力説されました。その構想を実現するための具体策として遺伝研内に秦野たばこ試験場三島分場（分室）を設けて基礎研究の場とし、また育種の実作業を担当する機関として静岡県磐田市の近郊に磐田たばこ試験場（当時は秦野たばこ試験場磐田分室）を設け、両々あいまって育種が進められるよう計画されたのです。そうして私たちに対して、基礎研究のことだから研究の期間はいくら長くても差支えない、腰を落付けてじっくり仕事をするようにと励まされました。

基礎研究の大綱は木原所長を中心とした数名の研究者に秦野たばこ試験場長も加わって討議され、次のように決定されました。

- (1) 優良形質の本質に関する研究、酒井研究室、たばこ研究室。
- (2) タバコ品種の生理生態に関する研究、たばこ研究室。
- (3) タバコの種間交雑に関する研究、竹中研究室、古里研究室。
- (4) 人為突然変異種の育成に関する研究、松村研究室。
- (5) ウイルスと遺伝に関する研究、辻田研究室。

(備考) 研究室名は当時用いられた便宜上の名称、たばこ研究室は専売公社三島分場を指す。

上記大綱に基いて具体的な研究テーマが各研究室によって決定され、実施に移されました。それらの成果は国立遺伝学研究所年報第1号(昭和24~25年)から第11号(昭和35年)までの附録、秦野たばこ試験場三島分場の部に集録されているとおり、おびただしい数に上っています。以下主な成果だけを拾ってみます。

(1) 種間交雑 F_1 の花粉母細胞における染色体の行動調査により、タバコ属植物間の細胞学的類縁関係が明らかにされました。(2) 種子に放射線を照射すると種々の突然変異体が出現するが、その種類、性状、出現率等が明らかにされました。またこの研究の副産物として早生型良質系統三島12-2が育成されました。(3) タバコの葉を火力乾燥する過程でしばしば紅葉(マホガニー葉)が出現するが、この形質について統計遺伝学的調査が進められました。(4) タバコの半数体同質倍数体、タバコと合成タバコ(*N. sylvestris* × *N. tomentosiformis*の複2倍体)の雑種、タバコと*N. debneyi*、タバコと*N. rustica*の複2倍体などが育成され、育種の貴重な素材として利用された。(5) タバコによる蚕児中毒現象は成熟末期のタバコの葉から遊離ニコチンが発散し、それが桑葉に吸着されて起ることが立証された。(6) タバコ立枯病菌の溶原性ウイルスについての研究が進められた。(7) タバコが成熟末期になると気孔が閉鎖したままになるが、その時期はいわゆる収穫適期と一致する。(8) タバコ(♀) × アラータ節植物(♂)の交雑では得られた種子はほとんど発芽しないが、放射線を照射した花粉を交配すると種子の発芽力が高まる。(9) タバコの葉の癒傷速度に及ぼす環境の影響が調査された。(10) 各種タバコ属の葉に含まれるニコチンとノルニコチンの量的関係が明らかにされた。

公社から遺伝研に配付された委託研究費は年々巨額に上り、委託研究が開始された当初は遺伝研の年間経常予算の四分の一近くに達していたとか聞いてい

ます。この金額の点で委託研究が開始された当初から公社部内で異論がありましたが、秋山総裁が任期満了で退陣されたのち、この金額を公社の研究機関で使用した方がいっそう有効であるとの意見が高まりました。委託研究のあり方について数次の折衝が行なわれましたが、以上のような考え方を持つ公社側と委託研究費をもっと増額すべきだという遺伝研側の主張が対立して妥協点が見出せませんでした。その結果、三島分場は昭和39年に閉鎖されることになり、委託研究もまた41年をもって中止されることになりました。このことをあとで聞かれた秋山さんは非常に残念がっておられたのはもちろんです（秋山さん書翰、写真32）。同氏が企画された遠大な構想が画餅に帰したからです。

三島分場が閉鎖されたのち、私は秦野たばこ試験場に、他の場員は別の職場に配置転換され、または退職しました。

私は秦野において第一部長として薬培養の研究をはじめましたが、昭和43年に若いタバコの花粉から多数の半数体を育成できることを見出し、またその染色体倍加に成功し、その後まもなく磐田においてもタバコの育種の大部分は「半数体利用育種法」によって実施されるようになりました。この成功は木原先生はじめ遺伝研の先生方の多年にわたるご薫陶の賜であったことはもちろんです。薬培養の成果が紙上に報道されますと秋山さんはわが事のように喜ばれ、木原先生に感謝の意を表わすとともに「自分が遺伝研に研究を委託したのは無駄ではなかった」と多くの来訪者に述懐しておられたとのことです。秋山さんは昭和45年10月23日に心不全のため亡くなれましたが、秋山さんの委託研究に関する構想にはこのような成果が次々にあがるとの期待が秘められていたようです（前勝田副総裁談）。

三島在住の14年間には他では経験できないいろいろな事項にめぐり合いました。西瓜が毎日家庭に配給になり、御馳走になりましたが、その御礼に種子はきれいに水洗して反納しました。いつでしたか三毛の牡猫が脱走し、捕

獲した者への謝金のうわさが三島市の話題をさらったことがあります。

遺伝研には外人客や有名な方々がよく見えました。皇室関係では常陸宮、皇太子殿下のご来訪があり(写真25)、天皇陛下にもお目にかかることができました。タバコの苗床をご覧になっている皇太子殿下に私がお説明申上げている写真は久保町のある写真屋の店頭に飾られていたものです。この写真は額に入れられ、私の研究室の壁に今も飾られています。

22. 全国種鶏遺伝研究会設立当初の記録

中 村 竹*

I. 全国種鶏遺伝研究会の設立

(1) 当時の鶏の産卵能力

昭和2年政府の養鶏奨励規則公布により、当時全国の飼養羽数は1830万羽内外であった。成鶏雌は、昭和7年には2870万羽を突破し、1羽当たり年間平均産卵数も100個内外から140個にまで伸びた。しかし、太平洋戦争による飼料不足などで飼養羽数は激減、昭和21年頃は成鶏雌羽数680万羽、1羽当たり年間平均産卵数も90個と落ちこんだ。

これらの統計でみる限り、全国平均産卵数は決して多いとはいえないが、国立種鶏場をはじめ地方の関係場、所で実施していた産卵能力検定事業の成績では、年間300卵以上(最高昭14、横斑プリマスロック種365卵)の多産鶏が、昭和4年以来少なからず出ている。ただ、こうした多産鶏は、輸入種鶏(後裔を含む)などが基礎になっている多産系統の雄雌を交配して作り出した。い

* 〒214 川崎市多摩区生田6602; 元全国種鶏遺伝研究会常務理事

わば限られた人々の名人芸的な育種手法によって達成できたものだったといえる。したがって、これをもっと科学的な選抜によって確実に作り出したい、というのが養鶏関係者の願望であった。

(2) 全国種鶏遺伝研究会設立の経過

設立発起人代表小杉方也氏（社団法人日本養鶏協会元副会長）が創立総会で報告した経過内容は次のとおり：

昨年（昭24）10月名古屋市において日本遺伝学会の総会が開催された際、遇々同窓の木原博士に数十年振りで再会する機会を得、その節間博士に遺伝学が産業界の進展に重要なことを強調し、特に遺伝学者が我国の養鶏界に極めて冷淡であることを力説したところ、同席の小熊博士は「実は養鶏界は立派に発展しているものと思っていたが、それなら遺伝学会として考慮しよう」と約され、頗る意を強くした。12月中旬三島市の国立遺伝学研究所を訪問し、小熊、田中両博士と懇談した結果、同研究所で種鶏遺伝の問題を採り上げて貰うこととなったが、「国家として予算がないので、全国の養鶏家が施設、諸費用を負担して貰いたい」ということであった。

そこで、まず、田中博士と同道して名古屋に赴き、服部鋭太郎氏（愛知、服部養鶏園主）と懇談、翌日知事、市長と訪問協力を懇望、更に岡崎種畜牧場の工藤場長に協力を求めてその快諾を得るとともに、直ちに実行方法を議したのである。

本年（昭25）下旬岡崎管内2府13県の会議に、田中博士の御臨席を得て満場一致賛成を得た。更に4月には、関東信越の会議において、管内老練のリーダー10余名の賛成を得た。

次に、寸暇を得て東北、九州、中国地方を歴訪し関係諸氏の協力賛同を得て、益々結成は順調に進展し、一方農林省当局も本会の結成には非常なる熱意を示され、養鶏雑誌協会も趣旨に共鳴、欣然協力を約され、すべての準備

成つて愈々本日茲に創立総会を開催する運びとなつた次第である。

II. 会員の募集

(1) 趣意書

養鶏の生産物は直接には国民の栄養保健の基となり、間接には更に食用作物の肥効源となつてゐることは周知の事実であります。

したがつて、この栄養源は人類生活とは不可分であり、国民文化の進展に正比例して向上しつゝあることは、更に認識を深めねばなりません。

我国の養鶏は既に産業的に企業化され、全国津々浦々に副業に、專業に実現されてゐたのでありますが、この大戦の結果急激に縮小され領土も狭められ、飼料もある限度の自給に追込まれたのであります。又一方戦時中の統制は自由經濟に轉換されつゝある今日、養鶏の合理化は必然的に要求されてきました。

我政府は20余年前から全国5ヶ所に国立種鶏場を設置するとともに、年々巨額の国費を投じて海外先進国から高級能力鶏の輸入を図り、繁殖普及に努め、増産と經營の有利化に拍車をかけてきたのであります。しかしながら、現在においても能力鶏の必要は益々全国的に絶叫されてゐるとともに、いつまでも海外先進国に追従することは国費の消耗においても、又研究技能の劣弱を示す点においても誠に忍びないものがあります。日本養鶏協会がこの点に着眼して、鶏の能力現場検定を実施したのも時機を得た方法であり、現実能力の良否を知ると共に經營の合理化の必要を体得することでしょう。

又、全国の各地には、個人的に優秀能力鶏の作出に努まれその成果にも見るべきものが相当にあります。慶賀すべきことでもあります。しかしながら、これらの作出家が終始自己の資産を無制限に傾けて没頭することは許されぬことであり、自己の生活確保を夢寢にも忘れることができない現状であります。一方米國その他先進国においても着々改良の実を取めつゝ、常に吾等の優位にあることを分析してみれば、それは個人經營の場合の資力、或は使用し得る地積等、彼我の差は当然認められるところではありますが、人的要素、努力の点においてさほどの相違は認められぬのみか、むしろある点においては凌駕していることもあります。それにもかかわらず永年追従を余儀なくされてきた原因は、米國において大学なり、試験場研究所等が各々その専門的部門において業者と密接不離おかれていて、絶えず業者の行詰りを協力研究、指導してゆく点に存するからであります。殊に政府機関は業者の企図できぬ国費をもって、業者の不可能とされる点を研究解決し、行詰まりの要

所要所を徹底的に指導していることは見逃がさぬことであります。

従って、業者は研究機関を高度に利用し、実際の価値を高めることに努力しているに相違ないと信ずる次第であります。

これらの点において我国の現状は甚だ立遅れの状態にあり、過去数十年の実績を顧みる時、鶏の能力改良問題は生易しいものでなく、徹底的に遺伝学に立脚した科学研究にまたねば、吾人の目的は貫徹できないことを突きとめた次第であります。

幸い昭和24年6月静岡県三島市に国立遺伝学研究所が開設されて、遺伝学界の諸権威が研究に応用に没頭されることになったのであります。

吾々同志はこの機を逸せず鶏の能力、品種改良の基本的研究、能力鶏の作出を懇請いたしましたところ、研究所長並に各権威者の快諾を得、更に第一部長農学博士理学博士田中義麿先生（九大名誉教授）が先生の畢生の仕事として、その衝に当たられることになり、御快諾を得ましたことは誠に鶏界のため至幸とする処であります。勿論研究は先生の貴重な御体験に基づき、先生自ら着手されるのであります。300卵水準の固定系統作出の暁には吾々永年の宿望を達せられるとともに、やがて海外にも輸出されることができれば、我鶏界のため望外の幸でなくて何でありましょうか。

しかし、これが完成には少なくとも5ヵ年乃至7ヵ年の歳月を要します上に、設備万端は吾々鶏友の力にまたねばなりません。この意義ある使命達成のためには全鶏友諸兄の絶大な御支援御協力を切望いたすのであります。

なお、全国の同志鶏友は会を組織して国立遺伝学研究所に諸設備を整え、一面会員の研究機関とし、直接に田中先生の御指導に浴しうることになしたいたいと思う次第であります。

この願望達成に向かって重ねて各位の御賛同を謹んで懇望いたします。

(2) 事業計画（趣意書と併せ発表）

a 研究方法：趣意書の目的を達成するため、25系統（1系統5羽）の雌に25系統（1系統5羽）の雄を計画的に逐次交配して、その仔の体形、活力、能力等を調査して改良淘汰を行う。従って成鶏は常に250羽を飼養し、仔鶏は毎年2,000羽を餌付育成する。

b 原鶏の無償配布：正会員に対しては研究用の鶏を無償配布する。

成鶏 250羽 中雛（8—90日） 1,050羽

c 設備及び資金：研究用として本会は昭和25年度中に在静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所の用地に次の設備をなす。

試験舎 1棟、孵化育雛舎 1棟、コロニー舎 7棟、職員住宅 2棟
(備考) 事務所倉庫等は遺伝学研究所の1部を借用。

資金：所要資金は建設費及び経常費を含めて5ヵ年間1千万円。

d 職員：田中博士の研究実施に伴い本会は種鶏飼養管理のため次の職員をおく。

主任 1名、鶏の管理者 4名、傭人 2名(耕作及び雑役)

(備考) 事務関係は遺伝学研究所に依頼。

(3) 会員の資格及び会費

a 正会員：(資格) 種鶏家及び改良に興味を有する個人又は法人その他の団体。(会費) 第1年度 1口 15,000円、第2年度以降 1口 8,000円

b 準会員：(資格) 種鶏改良に関係ある公務員又は法人その他の団体の役職員。(会費) 入会金 500円(1人)

c 毎年最少限度1回国立遺伝学研究所において会員の研究集会を催す。

Ⅲ. 沿革

25. 9. 24 創立総会(遺伝研会議事) 110名出席

26. 4. 1 遺伝研敷地内約3,800㎡使用契約締結

6 事務局を日本養鶏協会より遺伝研内に移す

8 設立準備委員中村竹(養鶏協会囑託) 常務理事

5. 31 社団法人認可申請

7. 20 第1回通常総会(三島) 168名出席

26. 8. 1 鶏舎その他養鶏関係諸施設竣工（工費約200万円）基礎鶏白レグ♂ 7♀ 12, 横斑ロック♂ 2♀ 4 収容
10. 23 第1回雛孵化
27. 1. 7 自然科学研究施設所有認可申請（公取委）
2. 28 “ 認可
4. 23 社団法人設立許可（農林大臣）
5. 26 “ 登記完了
6. 28 社団法人としての第1回通常総会（三島）
7. 21 本会研究費27年度補助金（25万円）交付決定（農林省）
9. 10 秩父宮、本会総裁に推戴
28. 1. 4 “ 逝去
- 27 365卵鶏研究会開催（三島）
6. 29 第2回通常総会（三島） 106名出席
9. 29 農林省研究費28年度補助金（25万円）交付決定

IV. 概 説 書

（昭和27年9月顧問駒井卓博士とともに小熊会長田中副会長が秩父宮邸に伺ったとき、持参したもの）

- (1) 名 称 社団法人全国種鶏遺伝研究会
- (2) 目 的 遺伝学及び育種学の応用により鶏の優良系統を造成し、日本養鶏の画期的発達を図る。
- (3) 所在地 静岡県三島市谷田 国立遺伝学研究所内
- (4) 会 員 正会員 236名（出資口数271.5口）、準会員 16名、賛助会員 3名 経済協力者、特別会員 50名 中央・地方養鶏奨励関係技術者
- (5) 役 員 会 長 小熊捍（国立遺伝学研究所長）

副会長 田中義麿 (同研究第一部長)

種鶏遺伝研究所長兼任

外に副会長 2 名 常務理事 1 名 その他理事 14 名 監事 2 名

(6) 事業現況

a 施設：国立遺伝学研究所敷地内に本会の種鶏遺伝研究所を置き次の施設をなす。

孵卵育雛舎 1 棟，試験鶏舎 1 棟，コロニー鶏舎 6 棟，

電気孵卵機 1 台，育雛バトリー 3 台，管理者住宅 1 棟

b 研究：多産系統の雄及び雌を基盤目式に交配して夫々の組合せによってできた後代の能力を比較判定し，逐次産卵能力に関係ある優良遺伝子の固定を図る意味で，全国の代表的系統と目される多産鶏を集め，その調査研究を行いつつ，これより得た後代雛につき後代検定を行う。

なお，これらの研究鶏調査は，本会が直接その全部について調査をすることもできないので，1 部を会員に配布し共同研究の形をとる。

c 研究費の国庫補助：本会のこの研究に対しては農林省もその重要性を認め，昭和27年度より「産卵能力遺伝に関する研究費補助」として年額 25 万円を本会に交付することになった。

V. むすび

本稿 1-(2)に記したとおり，国立遺伝学研究所に予算が少ないというので，養鶏界が資金を負担してでも鶏の遺伝に問題を探り上げて欲しいとって本会は設立されたが，その後，国家予算でこの研究が続けられるようになった，ということで本会の使命の大半は果たされた形となった。

顧みると，この種の団体はたとえ公益法人とはいえ，会員が業者である以上出資に対する反対給付を期待することがきわめて急であるのに対し，鶏の遺伝ともなると作物や蚕など以上に困難な面があるので，一朝一夕に研究成

果が現われるものではない。それに伴い会費の集まりは目に見えて困難となつて、養鶏行政的関係者の援助協力によって辛うじて運営を続ける有様になった。しかし、こうした行政的色彩が濃厚になることは、研究者の立場からするとすこぶる不快らしく、ことごとくに円滑を欠く面が生じてきた折柄だったので会の仕事が国に移管されることは大に歓迎すべきことだった。

研究者、技術者、行政担当者及び実際家との結びつきが業界発展に重要であるとはいえ、それぞれに立場があつて緊密な連繫を保つことがいかに難かしいものであるか、ということをしみじみと思い知らされた観はあるが、本会の設立がわが国養鶏界の育種に対する正しい認識を深めた功績は見逃がせぬものがあったと思う。

23. 回想雑感—忘れられない人々のこと

吉川 藤 一*

私は、昭和34年4月から36年5月まで、宮沢正夫会計課長の後任として勤務させていただいた者です。それからもう20年も過ぎ、研究所が創立30周年を迎えるというお知らせを受けて感慨ひとしお深いものがあります。

私の勤務した頃の研究所長は木原先生、研究部の部長は田島、竹中、辻田、大島、酒井、松村、松永の諸先生で、事務部長は清水邦夫、大友端立の両先輩でした。

何分にも私にとって、研究所のような建造物を直接管理するというような仕事は初めてのことで、研究所の皆様に御迷惑をかけたことが多く、所内外

*〒102 東京都千代田区麹町5-3-1 ヤマトビル、日本学術振興会総務部長；元会計課長

の関係者の御好意によって、とにかく2年間勤めることができました。多数の方々の御指導、御援助を受けたものですから、忘れえぬ人々は多数おられる訳ですが、その中から何人かの方々の思い出を綴ることにしました。もう20年も過ぎた昔のことですので、多少裏話を含めてもお許しをいただけたらと考え、あえて関係者の御迷惑を省みず、ここに記して私の責を果たしたいと思います。

I. 本館新営

(1) 部長会議で本館新営の計画が進められ予算要求を行うことになった。

要求書には現使用建物の老朽危険度に関する調査票を添付することが必要とされていた。これは専門家の調査に基き作成されるものである。研究所には専門家がないので、静岡大学の施設課長にこの調査票の作成を依頼することとした。課長は藤野節儀氏（大阪大学施設部長を最後に停年退官し、現在大阪地区で民間の会社に勤務）であった。藤野課長の調査によると、旧研究所本館は戦時中の新営であるにもかかわらず、木組み等も堅固で、当時の国立大学の建物に比較すると危険度は概して低いということであった。しかしさらに詳細な調査を行ない、最終的には予算要求の可能な調査票を作成してくれた。恩人の1人である。

私が名古屋大学の経理部長のとき、藤野氏は施設部長として転任して来られ、いっしょに仕事をするようになった。藤野氏はこのことに一言もふれず、私もふれなかったが、今でも藤野さんの好意は忘れられない。

(2) 昭和36年度予算に建物新営費が800万円ほど計上されたこと記憶している。旧建物をとりこわすのにこの予算を使うのはもったいないので、取りこわし費用先方負担で売却することにした。これは国有財産の処分の手続きで各方面に多くの手数をかけたことを記憶している。誰が売却先を紹介してくれたか思い出せないが、清水町の製紙会社が取りこわし費

自己負担で購入してくれたと思う。

- (3) また基本設計を作成する段階で、当時の門脇淳三用度係長（現鳥取大学主計課長）と2人で東京大学の柘植芳朗施設部長（東大教授その後東京理科大学教授）に建築に関することについて教を請いに行ったことがある。部長に訪問の趣旨を説明したところ、親切にもいろいろお教をいただいた。結局、「建物の両外側と廊下の両外側に柱を入れる設計」にすることが、建物の基本型としてすぐれていることが理解できた。

私どもは、この原則に基いて基本図面を作成し、建設担当部局である名古屋の中部地方建設局と打合わせを行った。中部地建の担当課長は、この方式は最も単純であるが、耐震性に強い構造であるとお世辞かもしれないが言われたことを記憶している。

私どものような不しつげな訪問に対して親切に応待をされた柘植部長に対し、心からお礼を申し上げたい。

私は、研究所本館の特色の一つは中央廊下が広いことと、さらに地震に強い建物であるのが特色であると今でも確信している。

II. 研究所宿舎の建設

当時研究所には、構内宿舎、城の内宿舎及び三島市内に3戸の宿舎があるだけで、適当な宿舎用地もなく、新設要求もできない状況であった。そこで市内の3戸の宿舎と宿舎用地を交換する計画をたてた。国有財産法上は「建て交換方式」である。当時はまだこの方式は必ずしも定着していなかったので、関係方面の承認をうることに苦勞したものである。

三島市が土地とその敷地上に宿舎を建築し、それと市内の宿舎を交換するのである。三島市の相談相手は、臼井佐吉総務課長（2、3年前に逝去された）で、氏も好意的に取扱っていただいたが、三島市内の宿舎の売却先を探すことと土地購入は、実際は私どもの手で行うことになっているので、これ

らの仕事は、今思い出しても心労の伴うものであった。夜おそく土地の所有者を訪問し、何回も折しゅうを繰返したことを覚えている。好意的な地主さんもいたが、結局一部の土地は買い残した。父祖伝来の土地に対する農民の愛着が痛いように感じられ、何度か中止しようかと思ったこともある。

最も財源的に大きい庶務部長宿舎の買手を探すのに苦勞したが、鈴木建設興業の鈴木繁夫専務の勞で、同社々長鈴木理吉氏（故人）が購入することとなった。ぎりぎりのところで、当時の松原尚躬用度係長（現在国立極地研究所会計課長）とともに、夜おそく鈴木社長に面会を求めたことなどが思い出される。

さて、このような経過をへて、研究所正門前の土地に、数戸の宿舎を建設することができたが、ここは高台で、田方平野から吹きつける風が強く、とくに颱風の場合には、屋根が吹き飛ばされるようであった。そこで宿舎の周辺に防風林を造成することとし、そこに松や「馬喰わず」を植えた。庶務部の職員、農場勤務の人々も手伝ってくれた。私も植えたばかりの松の苗木の周囲の雑草を刈取り、手を「かや」で血だらけにしたことを覚えている。

研究所を訪れるときに、この小防風林の成長を見ることは、たいへん楽しいことであった。

Ⅲ．水洗便所工事

遺伝研の私の宿舎は、構内宿舎の一つであった。夏は大きな蛾などがあらわれ、都会育ちの子供達を驚かしたこともあり、喜ばしいこともある。ときどき青大将など蛇もあらわれる。

便所の悪臭も悩みの種であった。便槽も浅く、夏は蛆が発生し、ときには廊下にはい出るほどであった。

研究所には外国から科学者の来訪も多い。家庭に招待することもあろう。そこで宿舎地域に浄化槽を設置する計画をたてた。

門脇係長とともに構内宿舎便所改修工事要求書を作成し、文部省の第1予算班に予算要求を行うこととし、小林直男主査（文部省大臣官房参事官を最後に退官し、昭和52年に逝去）に要求の趣旨を説明した。主査は口が悪いのが有名であるが、反面心はやさしい人で、頭ごなしにどなりつけられたのでだめかと思ったが、そのうち各所修善費の示達を受けた。そして最初の年は構内宿舎、2年目は城の内宿舎について改修を行うことができた。

その頃、浄化槽の容量や配管のことばかり考えていたので、私は便所課長ではないかと思った。

IV. 竹倉の給水設備

研究所の用水は、現在は市水を用いており、一部はまだ竹倉の自家給水を用いているようであるが、私が研究所に勤務した当時は竹倉の自家給水のみを利用していただ。

竹倉の給水設備のある所は、部落の中を流れる小川の中にあり、附近には農家が散在し、豚小屋や馬小屋もあり、一見したところでは、衛生的に必ずしも良好な環境であるとは言えないようであった。ときどき保健所に依頼して水質検査をしていたが、もし部落に伝染病でも発生すれば研究所は用水の補給を絶たれるわけで、いつも心配の一つであった。

この竹倉で汲み上げた水を研究所の農場の一隅にある水槽に送水し使用していたわけであるが、竹倉にある揚水ポンプに指令を送るための電線がときどき盗難にあった。当時は朝鮮動乱の前後で、鋼材などが著しく値上りしていたのである。

もちろん泥棒は夜間やってくる。私は夜眼れないときなど真夜中によく水槽の近くに出かけ泥棒がやってくるのを見届けようとしたこともあった。夏の夜など満天の星が輝き雑木林を越えて涼風が吹き渡ってきたことを思い出す。このあたりも今では人家が建てられてきたのではなからうか。

さてこの送電線は銅線を用いていた。私は会計課の真野朝吉君（現在研究所会計課の経理係長で沼津工業の電気科卒業）に銅線だから盗難にあうので鉄線を張ったらどうかと言ったところ、彼は鉄線では効率が悪く作動しないおそれもあると言った。私は珍しく専門家である真野君の意見に従わず鉄線で工事を発注することとした。これで盗難事件もピリオドが打たれるようになった。鉄線では商売にならなかったのである。

24. ロックフェラー財団の援助と稲の研究

岡 彦 一*

本研究所在創立後8年を経過し、研究体制と設備を整備する段階にさしかかったとき、ロックフェラー財団から多額の研究費補助を受けたことは誠に幸であった。ロックフェラー財団の海外における活動は主として発展途上国における公衆衛生と農業およびこれに関連する研究の援助である。いわゆる高度経済成長が始ってからは、西欧諸国と同様に我国も援助の対象地域から外されたので、今日では同財団の援助を求めることは不可能である。しかし、私は木原所長の下でロックフェラー補助金による稲の研究に終始関係し、またその恩恵を受けた一人であるので当時の思い出を簡単に書いて見ようと思う。

ロックフェラー財団の農業部長R.F.Chandler博士が始めて当研究所を訪れたのは1955年8月、小熊所長の時代であった。R.Bradfield博士と一緒に、所員一同を会議室に集め駒井先生の司会で講演された。その詳細は記憶にないが、日本各地の農業研究を視察した印象をレビューし、また奨学金につい

*応用遺伝部長

ても説明されたと思う。その講演の中に「日本では稲の研究はすでに十分に行われているので今後その研究を援助する必要はないが、他の作物や牧草などについては研究の遅れている点が多いので援助することに関心がある」と言うような表現があった。話が終ったとき駒井先生が一同に質問はないかと言われたので、私は手を挙げて、「稲はアジア各国の重要作物であるが未解決の問題が多く、御話の点には賛成できない」と下手な英語で反論した。

私はロックフェラー財団については前任地の台湾で戦中戦後流行したマリアの防除のため多額の補助金を支出して協力したことを新聞で知っていた以外には何も知らなかった。私の意見に対してチャンドラー博士は不愉快の反応を示し、セミナー終了後直ちに駒井先生と共に私の部屋に来られ、「貴方の反論の根拠は何か、具体的に示せ」と質問された。私は台湾でやっていた仕事などから問題点をとり上げ説明したが十分な説明はできなかったと思う。後日、チャンドラー博士の性格を知って、この日のことは極めて好意的な反応であったことが判った。

チャンドラー博士が2回目に研究所に来られたのは1957年1月末であった。ロックフェラー財団では、この頃アジア地域における農業関係の活動の基本方針が定まり、主要食糧作物である稲をとり上げることになっていったと思われる。それは1961年フィリッピンでの国際稲研究所（IRRI）の設立にもつながるであろうが、基礎的研究は日本でも行う予定であったと思われる。当時、所長として木原先生が来ておられた。チャンドラー博士は植物関係の研究者を集め、稲についてよい研究課題があれば援助を考慮しようと言うことであった。

その後、木原先生を中心に相談し、研究課題は先生の御提案により「栽培稲の起原の研究」と決定された。木原先生からの手紙に対して、5ヶ年間125,000ドルと言う補助金が内示され「正式の申請書を提出せよ」と言う返答は電報で届いたように記憶している。遺伝研では、私が台湾で少しばかり手

を着けていた以外にこの方面の研究には全く過去の実績がなかった。一方、農業技術所では盛永先生を中心として稲の細胞遺伝学的研究の実績があった。しかるに、この基礎研究の補助金が遺伝研に与えられたことは木原先生の国際的名声（レピュティション）が絶大であったことによるであろう。

1957年5月には、さらにロックフェラー財団医学部からR. K. Anderson博士が来られて同年秋から3ヶ年計画として「動物における放射線の遺伝学的影響」の研究に補助金が与えられることになった。これは現所長、田島弥太郎博士を中心に運営されたが、木原博士を代表者とした。1962年「栽培稲の起原の研究」が終了したとき、「稲の細胞遺伝学的研究」としてさらに3年間延長され「木原生物学研究所」をも包括した。また1961年日本人集団の遺伝学的研究のためロックフェラー補助金が与えられたが、それには木原博士がその終了まで所長に留まることと言う条件がついた。1965年には「稲の標本等を保存する」ためロックフェラー財団は建物の建築を援助した。これは本研究所講堂（2階）の階下の部分である。これらの事実は木原博士の偉大な名声を証明する足りるであろう。

1961年、国際稲研究所が設立されたときチャンドラー博士は所長を担任し、S. Wortman博士とともに創設に努力した。木原博士は日本を代表する理事として同研究所の運営に参画され、1963年には「稲の細胞遺伝学および遺伝学」に関するシンポジウムが開催された。その後、国際稲研究所は有名な半矮性多収品種群（台中在来1号に続き緑の革命と言われた）の育種を始めとして、世界的視野に立つ稲の農学的研究に指導的な業績を示した。私はたびたび訪問したが、チャンドラー博士は何でも卒直に意見を述べて指導する反面、下部の状況をよく把握して親切であり、なかなかの名所長であった。1970年、同博士は国際稲研究所を退き台湾台南に新設された「アジア蔬菜研究発展中心」の創設所長として5年間尽力した後マサチューセッツの故郷に引退された。遺伝研の初代所長小熊博士と同様、研究所新設運営の専門家であったか

と思われる。

木原、チャンドラー両博士のおかげで、私どもは60年代には国際稲研究所とも親密であった。しかし、その後先方の方針も変り日本でのカウンターパートは農林省関係機関となった。

話が脱線したが、1957年に戻りロックフェラー財団から多額の補助金を頂いて、私たちは研究所内に「稲研究委員会」を組織した。

補助金の出納は国の予算の経理に準じることとし乙藤庶務部長、杉生庶務課長、宮沢一吉川会計課長などに大へんにお世話になった。しかし、最初の申請書から最後の報告書まで毎年のロックフェラー財団に対する報告・申請書は私が起案し委員会の承認の後、タイプライターで浄書せねばならなかった。私は若かったが研究にも忙しかったので、これは苦しい仕事であった。我国の研究費の経理と只一つ異なる点は年度間のくり越しができる点にあった。くり越し額を正確に報告するだけでよく、このことは1ドルが360円に相当したことに加えて研究費の効率的な利用をたすけた。

「稲研究委員会」では木原委員長は採集、竹中要先生は細胞遺伝、松村清二先生は形態と生理、酒井寛一先生は集団遺伝、私は遺伝子研究を担当した。採集旅行は積極的に行われ、今日まで16回に及び、野生稲の収集については世界最大の規模となった。それと共に稲野生種の出産地の環境条件も判ってきた。しかし、1963年私は台湾省立農学院教授張文財博士とともに西アフリカに旅行したとき、カメルーンで自動車事故のため私は重傷に止ったが張博士が殉職された。この哀しむべき事故のため私は1976年6月タイ国に行くまで海外調査旅行を謹慎した。1977年には森島啓子、佐野芳雄両氏とともに再び西アフリカに旅行した。1975年遺伝研には「遺伝実験生物保存研究施設」が設立され、稲系統の保存は植物保存研究室佐野研究員にひき継がれている。

「稲研究委員会」は7名の若い研究員を採用した。その人達は現在それぞれの勤め先で活動しているが、遺伝研に残ったのは応用遺伝部の森島啓子室

長である。私たちはロックフェラー財団の補助の終了後も「栽培稲の起原の研究」を国費などによって継続しかなり多数の論文を専門誌に発表した。しかし、未解決の問題は次々に発見されて増加するばかりである。短日圃場や温室に植物を栽培し肉眼で観察するものだけに限っても今後に残された課題は多数である。遺伝子の構造と機能に関する研究は生化学的技術の進歩によって急速に発展したが、同時にエコロジーにおける遺伝子の役割について種々の問題が生じているからである。以上、私はロックフェラー財団補助金について思い出すことを率直に書いて見たが、要するに昔の名言のとおり「人生は短かくアートは長い」と言うことであろう。木原・竹中・松村・酒井各先生やチャンドラー博士はじめお世話になった多くの方々に深く感謝して終りにしようと思う。

(附記) NIH研究費の援助

吉田俊秀

国立遺伝学研究所はロックフェラー財団による研究補助の外に米国国立衛生院 (NIH) より可成りの研究費援助を受けたのでそのことを一言附記しておく。前微生物遺伝部長飯野徹雄氏は「サルモネラ菌の免疫遺伝学的研究」で昭和34年より6ヶ年間、前生理遺伝部長大島長造氏は「ショウジョウバエ集団における有害遺伝子の集団遺伝学的研究」で昭和36年より3ヶ年間、また筆者は「癌の細胞遺伝学的研究」で昭和39年より5ヶ年間それぞれNIHより研究費の補助を受けた。ドルだてによるこの研究費は非常にありがたい援助となった。この研究費は備品、消耗品費の外に人件費にも使用でき、研究協力者を備うこともできた。飯野さんや大島さんらの輝やかな研究はこの研究協力者によるところが大きいと思う。筆者らのネズミを材料とした癌の

遺伝学的研究もこの研究費によるところが大きい。ここにNIH研究費に感謝の意をもって記録に留めておく。

25. 6年間の思い出

森 脇 大五郎*

創立30周年に際しての思い出といえば、創設前後のことから今日まで数々あるが、ここには木原先生の後をついで6年間所長として三島で過した昭和44年から50年までのことをいくつか思い出すままに記することにする。

先ず木原前所長からの申し送りの大きなものとして二つあったが、その一つは、やがて移転予定の東（錦田）中学校敷地約5000坪の確保という仕事だった。これは創設当時一たんは研究所の敷地に予定された中から中学校用地に割愛されたが、“将来予定されている中学校の移転が実現した際には優先的に研究所用地に返還する”ことが初代小熊所長と三島市長との間で確約された、という事情に基くものである。木原所長時代に非常に困難を経てようやく2000坪の大原農場を確保されたのも中学校の移転が遠からず実現する情況にそなえての代替地の含みがあったと聞いていた。小熊所長の意を受けられた木原先生はこの件に関して三島市長との話合いをつづけることに勤められたが、私もこれにならって折を見ては当時の長谷川市長との懇談をつづけた。幸いに長谷川市長は創設当時の申し合せをよく理解され、先頭に立って確約実現に努力して下さった。途中種々困難な曲折もあったが代々の庶務部長（大谷田・工藤・手塚3氏）、会計課長（加藤・福井・玉手3氏）を中心と

* 〒154 東京都世田谷区下馬6-12-11, 前所長

する事務当局の並々ならぬ御骨折で、辛うじて私の存任中最後の予算接衝で錦田中学校跡地購入費が認められ、やがて大原農場との交換も含めて解決に至った。

木原先生からの申し送りの第2は植物遺伝研究施設の設置であった。これは近代遺伝学が滔々として分子レベルの研究に向う情勢の下で高等生物、特に高等植物を対象とする遺伝学研究の衰微は看過できない、との御趣旨によるものなので、何とか御期待に沿わねばと考えた。種々検討を重ねたがどうもそのままの形での実現は極めて困難という結論に達し、所内での慎重な審議の結果、高等植物及び高等動物を対象とする「遺伝実験生物保存研究施設」の設置にふみ切ることになった。系統保存のことはかつて駒井卓先生がその重要性を説かれ、文部省予算によって各種の生物に関する系統保存費が夫々の国立大学等に計上されて以来各方面の理解が深まっては来たが、系統保存は単なる保存ではなく研究面との緊密な連けいの下にはじめて効果をもつものであり、運営についても多くの問題が残されている。この施設の目的は先ず遺伝実験生物として遺伝研が永年に亘って育てて来た重要系統を永く保存して所内の研究の進展に寄与することにあるが、同時に所内の研究に対する有力な支援の役を果たすこともいうまでもない。もとより目標に到達するまでには種々の問題を解決しながら努力を重ねて行かねばならず難事業ではあるが、幾多の偉れた研究業績をもつ遺伝研が理解をもって育成につとめるならば必ずや意義深いものになると信じている。しかし研究所内の一施設としては少くとも当分は規模においても自らある程度の制約があることはやむを得ないので、系統保存の全部を施設だけで賄うことは無理である。形式上はともかく実質的には研究部門が協力してはじめて成果があげられることになろう。また、それでこそ遺伝研に設置する意義がある、といえるのではなからうか。なお、当初は木原先生の強調された高等植物をひろげる意味で高等動物までを含める計画であったが、系統保存の趣旨からも、又遺伝研における

重要研究の実験生物という意味からも微生物を加えるべきであると考え、現在進行中のように植物・動物・微生物の3保存研究室で出発することになった。今後更に内容を充実し立派に存在意義のあるものに発展して行ってほしい。

今一つ木原先生からの申し送りとなったのは44年度新設の分子遺伝部の部長選任のことだったが、幸いに三浦部長の就任が実現した。さらに私の在任中は偶然部長人事があいつぎ、生化遺伝部の辻田部長停年退任に代って杉山新部長を迎えた他、東大教授に転出された微生物遺伝部飯野部長の後任に広田部長、同じく停年を機に鹿児島大学教授に転出された酒井部長に代って岡部長が就任された。

研究所の将来計画の一環として建設が予定されていたネズミ飼育棟と図書館の新設が実現したが、図書館については予算の一部不足を木原先生の御好意により御寄付を仰ぎ、計画通り3階建が出来上った。かねて先生を永く記念するものと考えていたので、この機会に図書館の3階に先生のリリーフを作らせていただいた。なお、先生を記念するものとしては前庭に先生の御希望によるヒメシヤラの記念植樹がある。

遺伝研創設に際して小熊初代所長は自ら細胞遺伝部長を兼ね、田中義鷹九大名誉教授が形質遺伝部長に、駒井卓京大名誉教授が生理遺伝部長に就任されたが、このようにわが遺伝学界の3長老が研究所の使命達成のために新たな情熱を燃されたことが研究所の基礎固めと発展にどれほど大きな力となったかは測り知れぬものがある。この遺伝研にとっての大先輩である3長老が私の存任中わずか1年の間にあいついで世を去されたことは痛惜の極みである。小熊先生は昭和46年9月86歳の高齢をもって逝去されたが、それから1年も経たぬ47年7月1日には田中先生(87歳)の訃に接し、ついで7月9日には駒井先生(86歳)逝去の悲報を受けたのである。

昨53年7月14日91歳で逝去された名誉所員フローラ・リリエンフェルト博

士の研究所に対する大きな御功績は年報第28号の巻頭言においても田島所長が述べられているが、私の着任した頃はまだお元気で城の内から毎日研究室に通われていた。毎朝のように車にお誘いして研究所に着くまでの短い時間をお話できたことはなつかしい思い出である。しかし間もなく健康を害され研究室にも出られなくなったが、木原先生が大原農場にあった木原生研分室に来られる度に博士を見舞れると大へんお喜びになっていつまでもお引留めになり、辞して帰るのに苦勞した、と木原先生がお話しになっていた。そんなとき先生が“ダイゴロウにあいに行くから”と仰ると納得されたと伺って、いつまでも心に掛けていただいたことを知って胸のせまる思いだった。

この他まだいろいろと思い出はつきないが、最後に若葉会のピクニックで行った忠ちゃん牧場・昇仙峡・葡萄狩・フラワーパーク・サイクリングセンターなどの思い出も、親しくしていただいた所員の皆さんの御厚情とともにいつまでも忘れ難いものである。

IV. 環 境 を 守 る

26. 東中学校の工場転換騒動記

辻 田 光 雄*

昭和24年12月上旬のよく晴れた日、私は初めて開所後間もない三島市谷田の遺伝学研究所を訪れた。小熊所長は木造の本館内を案内して下さった後、圃場と城の内の遺伝研宿舍予定地を私に見せるため、屋外に出て現在の西二番圃の中央道を西に向って歩みながら、工場風の建物のある右方を指差して『この建物より北方の一角はかねてより遺伝研で確保していた区域内だったが、三島市より中学校敷地として分譲依頼があったので、割譲することになった。しかし将来はなるべく早い機会に学校は他へ移転して貰い遺伝研敷地に復帰させたい』との構想を話されていた。

昭和25年3月始め、私が遺伝研に着任後5年を経て、突如この中学校敷地の化学工場への転換問題が起こり、一波乱があった。この騒動の顛末について振り返って見よう。

この問題の発端を関係書類によって見ると次のようになる。昭和30年4月半ば三島市は市立東中学校敷地と建物の全部を民間業者に売却しようとした。この計画の説明書によると、静岡県商工部工業課の斡旋で、三井系日西化学株式会社（東京都台東区北柳橋1の19）の過酸化水素製造工場とする。社長は九州炭鉱主馬場啓之で、5月新設予定。国内で同じ会社として唯一つ三菱系江戸川工場（山北町）があること、工場の石炭の使用量の少ないこと、付

* 〒411 三島市谷田136-60; 名誉所員, 前生化学遺伝部長

近に悪影響を及ぼさないこと、等が詳しく記載されていた。研究所に対しては、この説明書が6月初旬まで伏せられていたため、研究所側で江戸川工場について実状調査することが遅れてしまった。

三島市では東中学校の土地および建物を上記化学工場用として高く購入して貰い、その金で中学校を移転し、さらに工場誘致により市に財政的利益を齎すならば、正にこれは一石二鳥の名案であった。それに付近には被害はないので、遺伝研も文句はいうまいとの予想の下に、この計画を推進することになった。

かくして昭和30年4月26日、時の松田市長が来所したが、小熊所長不在のため、乙藤庶務部長に、遺伝研に隣接する東中学校敷地を過酸化水素工場に売却したいが、この工場は石炭の使用量も少なく、騒音もなく毒物も流さず工員も60名位で、研究所に被害を及ぼすようなことはないと思うので、この市の計画を御了承願ひ度いと申し入れた。

翌27日、庶務部長は小田原の自宅にいる所長に市長の申し入れを連絡した。折悪しくこの頃所長は御病気のため自宅静養中だったので、田中部長が所長に代ってこの問題の処理に当たることになり、5月4日の定例室長会議では田中部長がこれを中心議題としてとりあげた。この化学工場で気になるのは研究所に被害を及ぼさないといっているが、これは工場敷地獲得のための口実で、石炭の使用量が意外に少ないこと、またこの種の化学工場で問題となる有毒ガスの発散に触れていないこと等どうも腑に落ちない点がある。また一旦民間業者の手に渡ると、後にはどんな変化が起こるかも知れず、それにより被害の増大することも考えられる。研究所としては、市長の申し入れに対しては絶対に反対すべきであるということに意見が纏まり、この反対決議を市に返答することになった。市側との交渉役には田中、竹中、乙藤の3氏が当たることになり、5月11日市長に面接して、御申し入れの件については反対である旨を表明した。これに対し市長は『この工場誘致は三島市発展のた

めに必要欠くべからざるものであり、その実現を期したい』という強硬意見を以て答えた。この際3人の交渉役には、松田市長は研究所の立場とか使命について殆んど全く理解していないように感じられた。

そこでこの市の強硬方針を変更して貰うため反対運動を行なうことになった。5月18日の定例室長会議においての対策協議では、市や県の関係者に配布する反対理由書を竹中部長が作ることになり、その原稿は急ぎ印刷された。これにはいくつかの面から詳しく反対する理由が書かれていたが、一通り読んで気付くのは、最も大切な工場による研究所の被害については推測だったので、反対する根拠が不十分な嫌いがあった。しかし兎に角この反対理由書は、市長、市役所幹部職員、市会議員、市教育長、保健所長および報道関係者らに配布され、文部省学術局にも問題の経緯を書いた文書と共に送付された。

県庁へは松村部長と乙藤庶務部長とが出張し、商工部長と工業課長に面談して、遺伝研の隣接中学校敷地への工場誘致には反対であるので、何分の御配慮を願う旨を申し出て、反対理由書を手渡した。

何分にも当時の三島市の市会議員中には遺伝研について全く理解していない人が多く、市議会で工場誘致を決議して押しつけてくる可能性があったので、6月初め田中部長、岡室長および私を含めて数人の所員は手分けをして30名の市会議員を歴訪して研究所の性格と立場を理解して貰うことに努力した。

6月初旬より中旬に亘って市当局と研究所との正式交渉の山場が来た。6月6日には先日私らが歴訪した市会議員中の19名が来所したので、各室長より研究内容を説明し、また所内各施設を案内して遺伝研の使命を認識して貰うことに努めた。次の6月7日には市の工場誘致委員9名と問題の日西化学の馬場社長が正式交渉に来所し、本館2階の会議室で、小熊所長、各室長、庶務部長が会談に参加して懇談が行われた。ここでは市の立場、研究所の立

場をそれぞれ忌憚なく話し合い、馬場社長より会社の内容について説明があり、研究所には害を与えない旨が力説された。この日は双方共なお研究するという事で会議を終った。

6月8日臨時室長会議を開き、前日の市の誘致委員との懇談の結果を検討し、今後の交渉方針について協議した。市側は財政上のプラスの面を重視し害を他に及ぼさないという会社側の説明をそのまま信用して会社誘致を主張している。しかしこの種の化学会社が付近に無害ということはありえない。本件に関する第Ⅰ回の室長会議での討論のときと同一理由により、いずれ研究所への致命的被害は避けられない。最後迄徹底的に反対すべきであると決議され、反対声明書が作られ公表された。

一方市側では6月11日午前、誘致委員会を招集して、研究所の反対声明書もとりあげられて協議されたが、この際速かに市議会に諮って工場誘致を採決すべしとの強硬意見が続出し、秋山要議員だけがこれに反対するに過ぎなかった。当日の情勢では若し採決に持ち込まれば、大体20：10の過半数で工場誘致は決定するとの情報が入り、事態は真に重大な局面を迎えるに至った。

そこで急遽対応策が懸命に練られ実行された。すなわち、(1)誘致委員および市会議員を訪問して、研究所の反対の立場の諒解をえることに松村部長と私らが奔走し、特に市議会でいよいよ本件が票決になる場合に備えて研究所に理解をもつと思われる議員に連絡をとって極力票決の引き伸ばしをお願いして時を稼ぐと共に、(2)文部省学術局長より県知事および市長宛に工場誘致は研究所の立場を考慮して慎重に処置され度き旨の公文書を急送して貰った。(3)石橋通産大臣より市長宛に同様趣旨の打電をして貰った。(4)数人の参議員議員、朝日前市長、小出教育委員長、久留島氏および米野氏らの反対運動の協力をえた。(5)篠達、盛永氏ら知名の遺伝学者や有力学会の工場誘致反対陳情書を入手し、さらに三島市の医師会および文化団体など有識者の反対陳情

書を作成し捺印をえて、これらを市当局に提出した。こうして6月11～12日は田中部長の陣頭指揮の下に早朝より夜遅くまで所員の必死の活躍が続けられた。この運動中、市の革新議員および中立議員の中には研究所をよく理解してくれる人があり、これらの人の協力をえたことは私共を大いに力づけ、また運動のやり方についても種々適切な指示をいただいたことに対して心より感謝した。

以上のような対策が奏効して事態は次第に好転してきた。そうして6月13日午前には誘致委員、市議会議長および同副議長ら11名が来所し、研究所と第2回の会談が行われた。この日研究所側は問題の工場が設置された場合、研究所の重要な研究に致命的な被害を受けることについて各室長が詳しく説明した。この後市側から『もし市が工場誘致計画を諦めるとした場合、研究所の方で速かに学校敷地を買収して学校移転に協力できないか』との提案がなされた。そこで田中部長は、(1)研究所に於ては現中学校の土地建物を文部省で買収し、学校の移転建設に努力すること、(2)もし工場が一方的に隣接地に誘致された場合、研究所は数年後に本館の本建築を機会に、他への移転を考えざるをえない立場に至るべきこと、等を婉曲に説明した。これによって市側の諸氏は大体研究所の立場を了解したようだった。

この日の午後、市では市議会全員協議会を開いて、誘致委員より午前中の会談の報告が行われて協議されたが、この会議では研究所の立場を理解して東中学校敷地に工場を誘致することに反対する議員の発言が続出し、僅かに1議員だけが本件を票決によるべきであるとの賛成的意見を述べるにとどまった。かくして結局本案は市議会の票決に持ち込まれずに終止府が打たれることになった。

2日後の6月15日、神奈川県山北区にある江戸川過酸化水素工場に吉田室長と私が出張して詳しい実状調査を行った。その結果は工場内の単位セット当りの石炭使用量は三島市役所より提示されたものより遥かに多いので、煙

突から出る亜硫酸瓦斯による被害も軽視できないし、また工場内よりいろいろの有害瓦斯類を発散するので、その被害を考えると到底研究所としては共存に耐えうるものではなかった。調査報告書のプリントを作り、6月22日の定例室長会議でくばり検討したが、今更ながら工場誘致を阻止しえたことを研究所の将来の発展のため全員で喜んだ。

早いものであれから既に24年の歳月が流れた。昭和48年末に東中学校は錦田中学校と改名して研究所の北方へ約100米離れた場所に移転した。この学校に通じる道幅9米の立派な舗装路が研究所の西側と北側のフェンス沿いに完成している。予想外に長年月かかり紆余曲折の経過を辿ったけれども、創立当時の小熊所長の構想通り東中学校敷地は漸く遺伝研構内に復帰し、地形上から見てもすっきりした状態となった。そうした中学校の校舎のあった所には昨年遺伝実験生物保存研究棟が建設されて、この中で研究が始まっている。さらに他の元校庭についても、遺伝学の急速な進歩に対応して着々とその活用の計画が練られているようである。私は静かになった嘗ての中学校跡を見るとき、研究所が必死となって市当局と戦ったあの化学工場転換騒動のことが時折思い出されるのである。

27. 国立遺伝学研究所の創立30周年を祝う

小西政三*

「国立遺伝学研究所」というと、すぐ連想されるのは、1964年を中心にしておきた石油化学コンビナートについての、遺伝学研究所の冷静な判断と深

*〒411 三島市大社町1-22, 三島民報社, 社長

い配慮である。

当時、私は木原均所長によくお目にかかったが、所長はコンビナート問題について深い憂慮を示し、貴重な助言をいただいたことが忘れられない。

三島・沼津地区に計画された富士石油、住友化学、東京電力を中心とした石油化学コンビナート計画は、1,200億円の巨費を投じて、この地区に四日市の第一・第二コンビナートを併せたものより大規模な石油化学コンビナートを建設しようとしたものだったが、地域住民の血と涙と汗を結集させた努力と「科学者の良心」当時の首長らの決断などが結び合って、これを阻止したのである。

それから3年経った1967年1月、私は「実業の日本社」から、遺伝学研究所の「松村調査団」のことなどについての原稿を依頼された。

この求めに応じて書いた次の一文「公害問題と科学者」が、1967年4月1日の「実業の日本」随筆欄に掲載された。

公害問題の解決は、いまや日本の企業としても住民にとっても、最大の関心事となってきたが、2月21日朝のNHKテレビは、またも石油化学コンビナートの公害に苦悩する四日市を登場させた。その中で、同市の職員は、「四日市の公害病患者は344名で、内乳幼児が4分の1、患者は老幼児に多い」と説明し、一婦人は、幼児が顔を真赤にしてせき込む有様を見ると、「罪もないこの子が、なんでこんなに苦しまなければならないのか、と怒りがこみあげる。」と訴えた。

この声について、かって四日市の公害調査を行い、三島・沼津の公害事前調査には、通産省から派遣された「黒川調査団」の一人である和達清夫氏は「本当に胸が痛む。」とはいったものの、四日市の悲惨な現状に対しては、適切な対策を語ることはできなかった。

このとき私は、2月20日の朝日新聞「公害」にのった、元四日市市長の吉田さんが、「この公害は全部私の責任です。まさか、こんなにひどいことに

なるとは夢にも思いませんでした。」と語った言葉をかみしめた。

三島・沼津地区から石油コンビナートが締め出されてから三年たったが、三島市民は「コンビナートが来なくてよかった。」と話し合い、あの激しかった住民の反対運動を、いまもよく想起する。その反対運動の中で、大きな役割を果たしたのは、長谷川三島市長が委嘱した、三島市独自の『松村調査団』であった。

同調査団は、三島市谷田にある国立遺伝学研究所の変異遺伝部長松村清二博士を団長に、人類遺伝部長松永英博士を副団長とし、地元工業高校の教諭を含め6名で構成された。

「松村調査団」は1964年（昭和39年）3月から三島・沼津地区に計画された石油化学コンビナートの公害予想を調査し、同年5月15日、その中間報告を発表した。この報告によると、「企業3社からの亜硫酸ガスを合計すると、毎日300～400トンとなり、その他の有毒ガスとススが相当量にある。これは四日市より上回っている。」とあった。

私たち市民有志は、この年の3月までに、各地の石油コンビナートを視察し、私自身も、三重県四日市、岡山県水島、和歌山県下津、千葉県五井などを調査したが、それらの視察報告記が「松村調査団」によって、学問的にも実証されたので、「我が意を得たり」の感を深くした。三島市では、自治会連合会がその3月行った全市民対象の世論調査の結果、コンビナート賛成1%、反対92%の意志を明らかにしていた後であるだけに、この「松村調査団」の報告は市民に新しい自信と勇気を与えた。

このように「松村調査団」は、大きな成果を収め、全国からも大きく注目されたが、それだけに同調査団に対する風当たりも強かった。文部省から松村博士らになんらかの動きがあったことも、私は同博士から聞いたことがある。しかし、松村博士らは、それにひるまなかつた。『科学者の良心』を守り抜いたのである。

あれから3年——。三島市は、石油コンビナートを退けたあと、それから27年後（1994年）までの総合開発計画をたて、市民委員会をつくり、「緑と水と太陽の都市」を目指した街づくりをすすめている。

そうしたとき、松村博士は、若いころ研究室で受けた放射線による白血病で殉職した。その葬儀は、2月25日、国立遺伝学研究所で静かに行われた。研究所は箱根の山すそにあり、葬儀式場は見晴らしのよいその一隅におかれた。

そこから西南をながめると、かつて石油精製工場の建設が計画された中郷・清水地区の平和な美田が眼前にあり、美しい早春の色をみせていた。

その背後には、140万キロワットの大火力発電所が建てられようとした沼津市牛臥海岸の方も遠望される。この日、葬儀参列者のだれもが、それらの景色をじっと見つめている姿がたいへん印象的だった。

28. 思い出の記

長谷川 泰 三*

市長在任時、三島市の誇りは何ですか——と、よく聞かれたものです。富士の白雪がとけて流れる清流——と言いたいのですが、その水は、用水型企业の進出で、昔の面影はすっかりなくなってしまったことから、私はいつも「ゆたかな緑と、わが国に一つしかない国立遺伝学研究所＝以下（遺伝研）という＝があることです」と答えたものです。

その遺伝研と私との出会いは、昭和26年にさかのぼります。

*〒411 三島市小山押切1267-2；前三島市長

箱根山麓の台地、旧中島飛行機工場跡に開設されて間もない遺伝研から、三島大社前の長谷川家具店へ机とイスが注文されてきました。何を隠しましょう—長谷川家具店へ婿入りして日浅かった私は、この注文に大張り切りでねじり鉢巻きも勇ましく、大八車に荷物を積めるだけ積み重ねて、車輪の音をガラガラ響かせながら、進んで行きました。雪沢橋を越えてからが大変でした。いまはサクラの名所となっている坂道ですが、当時は舗装などまったくされていない凸凹道で、しかも急勾配でありましたから、たまりません。途中で荷が崩れてしまったときなど、もうへたり込んでしまい、大声をあげて泣きたいほどでありました。しかし、軍隊で鍛えられた身体にむち打ち、何とか遺伝研の玄関にたどり着いたときには、思わず涙がほ、を伝わっていました。

「やぁご苦労さん、君ひとりでか、そりゃたいへんだった」と、ねぎらいのことばをかけてくれたのは、あとで知ったことですが、初代所長の小熊博士でありました。

その後もしばしば注文をいただき、出入りしておりますうちに、まったく知らなかった遺伝研が、どういう機関であるかを知るにつけ、またそこにおられる先生がたが、どういう人であるかを知るにつけ、恐れおののいたのでありますが、先生がたは「家具屋さん」と呼び、親しくつき合ってくれました。

昭和30年と、続く34年に私が市議会議員選挙に立候補した際は、2代所長の木原博士をはじめ諸先生がたや所員の皆さんが、「公務員であるから、運動はできないけれども……」と言いながら、心からのご支援をくださいました。市議会議員になって間もなく、遺伝研近くの一帯に、日西化学工業という会社が立地しようとしたことがあります。遺伝研の先生がたは、「学術研究の妨げになる。それより何より、公害の発生で住民の生活環境が汚染される」として、猛烈な反対運動を展開しました。私は、このとき初めて『公害』とい

う言葉を知ったのですが、人体や生活が侵されてはたいへん……と、政治的立場から市議会において、まっ向から反対論を唱え、多くの人たちの共鳴を得る中で、化学工場の進出を阻止したのであります。このときの公害反対運動が、後述する石油化学コンビナート進出阻止闘争に結びつくことは、夢にも思いませんでした。

原稿用紙にペンを走らせているきょうは、3月の中ばです。ことしの冬はことのほか暖かく、桜前線の訪ずれば、例年より1週間ぐらい早いだろうと伝えられています。私が「家具屋さん」として登った坂道の両側には、ヨシノザクラの大樹が百有余本もあります。そのたわわな枝には、もう張り切れんばかりのつぼみが、春の喜びをうたい上げていることと思いますが、このサクラこそ、「朝顔博士」として著名であった故竹中要博士が手塩にかけ慈しみ、育てられたものです。毎年、4月の第1日曜日には、地元桜ヶ丘町内会の肝入りで「桜まつり」がいともにぎやかにそして花やかに繰り広げられています。当日は、かつての田舎道が車の洪水で動きがとれなくなり、坂道は押すな押すなの人出で、下ることさえままならないほどの盛況さで、完全に三島の桜の名所になりました。吹雪く桜の中に竹中博士の浅黒い温顔が浮かび、感謝の念に耐えません。

昭和36年、私は36歳でありました。私は「若いし、その器ではない」と固辞したのですが、周囲の強い勧めに逃がれる術を失い、市長選挙に立候補致しました。市議選同様、遺伝研の皆さんの暖かいご応援をいただきながら、第7代三島市長に就任することができました。休日も夜もなく無我夢中で市政に取り組んでいるうちに、早くも3年目を迎えた昭和38年、降ってわいたかのように、あの「石油化学コンビナート進出計画」が、県から持ち出されてきました。ときあたかも、NHKテレビが四日市における石油公害をキャンペーンしていたことなどもあって、この問題に対する市民の関心は濃く、鋭いものがありました。県は、産業を興すことによって地域開発と住民福祉

をとえ、これを是とする一部勢力と結びつき、計画の推進を迫ってきました。市民の各層からなる反対運動は、日ごとにふくらんでいき、先鋭化してまいりました。何とか市民を説得しようとした県並びに企業側は、国に依頼して、公害問題の権威者といわれる黒川真武工学博士を団長とする沼津三島地区産業公害特別調査団を組織しました。

私は、国や県を信用しないわけではありませんが、私が市議会議員当時、日西化学工業進出反対運動で公害に対するある程度の知識を得ていたことから、このような大きな問題を一方的に委ねることに危惧を抱いたのであります。そこで私は、遺伝研に木原所長を訪ねご相談申し上げました。木原所長は「遺伝研は、国の機関であるから、なかなかむずかしい問題だが、三島市独自の公害調査団をつくられたらどうか。議員当時のあなたにお世話になったこともあるし、また私たちは学者として、公害問題を無視することはできませんので、できるだけのご協力は致しましょう」と約束してくれました。その中から、松村清二博士並びに松永英博士が市民の立場から公害調査をしてくれることとなり、松村調査団が結成されたのであります。

同調査団は、短期間にもかかわらず、黒川調査団の「適当な措置を講ずれば、公害のおそれなし」とする調査結果を、一つ一つ取り上げ、理論的にも学問的にも「公害のおそれあり」との結論をまとめられ、私に報告をしてくれました。

政治は理論であります。私は、この松村調査団の報告をバックボーンに、多くの市民の血のにじむような阻止闘争に支えられつつ、昭和39年5月23日、熱気あふれる市公会堂で、石油化学コンビナート進出を阻止する決意を表明し、翌日、県へ出向き県知事にその旨を伝えたのであります。

半年間というものを、くわを持つことすらも忘れて、子々孫々のために闘い抜いた農民の背中には、安どの表情が深い、その肩にはあすからはくわを振るおうという力がこもっていくかのようなようでした。

このコンビナート阻止闘争は、全国から大きな注目をあび、学者の多くが住民運動の成果と高く評価をし、やがて国会は『公害基本法』を制定するところとなりましたが、木原所長のご理解と松村、松永両博士のご尽力を忘れることはできません。

昭和40年4月20日、天皇皇后両陛下は遺伝学研究所へ行幸啓遊ばれました。突然変異と放射線の影響などについてご進講申し上げられた松村博士、そして、八重桜が爛漫と咲き匂う構内で桜の由来などについてお話し上げられた竹中要博士の、お元気だったお姿が今私のまぶたに浮かんでまいります。

私は、昭和52年2月6日をもって、4期16年に及ぶ三島市長の職を去りましたが、この間、前記のかたがたをはじめ、3代所長の森脇博士、続く現在の所長田島博士にも、市政伸長のために何かとお力添えをいただきました。退任間際の昭和49年には、東中学校との土地交換問題が起きましたが、田島所長の並々ならないお骨折りで、円満裡に解決をみたことは、私の有終の美を飾らせてくれたものであり、感謝致しております。

忘れてならない人がいます。文化勲章に輝いた木村資生博士です。博士は受章祝賀会のあいさつの中で「ずけずけものを言う性格ですから、長谷川市長の所へも随分文句を言いに行ったものです。とくに、市の放送には参りまして、何回も苦情に行きましたが、とうとう長谷川さんは改善してくれませんでした。私の家の家具はすべて長谷川家具屋さんから買ったものですから、私の言うことを聞いてくれてよかったのですが……」と申され、会場が爆笑の渦に包まれる中で、私は大いにあわてましたが、木村先生には公私両面でたいへんお世話になりました。

ここ2・3日ぐずついた天候が続いておりましたが、きょうはすっかり晴れ上がり、青空が果てしなく続いています。銀色に輝く富士山も雄大な裾を広げ、箱根山系の峯々も柔らかい日ざしに映え、緑濃い樹林帯が手の届きそ

うな近さに見えます。もし、あの時、石油化学コンビナートを許していたならば、あの青い空、このゆたかな緑を目のあたりにすることができたでありましょうか。

多くの皆さんに感謝しつつ、三島市の誇りである遺伝学研究所が学術研究の府として、ますます栄え、私たち人類発展のために貢献されますことを心から祈念し、30年の喜びと致します。

三島市 市長 田中 邦子

1997年10月10日

（以下は非常に薄い文字で印刷された、ほとんど読み取れない文章が続きます。これは、田中市長の挨拶文の本文と推定されます。）

V. 心に残る思い出

29. 思い浮ぶことなど

松村美興子*

その頃、東海道線の特急「つばめ」の停車駅は沼津であった。1951年4月、その沼津駅に降り立った私達親子は、黒塗りの大きなパッカードに迎えられ三島へ向った。西部劇の町のような白いペンキ塗りのアーケードは珍しく、広小路の小さな映画館にトイレの臭いを感じ、三嶋大社の大鳥居に古い東海道を想い浮かべながら、建ち上ったばかりの官舎に着いた。官舎は同じ棟が東西に二軒並び、その西側には既に酒井先生一家が移り住んでおられた。

その頃の官舎周辺には、まだ緒明邸の跡が歴然として残っていた。と言うより、むしろその中に建てられていたと言う方が当たっている。官舎の南側には大きな山が有って、深々とした緑におおわれていた。山に登る道は、びっしりと熊笹の生い繁った山裾を廻りながら頂きの広大な邸跡の空地に至っていて、楠の大木が亭々と並びたち、深い古井戸は子どもたちの近寄る事を禁じはしたものの、折ふし親達に不安を感じさせたものである。座敷の縁からは、姿の良い松林の梢に月の渡りが見えた。風の日には松風の音も聞えたりして私達はこの山をシンフォニーの森と名づけていた。また、山には雉、郭公、啄木鳥などがいて、酒井さんの小さかった路子ちゃんが「ペロペー、ペロペー」と鳴き声をまねる鳥¹⁾がいて、名は忘すれたけれど、親鳥が小さな

* 24 Rue Coriolis, Paris-12; 前妻異遺伝部長松村清二氏夫人

1) こじゆけい、うざら科、チョットコイチョットコイと鳴くので一般に知られている。

雛を一行に従えて道を横切るのに出会ったりした。夜は梟が鳴き、その山裾の道は日暮れとともに子ども達に恐れられたものだった。

すぐ北側には、特にあやめを愛でるために建てられたという腰高縁の立派な客殿があり、木の節穴が星の敷程ある官舎住いの私など、荒れ果てたとは云え、その広さと木組の立派さに瞳れてその廻りをぐるぐる廻り、縁側の破れガラスに額を押つけて、よく中を覗いたものである。中には撞球台が置かれていたりして優雅なその昔の生活がしのぼれた。

その他はぐると田園に囲まれていて、その中には研究所の圃場もあり、白い実験着の人達の姿がよく見られた。田植の済んだあと、五月の風に早苗がさらさらと靡き、すずろかな田の面に映る月を眺めながら散歩するのは心持良かった。だが夜通し鳴く蛙の声にはずい分悩まされたものである。また夏の日暮れには無数の蝙蝠が、小さく鋭い声で鳴きながら暮れなずむ空に飛び交うのが見られた。

やがて、客殿は取り壊され、その跡に専売公社の社宅が建ち、山裾には農協の種牛用の大きな牛舎が建てられて、恐し気な雄牛が二頭飼われるようになり、外の柵に繋がれている時など横を通り抜けるのがこわかったし、また実際死亡事故等も一度ではなかったらしい。中年の気の良い夫婦者が世話をしていて、雄羊を一頭飼っていた。私はその小母さんに頼んで雌羊を一頭買って貰い、暗くなって帰宅した主人が自転車を入れようとして小屋の戸を開けた途端「めーえ」と鳴かれてびっくり仰天したなどと云う笑い話も残っている。私はその羊を連れて、御近所の迷惑も考えず（本当は大変恐縮していたのです…）羊飼いにでもなった積りでいたようだ。やがて私の雌羊は主人の背広や、幾ポンドかの毛糸を私達に残したあと、生れたばかりの可愛い子羊と一緒に修善寺の方に買われて行った。

農協が緒明さんより買っていたその山を手離し県の分譲住宅が建つことになって、牛小舎が取り除かれ、幾抱えもある楠が次々と切倒されて行った

時の無念さは、その木屑から立昇る香おりとともに未だに忘すられない。あれは身を切られるような辛さであった。我が身から血の滴のようにさえ感じられた位であった。びっしり生い繁り、月夜の晩には殊のほかつやつやと光る大きな熊笹の葉はえぐり取られ、もう見ることも出来なくなり、山の切り崩しが始まってからは、官舎はまともにその被害を受け、風の日は勿論のこと、毎日々々きな粉の様な土埃が家の中に立ちこめて困った事だった。その頃は駒井先生の官舎が山裾に近く建てられていて、先生の御宅なぞはブルトナーの騒音が終日、まともに家の中まで入りこみ、全く御気の毒であった。

残された自然は、もうたった一本の銀杏の木だけになり、それでも私はその大銀杏に日毎慰められ、力づけられて来たように思う。

秋の日に小鳥のように舞い落ちる金色の葉、そして路をあるく時カサコソと足の下で音をたて、北風にくるくると吹きとばされる色あせた葉、やがて木枯しの吹きすさぶ冬が訪れる。そしてそんな夕暮れ、深い藍色の空に輝く金星を黒々とした美事なシルエットの右肩にのせて立っているのを見るのが好きであった。

或る日、ふと表の騒しさに縁に立つと数人の男達が、がやがやと集り銀杏の枝を払っているのが見えた。それはこの銀杏を切り倒しに来た農協の男達であった。私は背すじから怒りがこみあげて来た。駒井先生の奥様も出てこられ、私達二人で見栄も外聞もなく、大声で怒鳴りたてたものである。「ここは研究所の官舎内だ、何の権利があって勝手に切り倒すのか云々…」とかであった。男達は私達の剣幕に恐れをなして引きあげて行った。然しすでに右側下の大枝が一本切り払われてしまった大銀杏は、その美しいシンメトリーを失って無様な姿に変わり果て、私はそれを見るたび胸が痛く、心の中にひそひそと涙を流したものであった。

もうその頃には、その昔玉沢ゆきのバスが三本しか通らなかった谷田にも

市内循環バスが通り始め今はそれもかなりひんぱんになり、つまり住宅がふえて来て昔の面影は次第に消え失せ、平凡な地方都市の新開地へと変わっていった。今回二年ぶりに来てみると一層住宅もふえ、大きな駐車場付のスーパーが出来、懐しい官舎前に辛じて残されていた田圃にも鉄筋のアパートが建てられていたし、小さな貸本屋しかなかったこの谷田にも立派な本屋があらゆる新刊書を揃えていて、この地区の発展が、ここに住む人達の要求をこの地区だけで満たすだけの力をつけて来ているのを知らされた。

箱根山の美しい山並、天気の良い日は薄紫にかすみ、暗夜に消えた稜線にポツンと灯る火が、そこかと見る間にすーっと降りてくる。

その国道一号線。朝の見覚めにふと耳に入るトラックのタイヤチェーンのチャラチャラと鳴る音に、箱根に雪の来たことを知らされる。あの季節感を私は懐しく想い出す。が、この静かな東の眺めに日通ランドの灯がきらめいた時は実に情無く腹立たしかった。箱根を守る会がどうやらそれ以上の開発を阻止しているのは何よりの事と思う。

こういう移り変わりの中でふと思い出した事がある。それは中島飛行機の工場跡を使っていた東中学が新築されて移転し、その跡が研究所用地に加えられたと聞いた時である。あれは30年頃であったか、市議会で日西化学の誘致が決ったと聞かされた夜、市会議員の自宅を二軒、三軒と走り廻って実情を聞き、研究所の為に許せないと思い主人に話し、主人も急ぎょ先生方に連絡し、どういいういきさつかは忘すれたが来ない事になったのだが、これについては後々までP・T・Aの会合などで、地区の発展が阻害されたと農民の誰れ彼れから恨み言を聞かされたものである。今、この谷田もこんなに賑かで平和だし、箱根山も煙突の煙や悪臭に汚されずに済み、研究所も日々発展し立派な成果をあげておられる。そしてここに三十周年を迎えられると伺い、それは我が半生に当る歳月なのだと思います。気がついて見れば私にとって三島という町は遺伝学研究所とのかかわり合いの中で故郷のように定着してい

る。

日本国土が荒廃に向っている中で、コンビナート反対の運動も松村調査団と市民達の協力で中止させることも出来たのだったが、今研究所から眺める壮大な富士の裾野に、おろかにもサファリとやらが計画されていると聞く。自然に住む動物達を追い払う環境を作る同じ人達が、遠い熱帯から異国の動物を連れて来て住まわせると言う。そして今サファリ反対運動が始められていると聞く。どうかぜひ皆さんで力を合せて成功して頂きたいと思う。遠くパリなぞと言う異国の街に住んでいるのは何故かと自分でも思うのだが、そして「成功して頂きたい」なぞと白々しく言える自分自身に聊かの自己嫌悪を持ってしまうのだけれど。(1979年2月)

30. 創立時代の研究所と私

宮内千枝*

私は昭和26年4月5日、常勤作業員として遺伝研に採用され、構内宿舎に住まいも決まり、かつて父の農業を手伝っていた人に牛車を引いてもらい、下田街道をトコトコと遺伝研さして歩いて行った日の事を昨日の事のように思い出します。谷田入口を東にまがり、農業会の前を通り坂下にかかり、ほそい上り坂をトコトコ歩きながらはるかに来たと思ひ、お墓を右手に見た時には背中に冷や汗が流れておりました。

遺伝研の門を入り西にまがって新しく建てられた独身寮に荷物をおろした時、さすがに明日からの作業員としての仕事の見当もつかず、新しい家の冷

* 〒411 静岡県駿東郡清水町玉川264-3; 前遺伝研用務員

たさを身にしみておぼえたのもこの時でした。お部屋の真ん中に座布団を敷き、壁にさわらないようにして座った時に、自分の労力によって自分の胃袋を満たす事がいかに大変な事かと身の引き締まる思いがいたしました。次の日に、寮を建てた清水組の仕上げの方が、廊下の菰と紙をはがしに来られました。この方のお口から私の子供と同じ学校のお子さんをお持ちと聞き、緊張してコチコチになっていた体もほぐれ、さあ始まり始まりと自分に号令をかけながら廊下をみがき、それぞれのお部屋に入られる方々をお待ちいたしました。

遺伝研はかつての中島飛行機工場の跡が使われ、玄関前のソテツとシュロは心を和ませてくれました。

七輪に薪をくべ、その上にやかんをのせてお湯を沸かし、リング箱や新聞紙で御飯を炊きました。雨の日には、道が駒下駄がもぐってしまうほど泥沼となってしまう、丁度おしるこを一面に流したようになる。この道をすべらないように、また持った配給の食パンを落とさないようにと気をくばり、時間を気にしながら、かさをさし、自分の背中にポツポツと雨を受けながら、坂道をせっせと帰って来たものでした。

明日の朝食のための食パンを田町駅前まで買いに行き、二日町まで来ると顔にあたる空気ではここはどのあたりと感じ、谷田入口を曲がると又空気で場所を感じ、坂道にかかると星空をながめながらだんだん星の中に入って行くような気がいたしました。

道の両側に家はなく、月の光、星の光以外は手に持った小さな懐中電燈だけ、こんな時、街燈がつけられ、本当にうれしいと思いました。

ただ物が不自由な時だったからなのでしょう、誰ともわからない人に電球が持ち去られたり、又子供さんたちの石投げの的にされた電球が粉々に砕け散っているのを見た時は、涙の出る程やるせない気持ちにさせられたものです。

断水が時々あって、お寺さんに水を頂きに行きました。お寺さんの方々は実に御親切な方で、夕方の水仕事を中止されて気持ちよくポンプの柄を渡して下さいました。両手にやかんと蒸し器をさげて墓地への坂を降り、お庫裏の前の井戸でやかん等に一杯水をいただいても、帰り着いた時には八分目位になっておりました。こんな事も、今は懐かしい思い出のひとつです。水道管が太いのには替えられ、ガスもひかれて毎日の仕事が楽になりました。

何年前だったでしょうか。竹中博士が桜をお植えになりました。「先生、私がお花が見せて頂けませんか。」といいますと、「桜の育ちは速いから見られるよ。」とおっしゃって下さいました。木の育ちがどの位のものか、それまで気にとめた事ありませんでしたが、一、二輪の花を初めて見た時には、命の強さをしみじみ感じたものでした。

今では桜の名所となり、町から村からお花見の方々が来られるようになりました。

研究所の圃場も段々整えられ、第一、第二というように区分され、それぞれの方によって管理され、研究所も中島飛行機工場の時の建物が取り除かれ、北大から土川先生が持って来られたネズミのための第一ネズミが建てられ、本館も一期、二期、三期とつぎつぎに新しい建物に替えられてゆきました。

天皇陛下の御成がある毎に道も整えられ、十年一昔とか申しますが、26年から52年4月1日まで、4代の所長にお仕えし、遺伝研が三島にあったればこそ、今日の私があると感謝しております。

遺伝研でお目にかかった外国の方々、又遺伝研から大学、研究所とそれぞれのところに御立派になって巣立って行かれた方、その御研究が進まれますように、御健康でありますようにと朝ごとに祈り、今年も、又来年も桜の花を見せて頂きたいと健康管理に努めております。

31. 徒然の記

門脇淳三*

現地着任

昭和24年6月以降創設準備のための事務を、竹中・小熊両先生をまじえて執務してきた文部省の仮事務室を10月一杯で閉じる。11月1日私は、塚本事務部長・宮沢会計課長に随伴し秋山さん運転になる幌付パッカートで三島入りをする。途中今考えると塔の沢? 辺りで、エンジン過熱で「小休止」とは聞こえがよいが貰い水にアタフタし、薄暮も深く、心細い気分になる。疲れも手伝い箱根路は、口数も少なくとも暗闇の中をつっ走る。山中辺りで一望に見渡せる三島・沼津の灯に接したときの安堵さと、三島でのこれからの生活に……一人感慨に暫し時を忘れる。予定より2時間遅れで玄関前に。

そこでは富士産業時代の守衛所から灯りを取り、松原・大山・小野・西川・栗原・土屋・松本の紳士淑女が勢揃い。市内とは言いながら山の中の一軒家で、銀シャリに沢庵漬で「御苦労さん」「おつかれさま」と迎えてくれた。

次の日から市の給水工事の遅れのため一日2回の長泉寺からの貰い水の日課が続く。そして来る日も来る日も木造2階建本館に事務室・会議室・所長室設営のための清掃に明け暮れた。当時の状景は今でも忘れ得ぬ思い出の一つである。

会計検査のこと

昭和25年4月、創設後初めての会計検査を受けることになった。宮沢課長を除いて、あとは意気だけは高いが素人に近い集団。帳簿一つを纏めるにも、そして物品請求伝票・旅行命令簿等の整理など、記入の仕方・点検の仕方一

* 〒680 鳥取市湖山町1-1, 鳥取大学経理部主計課長; 元会計課用度係長

一つ一つ講習を受けてからという始末。人員が少く庶務・会計もなく全員が缶詰状態で頑張ること一ヶ月余り。何とか整理をつけて検査調書作り、これもガリ版書き印刷と、守衛さん用務員さんまでの総がかりであった。そうした努力にもかかわらず調書は、とうとう受検開始時間に間に合わず2時間程検査開始を猶予願うなど、今では信じられないことばかりであった。

「受検開始を待つという事故は前代未聞、今後は絶対に認められないこと。」
「努力は多とするが会計法規の研修に一段と励むこと。」と云う講評を受けて、第一回検査はとにかく終ることが出来た。

これも、名前は失念してしまったが検査官の御厚情と、また文部省からわざわざ立会においでいただいた今は亡き鶴田酒造雄さん他の方々の御力添と、ただただ感謝申上げるばかりであった。

つれづれのこと

(1) 「遺伝研ですが、〇〇を買いたいのですが」「伊伝さん、油屋の伊伝さんですね、エ//谷田にあるんですか。大社前じゃないんですか、配達は出来ませんね、現金売りでなければね。」

と云った具合。三島の人にイデンケンがどうひびいたのか。

(2) 「〇〇君給料はね、一人一人に届けるのがあたりまえでしょう。」「給与というのは、本人が受取り現金を確認するのがあたり前ですよ。圃場に、実験室に、どこに居るのかわからない皆さんをいちいち探し歩くことなんか不可能ですよ。私達事務のことも考えてもらわなければね、そんなこと出来ませんね。」

今はどうなっているのかしら。

(3) 「〇〇さん、午後は城之内宿舎の竹垣修理に行くから用意して下さいね。」「掛矢、スコップ、竹、シュロ縄忘れものはないですね。」「準備OK。出かけましょう。」

半日がかりの臨時営繕工事。

「金（予算）があれば、こんな事までしなくてもね。」「まあまあ苦情は言わない。頑張りましょうぜ。」

研究所のためなら、エーンヤコラ。

十年一昔と言いますが、30年の思い出をとという御案内に感無量のものがあります。創設当時の諸先生方、事務部の人達も随分と移り変わり、また研究所も益々の充実を。

当時畑に陰が出来るからと反対のあった桜も竹中先生の熱意で、今では壮年、名物の一つとか聞いております。

50年の才月が流れた時、どのようになっているのでしょうか。楽しみでもあり、私も目にすることが出来るのかどうか不安でもあり、と言ったところで

研究所の一層の向上を祈念してやみません。

32. 10年間の思い出

杉 生 純 義*

国立遺伝学研究所が創設されてから30年を迎え今更ながら懐しい思い出はつきないものがあります。

そもそもこの研究所が昭和24年6月1日に開設されたがその当時は旧中島飛行機製作所三島工場の建物の一部で戦時中のバラック建の古ぼけたもので

* 〒824 行橋市高瀬265； 元庶務課長

した。床は古ぼけ、ほこりまみれで、窓ガラスは戦争の名残りもいたいたしく、防空よけの紙が張りめぐらされ、当時の職員は毎日清掃の明け暮れであり、研究員は余りにも貧弱な研究施設に驚き、また実験のため顕微鏡を見るにもがたびしの床のため苦勞された日が幾日かつづきました。

しかるに小熊・木原・森脇・田島各歴代所長を始め研究員ならび事務関係者のあらゆる困難を克服し、並々ならぬ努力により、立派な施設は勿論、建物も遂次近代化した建物に変わり、今は昔の思影は見ることが出来ない程整備され、研究業績も国内・国外に数多く発表され、世界的研究所として発展し今日に至りました。

私が昭和24年11月、この研究所に就任してから懐しい思い出となることは数々ありますがその一部を記憶をたどりながら思い出すままペンをとりました。

着任早々から小数の人員で事務の合い間を見て、明けても暮れても事務所の清掃と窓硝子に張られた紙をはぐのと、給湯用と実験用の水を研究所から100米も離れた坂下のお寺迄バケツをさげて水汲みに行くことであつた。その頃の所員の苦勞は現在では考えられないことと思います。その後三島市の協力により水道施設が整備されるとともに研究所内の整備も遂次改善され落着いて仕事につくことが出来るようになり、ほっとしました。

研究所が整備されるとともに研究所を見学に来る人々が日を追って多くなり、庶務課の職員は来る日も来る日も交代で見学者の案内に追い廻される日がつづきました。見学者が100名以上になった時は見学コースの内容を映画におさめ講堂で映写し説明を行うこともあり、その応待には苦勞したものでした。その後は見学日を定めてその調整を図るようになりました。

この10年位の間は思い出となる種々の行事がありました。その中で特に思い出となるのは昭和28年11月7・8日、第25回日本遺伝学会が研究所で開催され日本各地から研究者が集り、一般講演や受賞式があつた。当時は三島市

挙げての歓迎ぶりです。市内には歓迎の万国旗が張りめぐらされ、楽寿園で市当局の歓迎をかねた盛大な懇親会が催され、農兵おどりが発表されるなど有意義に終了した。

昭和29年6月1日は創立5周年記念式典でありこの日は文部大臣（代理）を始め政界・財界の有志を始め遺伝学研究所創設関係者多数の出席をおおぎ盛大に行なわれた。ついで昭和29年10月18日F. A. O国際米穀委員会会員、アジア・ヨーロッパ地区の研究、技術者100名余が来所し研究所内は国際色豊かなふん囲気をただよわせた。この時昼食を出すのに肉食をきらうアジア地区の研究者のため如何するかと関係では種々検討した結果、肉を使用しない野菜を主としたサンドウィッチを出すことにして沼津市の桃中軒というレストランに特別注文する等、接待に苦勞しました。

昭和30年4月13日、皇太子殿下が御学友と一諸に非公式的に御見学に来られたことでした。

ついで昭和31年9月11日、国際遺伝学シンポジウムが京都と三島で開催され世界各国の研究者100数名が参加し、研究発表やあきがお展示品の発表が行われた。

昭和34年6月1日、創立10周年記念式典が文部大臣（代理）の臨席を得て、その各界代表及び国内関係研究者多数の出席を得て盛大に行われた。このような数々の思い出深い行事がありましたが、その中で特に忘れ得ないことは研究所一同がかねてから念願していた天皇陛下が生物学研究のため伊豆地方御巡幸の初日、昭和29年11月4日を研究所御視察に当てられ午前11時御到着後、夕刻まで御滞在という殆んど前例のないことで、長時間の御視察の時間割をどのように作成したらよいか大きな問題であった。

研究所では御巡幸のことが静岡県知事から伝達されてから以後は静岡県と宮内庁と度々連絡をとり、御巡幸の内容についてどのような方法で行うか、展示品はどのようにするか、見学コースをどのような方法で行うか、警備に

ついてどのようにするか、新聞社の報導員の取扱いをどうするかについて、部長会議を10数回開いて成案を作り、県と打合せを行うと共に宮内庁から曾我部行幸主務官一行の実地検分が行なわれた。これで大体の方針が決定したので小熊所長は時計を首にかけ御巡幸コースの時間がどの位かかるか、また御巡幸コースの予定時間に合わせるため研究所内のコースを幾度も実際にみずから歩いて見られるほど苦勞されたものでした。

陛下の御巡幸も非公式であるということで所内の手入れも最少限に止め、装飾的なことや大げさなことは一切省略してお迎えすることになった。当日は全職員は平服で玄関前広場に整列してお迎えした。御到着後しばらく御休憩のあと研究施設を御見学になりました。

陛下には生物学に対する御造詣の深いことは周知のことであるが遺伝学方面について素人でないことがご質問の端々によく窺われ、所内のあらゆる事物に深い興味をお持ちになったこと明らかで陛下の御質問の中で『性は遺伝によって決定されるが、今では薬品等によって変えられるというのがその変化は一代限りか』また『メダカの雄に女性ホルモンを与えれば雌になるというが』等如何に陛下が遺伝学について御造詣の深いのに説明者も驚いたと語っておられた。

陛下は所内見学に段々と打解けられたので、小熊所長も軽い気持ちになりネズミ飼育室の御視察のとき「ここはネズミ御殿です」などユーモラスの御説明申し上げると陛下も声をあげてお笑いになるという和やかさであった。鶏舎での説明の際は「ここは雄鶏の独身者ばかりですね」と説明者を笑わせ、「メンデルの法則通りにいきますか」など御質問されるなど打解けた逸話もありました。

陛下には所内施設御見学後別室で研究員の研究業績について親しく研究員の御説明を受けられた。引き続き未公開の学術映画『細胞分列の生態観察』を15分間にわたり天覧に供し、16時30分御還幸の御車を御送りするまで、前

後5時間の長きにわたって研究施設の御視察のみならず親しく所員と御研究を共にされたことは全く異例に属することであった。

陛下が御巡幸を終え研究所を御出発の際は車が動き出してからも後方の窓から振り返ってお名残り惜しげに幾度も御会釈になった。あの親しみ深い御表情は所員一同の終生忘れることの出来ない感激であると共に意義深いこの一日の行事を無事に終了することが出来所長を始め全職員は安どの胸なでおろしほっとした気分になりました。

過去10年の過ぎし日々を振り返り今更ながら遺伝研時代の思い出を記憶をたどりながらつたないペンをとりました。

33. 三等運転部長の思い出

丸 岡 秀 雄*

人生と言う人の世の旅路に縁あって遺伝研に昭和26年2月1日から22年間務めさせて戴きました。其の間いろいろの事がありました。私が入所当時の車は宮内庁払下げの1937年式幌型パッカードとトヨベツト1屯積のトラックでした。本館は中島飛行機の事務所だった木造二階建で裏にはまだ工場の建物が残って居りました。研究所の庁舎は本館の二階建だけ、其の他は車庫と宿舎だけでした。通勤道路はまだ桜も植って居らず補装もされて居りませんでした。パッカードは直列8気筒エンジンでマニホールドは黒光り、力は有り、間違ってトップギヤーに入れてもノックもせずスムーズに発進し驚く事が度々有りました。トップギヤーでスローにすれば歩いている人と話しながら走

* 〒411 三島市谷田雪沢173-80; 元会計課技官

ってもけっしてノックしませんでした。此の位力のある車でも自然には勝てず2月の霜どけ頃は五万坂でスリップし、今少しで坂を上り切る一步手前でどうしても上れず、所長小熊先生を歩かせた事もたびたびでした。

トラックでの最初の仕事はネズミの運搬でした。土川教官が北大からマウスやラットと一緒に貨車で生活し三島駅に到着、其の出迎でした。北海道から三島までネズミの世話をしながらの長旅、普通の人ではとても出来ぬ事と感心するやらあきれのやら貨車の扉をあけるとあのネズミ特有のにおい、またネズミの大群に遭遇、驚いても居られず一日がかりで本館西側の講堂に運搬し、ネズミ小屋の出来る迄講堂の一部に仮住居、其の内上段の圃場に杉皮屋根の2・30坪の掘立小屋に移転、今のネズミ御殿を思うと感無量です。

話は変わりますが、あれは昭和30年頃と思います。研究所にとっては大事件でした。隣接地の東中学校に過酸化水素の工場が進出してくると言う事です。三島市議会で工場誘致を可決し、市長が研究所に了承してくれと来所されました。

其の当時の東中学校は旧中島飛行機の熱処理工場の大きな鉄骨の建物で、其の中に教室や職員室・講堂も有り雨天体操場もあると言う大きな建物でした。それに日西化学が目をつけ過酸化水素の工場に建物敷地を譲渡方三島市に交渉、市議会で誘致可決、その為の来所でした。

さあそれからが大変です。田中先生、乙藤部長始め教官・事務職員一丸となつての進出阻止に立上りました。文部省、静岡県、三島市、市内著名人、市議会議員と日曜も返上、市議会議員全員の自宅から出先、田圃、山の上までと夜討朝駆、さすがの三等運転部長もダウン寸前と言う有様でした。そのかいあってか日西化学進出も立消となりました。此の経験が、後年コンビナート進出阻止の糸口になり反対運動がもり上り、阻止に成功したと自認して居ります。今研究所が静かな環境で快適に研究に没頭出来るのも、こうした

先輩教官の研究とは別の御苦勞を忘れてはなりません。老婆心ながら一言。

大失敗の巻

皇太子の御成婚披露宴に所長木原先生が御招待を受け、「丸岡君、前日プリンスホテルに宿り翌日宮城に行く。」と言うお話しでした。私は「明早朝お迎えに参ります。」と申上げ、当日は地理不案内の東京を先生に案内されて宮城にたどり着き、二重橋を渡り宮内庁正面玄関に先生をお送りしました。皇宮警察の御案内で私は主馬寮の駐車場へ、そして休息所で中食を戴き待機しておりました。宴が終り、所長を迎え御下賜の品々も車に載せて帰路につきました。所長が銀座に廻ると言われるので、銀座で所長を降し、駐車禁止のため私はぐるぐる廻っておりました。その中、所長を見失いましたので、裏通りに車を停めて徒歩で探しましたが見付きりません。あきらめて車に戻ると「ここは駐車禁止区域、すみやかに発車すべし」と言う警視庁の警告書が貼られていてびっくりしました。所長に申訳けないが帰ることに決めて横浜の木原生物学研究所に電話連絡を頼み、三島に帰りました。

一夜明けて翌日三島駅に所長を迎えに行き、両手一杯の荷物をもった所長に昨日の不始末をお詫びしました。ところがお叱りもなく無事でよかったと言われ恐縮しました。所長は丸岡君が迷い子になったと心配し、朝日ビール社長のロールスロイスで銀座周辺を2時間も探したとのことで、所長の沢山のお荷物は私へのおみやげでした。皇太子の御披露宴の御料理や御菓子を半分に分けて宮中の折箱をそのままに頂戴しました。それとは別に銀座の菓子折を頂きましたが、所長が銀座で降りたのは私の子供達のためそれを買うためだったのです。私はここに何と書いてよいか判らぬほど感激しました。

走馬燈

20年間は長いように思いますが、過ぎ去って見るといろいろのことが走馬

燈のように思い出されます。朝、車庫で水洗していると出勤途上の駒井先生からステッキを上げて「お早よう」とのお言葉を度々頂きました。こちらは気がつかず失礼したこともありましたが、旧帝大の学部長までなされた著名な先生からの御挨拶に恐縮致しました。また先生御夫妻は8月中は御殿場二の岡の別荘で過され、研究所の先生方が連絡に行かれたときなど私が車の中で待機していると、いつも先生や奥様がわざわざお迎え下さり、先生方と同席で御歓待をうけ感激しました。その先生も今はなく、謹んで小熊、田中、駒井、竹中、松村、リリエンフェルト各先生方の御冥福を祈り筆をおきます。

34. ねずみと三毛猫

土 川 清*

昭和26年（1951年）6月の雨の日に、札幌から運んできたねずみ達と、数日間の旅の相手をしてくれた「チビ」という雑犬を傍らに、三島駅の貨車の中で待っていますと、間もなく山下さんが、ホロをかけた小型トラックで迎えに来て下さいました。研究所に着くや、よほど煤けた顔だったのでしょいか、竹中先生が、まず風呂に入れとおっしゃって、栗原さん御夫婦が、早速用意してくださったことを記憶しております。

その当時、木造の本館1階の西端にあって、講堂として使用されていた部屋を、とりあえず、ねずみ飼育の場所にあてられ、木製ケージを床に並べて飼いはじめた。最初、大川君（現・文化庁会計課長補佐）が手伝ってくれましたが、庶務課におられた松原さんが、給水や給餌の作業をよく助けて下さいました。やがて4～5ヵ月後に、バラックの飼育小屋が建ち、そこで2冬を過してから、新しい飼育舎へ移ることになりました。

その飼育舎は、小熊先生を代表とする昭和28年度（1953年）の機関研究費によって建設されたのですが、それには小熊・駒井両先生はじめ、中泉正徳先生や安東洪次先生、また庶務部長の塚本さんにも大へんお骨折りをいただきました。お蔭でその頃の国内では、一応設備が整った、最初の飼育施設であったようにおもいます。内部の設備・経費や維持されていた系統などについては、その翌年の文部省科学研究費機関報告に、写真も添えて詳しく報告してあります。

さて私は、昭和29年までの約3年間を、研究所の寮で過ごさせていただきました。まだ新しい部屋でした。当時のままの呼び方を許していただくと、木

*変異遺伝部、主任研究官

村さん（現・集団遺伝部長）、遠藤さん（現・生化学遺伝部）、宮沢さん（応用遺伝部）と坂口さん（現・九大・農・教授）が、すでにそれぞれの部屋にお入りになっていました。とても物静かな親切な方ばかりでした。特に木村さんは、御自分のお部屋で仕事に熱中されていることが多く、いつも神経をピリピリさせておられた様子でしたが、周囲の者に対しては、何かと優しく気を配っていただいております。それは私が胃下垂で、食欲がなくお腹の具合も悪く困っていたことなど、未だに覚えていてくださることからもうかえます。

寮では宮内さんに、言葉では云い尽くせないほどに、大へんお世話になりました。皆が「おばさん」と呼んでいましたが、殊に食事と静かな環境づくりに、心血を注いでくださいました。ロールキャベツの味など今に忘れることができません。その頃研究所へ来ておられました柳瀬さん（現・九大・医・教授）のおすすめで、センプリを飲みはじめてからは、なお一層おばさんに御迷惑をおかけしました。駒井先生の奥様に、いつか「おばさん」と云わないで、「宮内さんとか奥さんと呼びなさい」と、御注意をうけたことがありましたが、とうとう寮に御厄介になっていました間、それを改めることができませんでした。

それから、忘れられないことがあるのです。ちょうど駒井先生が、三毛雄猫の成因に関する理論をお考えになっていたある時、突然きれいな籐の編み籠に入れられた猫を渡され、その飼育を命じられました。現在では、あちこちの実験室で、金属製ケージによる飼育は勿論のこと、繁殖も容易に行われるようになっておりますが、まだその頃は、ねずみ飼育のための金属製ケージすらありませんし、それに猫をケージ内飼育することなど、全く気づかないことでした。猫の飼育は初めての経験でしたが、排便は乾いた土のあるところを選んでするものだと思っていたから、土では埃もたちますので、木箱に砂を入れ、それを寮の私の部屋の上がり端において、室内で飼うこと

にしました。

猫は、もうほとんどふつうの親の大きさに育っておりまして、白地にボタンの花のような、褐色と黒色のマダラを浮かした、それこそSearleの“Comparative Genetics of Coat Colour in Mammals”という本に掲載されている写真にみられるものよりも、はるかに美しい三毛でした。三島の渡辺写真館につれて行き、逃げられないように、部屋を閉めきってもらって写真も撮りました。

私が部屋を離れるときには、窓は勿論のこと、ドアもロックしましたから、猫君は、外の景色すら見ることもできずに、来る日も来る日も、部屋に閉じ込められていたわけです。木箱の砂が濡れると、乾いたものと取替えてやりましたせいか、全く粗相はしませんでした。ただ爪研ぎをしますので、柱に大分傷がつかしました。餌はおばさんに御迷惑をおかけしました。私は特に猫が好きの方ではありませんが、夜はよく布団にもぐり込んできたり、上に乗ったりして、彼もだんだんに気を許すようになり、それだけに可愛さも増してきておりました。そんなある時、少し開いたドアの隙間から、まるでその機会の到来をねらっていたかのように、ただまっしぐらに飛び出ていってしまいました。早速駒井先生に、おわびに行きましたが、その折の先生のがっかりなさった顔が今も浮んでまいります。ねずみ飼いの臭いに、あきあきして逃げ出してしまったのでしょうか、後日、もとの飼主のもとへ、無事に戻ったという便りも聞かずじまいになりました。

寮には、ほかに林孝三先生、飯野さん（現・東大・理・教授）がお入りになり、名和さん（現・生化学遺伝部室長）と平さん（現・早大・教授）が、食事に来られるようになって、新しい雰囲気も生れ、夜には各自の部屋で、順番に輪読会をもったことなど、記憶のすみに残っております。

特に古いことを書くようにとの仰せに従い、昔々のとりとめないお話をしてみました。

35. 遺伝研発足当初の思い出

坂 口 文 吾*

田中義麿先生と御一緒に三島駅につくと、先に着任されておられた辻田先生のお出迎えを受け、丸岡さん運転の自動車が発足4ヶ月後の遺伝研に降り立った。

玄関とバルコニーばかりが立派な戦時中の富士産業株式会社の長い2階建木造が遺伝研の本館であり、廊下には粗い麻布のマットが敷れていたのが強く印象に残っている。私は駒井先生が部長の研究第3部（生理遺伝部）の辻田研究室に所属した。辻田先生は主に蚕の遺伝の研究を推進されておられたが、私の着任当初は遺伝研には未だ蚕を飼育するための養蚕室や桑園など準備中で、私は厚木の神奈川県蚕業試験場にゆき、辻田先生が保存されていた約100区程の蚕を飼育した。その後、養蚕室が出来上るまで、本館の一室を飼育室とし、私もそこに布とんを持ちこみ、蚕と共に寝起した。遺伝研の発足当初蚕の飼育で苦心したのは、桑園は植えたばかりで、葉を使えず、函南村の農家から桑を買って使った。稚蚕中は毎日リックを背おい遺伝研の北側にある東海道線のトンネルを2つくぐって摘桑に行った。トンネル内で特急に飛ばされそうになったことなど、思い出すと背すじが寒くなる。桑が大量にいる壮蚕期には毎日自動車です数時間かけて摘桑に行ったことなど今では想像もできないことである。

われわれが最初住んだ宿舎は本館のすぐ前に今でも建っている木造の長家の一角であった。そこには独身者ばかり6名おり、毎日の食事は6人分を1日交代で作った。未だ都市ガスもなく、総て薪を拾って来て、炊事をしたり、風呂も湧した。蚕の飼育期間の炊事当番のときは朝5時頃から起き出し、急

*812 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学農学部、教授

いで蚕に桑を与え、それから6名分の食事の仕度をし、さらに蚕の飼育や調査をし、そして昼の炊事等々と一日中目の廻るような忙しさであった。

当時京大で輪読のテキストに使っていたというタイプの謄写板印刷の小冊子を木村さんが紹介され、これでわれわれも輪読した。例えばMuller「The gene」とかBeadleの「Genes and Biological enigmas」など今でも覚えている。また毎週のセミナーも大変勉強になった。特に駒井先生のお話しは毎回印象深く、現在でも当時教えていただいたことが生かされている。当時は、Beadle and TatumのOne gene one enzyme説やMullerの放射線による人為突然変異の研究など華やかであった。

今から30年前、大学を卒業したばかりの若者達が遺伝研に集って、創立間もない研究所の建設とその発展に皆それぞれ努力した。その当時の研究者の中には現在木村博士の様な世界第1流の学者になられた方や、その他多くの人達は遺伝研で成長され、そして各地で日本の、さらには世界の遺伝学の進展の中心的役割を果たしておられ遺伝研の名声を高められた方々が多い。私はこれらの人達と遺伝研で17年間寝食を共にし学んだことをほんとうに誇りに思っている。

S. S. Rajan*

Thirty years ! A long period, and in the life span of an individual, the most productive. But in the history of an institution it is only a period of adolescence, the formative years. Nevertheless, the NIG during these years has taken giant chronological leaps in terms of achievements. This is neither the occasion, nor do I have the competence even to enumerate these achievements, outstanding as they are, but take this opportunity only to convey on this happy event my greetings and wishes for yet more spectacular achievements in the future. With three brief stays at the NIG, spaced at ten year intervals, I may be perhaps permitted to indulge in a few nostalgic recollections.

It was in the year 1951 when at the Division of Genetics, Indian Agricultural Research Institute, New Delhi, India, where I was on the staff, we had the good fortune to receive Dr. Kihara, and listen to his seminar organised by the Indian Society of Genetics. As an active member of the organising committee I came in close contact with him. Little was I to know then, that it was the beginning of the forging of a life long association, friendship and guidance. Indian geneticists, like their counterparts in rest of the world, were deeply aware of the significant contributions of their Japanese colleagues to modern genetics. But it was thrilling to listen to the dazzlingly brilliant personal presentation of Dr. Kihara, his wheat genome analysis, and to other bits of information like the exploitation of heterosis in silk worm antedating that in corn in the West, that NIG had been established, probably as the first institution solely for genetic research. I was among those young Indian geneticists who were fired with the aspiration, at least to visit, if not to work, in this famous institution which has come to be recognised as the "Mecca" of the geneticists all the world over.

It fell to my fortunate lot, in the year 1957, when I had the opportunity to spend about a year at the NIG as a Colombo Plan research scientist. In my academic as well as personal life this was a memorable

* Senior Adviser, Food and Agriculture Organisation of the United Nations, U.N.D.P. Office, P.O.Box 2048 (Alwiyah), Baghdad, Iraq. Originally: Division of Genetics, Indian Agricultural Research Institute, New Delhi, 110012, India.

year. On the first day of my arrival at Misima immediate rapport was established when I saw Dr. Kihara's working desk decorated by a framed photograph of both of us taken during his visit to India in 1951. The NIG housed in temporary buildings taken over from defense department was not the impressive and imposing structure it is now. Only the annex served as a 'hot lab' housing the gamma irradiation source and a few glass houses laid any claim to modernity in construction. But physical inadequacies, if any, were more than made up by the electric and dynamic working atmosphere. We were a small group working under Dr. Seiji Matsumura, the pioneer in radiation genetics, whom many of us sadly miss today. Thorough in his scientific work, gentle of personal manners, he infused in his group a spirit of comradeship and devotion, rarely seen now a days. A stickler to perfection in work he would not let anything less to pass thru. Broad was the sweep of Dr. Matsumura's thinking on the use of radiations in biology. It ranged from conventional mutation induction to imparting bluish sheen to pearls by gamma irradiation. To me this year was also academically very significant. Working on the radiation induced mutants of the sporophytically controlled self-incompatibility genes in the *Brassicas*, we could formulate a hypothesis of possible episomal nature of this gene.

Visits to other parts of Japan in the company of Dr. Kihara or Dr. Matsumura were general education by themselves. Introduction to the cultural aspects of Japanese life (complicated by my vegetarian food habits), to the temperate flora and fauna, unfamiliar to me as one from the tropics, were the fringe benefits. As we travelled along, it was a thrilling experience to be pointed out by Dr. Kihara the unique nature of *Metasequoia* or *Cryptomeria*.

The international nature of the working group added to the atmosphere. Professor Crow of Wisconsin, Dr. Warid of Cairo, Dr. Lilienfeld the resident researcher, and myself were bound, apart from scientific interests, by the English language. It was also my proud privilege to share with Dr. Lilienfeld the language polishing of the English version of NIG Annual Report and research papers by Japanese colleagues. Besides the widening of ones horizon that resulted from this undertaking, were those small and beautiful gifts from the authors in appreciation of these linguistic efforts.

Two major lasting impressions of this trip were the informality of the working conditions prevailing, and the high esteem in which the Japanese geneticists were held by the general intelligentsia, members of the public and the industry. For one accustomed to long drawn bureaucratic procedures I was surprised to see that purchase orders for the equipment I needed were placed on phone on the very first day of my arrival at the NIG, and were delivered on the following day. The freedom and encouragement given to the researchers to engage themselves in, besides the regular programme of the Institute, contractual research programmes sponsored by the industry or other organisations, was indeed impressive. Equally impressive was the fact that several geneticists not based in Misima, like Dr. Yamashita or Dr. Furusato, had collaborative research programmes running at the NIG. That limitations of funding or official sponsorship need not restrict research productivity was clearly indicated by the output, out of proportion to its small size, of that famous institution at Yokohama, the Kihara Institute for Biological Research, which had perhaps more part time honorary research workers than regular staff. The artistic touch of having foundation stone of this Institute embedded with pebbles representing the wheat genome is noteworthy.

The esteem in which the senior geneticists were held by their colleagues and erstwhile students was well in the oriental traditions and not new to an Indian, but alas fast disappearing in his own country. One was indeed struck by the reverence and courtesy extended to elder geneticists like Dr. Y. Tanaka, who was working as the Emeritus Professor at the NIG, or to Dr. Kihara, the director. While this esteem of the fellow geneticists is natural and is a measure of their professional standing, that from the general public is indeed rare. This author was the fortunate eye witness to the ovation accorded to Dr. Kihara at the public screening of the film on Karakorum Expedition, at the seedless water melon exhibition in Tokyo, as well as the grand reception given to him by the sugarbeet industry in Hokkaido. This is perhaps a measure of the genetics-consciousness of the Japanese public. The contribution of the NIG towards such public consciousness of what is considered as an exclusive field of biology elsewhere, is also praiseworthy. The periodic short elementary courses in genetics run

by the NIG for secondary school teachers is an innovation worthy of emulation by higher centres of genetic research elsewhere.

This, however, is not to imply that official recognition of the work of geneticists is wanting or delayed in Japan. The highest Imperial decoration of the 'Order of Chrysanthemum' bestowed on Dr. Kihara and Dr. Kimura is an evidence of this, if indeed any evidence were needed. Likewise, in company of Dr. B. P. Pal, the doyen of Indian geneticists, I was pleasantly surprised when he was extended, during his visit to Japan in 1968, the privilege of free internal travel facility as a foreign member of the Japanese National Science Academy. It was not the facility itself, substantial though it was, but the implied public recognition that touched us.

The second spell of stay at the NIG as a visiting scientist was a brief one of three months in 1968, but was long enough to appreciate the fast pace of the development of this Institute over the ten year period. New buildings, new research facilities, expanded research staff were all indeed very impressive, but I did miss some former colleagues like the late Dr. Matsumura, and others like Dr. Kondo, Dr. Sugahara, Dr. Sakamoto who had all moved out of NIG. I was also fortunate to be among the thousands of foreign geneticists who admirably acclaimed the best ever organised International Congress of Genetics, in which the NIG scientists had a dominant share. Though brief this visit was not without its academic rewards. In association with Dr. Fujii, the intricacies of the low relative radio-sensitivity of oil containing seeds were explored. Along with Dr. Lilienfeld the sterility accompanying the dextral and sinistral coiling of fruits in some legumes were suspected to be associated with reciprocal translocations, some evidence for which could be obtained.

The third visit in January 1978 was in the nature of a reunion. Such has been expansion of activities and facilities since the second visit, that a week's stay was too brief to get even a superficial acquaintance with the various activities. But it was special in its own way since the author was accompanied by his wife. Back home in India she was fortunate to receive in our home at New Delhi several NIG colleagues as our guests. Dr. Kihara, Dr. and Mrs. Tazima, Dr. Oka, Dr. Sakai, Dr. Oshima, Dr. Yamashita, to name a few. She couldn't wait,

therefore, to see for herself the famous institution her husband so frequently and endearingly went to refer to. Needless to say that we were overwhelmed and touched by the hospitality and affection shown to us. A sentimental and moving visit of homage, in the company of Dr. Kihara, Dr. Yamashita and Dr. Furusato, to the mortal remains of Dr. Matsu-mura enshrined in the cemetery, concluded this visit.

Perhaps the proud sense of belonging to the NIG manifests itself not so much when you are working there, as outside it. Particularly when one listens to, or learns of praise or recognition of NIG achievements from others. As for instance, the words of late Prof. J. B. S. Haldane when I visited him in India after my first stay at Misima, are still ringing in my ears. Observed Prof. Haldane, "Dr. Kimura is building a beautiful edifice on what I had laid as a clumsy foundation in population genetics". Likewise, is the sense of pride when a NIG colleague is praised or honoured in my own country, as for instance, when the highest scientific body, the Indian National Science Academy, honoured itself by electing Dr. Kihara as a foreign fellow, when contribution to the Indian sericulture by Dr. Tazima, who has advised the Indian Government on several occasions, is publicly recognised, when Dr. Oka's brilliant piece of evolutionary sleuthhound to study the wild rices of Jeypore in India is admirably acclaimed. No less is the feeling of comradeship that fills you when you meet a NIG colleague in a third country. It gives you an opportunity to spend an evening of nostalgic recollections, or update your information on the happenings at Misima, as I could in the company of Dr. Fujii in Rangoon and Dr. Yamashita in Rome.

Another happy reunion was in India when as the President of the Indian Society of Genetics I had the privilege to welcome many Japanese geneticists in New Delhi, most of them NIG colleagues, attending the SABRAO Congress sponsored by the ISG.

"We will meet again, some time, somewhere", said Dr. Kihara to us when we took leave of him at Misima in January, 1978. This was symbolic of the roving nature of his activities in retirement, and of the international nature of my duties with the United Nations Organisation. In this context perhaps were more welcome the farewell greetings of Dr. Oka. In the traditional Japanese style he said, "Mata Irashiyai", folding his hands in a traditional Indian "Namaste". Come again, be sure, we will.

ラジャン博士は研究所の創立10年以内に留学研修などのため滞在し協同研究を行った数少ない外国人学者の一人である。他に、米国からCrow教授、エジプトのWarid博士、台湾から胡兆華、(故)張文財両博士などがあつた。

以下にラジャン氏から頂いた御寄稿の大意を紹介する。題名にあるようにインドから始めて来られた同氏には、ここは理想的なすぐれた研究所と感じられたようであり、また同氏の接触した所員は人間味にあふれる学者であつた。

ラジャン氏が最初に逢つた日本人遺伝学者は1951年ニューデリーのインド農業研究所を訪問した木原先生であつた。1957年コロボ計画研究者として来所し(故)松村博士の下で放射線遺伝学の研究に従事し、木原先生からも色々御指導を受けた。特に十字花科植物の白家不和合性遺伝子の突然変異を研究した。1ヶ年の滞在中、木原・松村両先生などと日本各地に旅行し、またクロー教授やワリド博士とも会話を楽しんだ。当時の研究所は新設のアイソトープ実験室を除けば建物は粗末であつたが、皆が親切であり研究に必要な品物は電話をかければ次の日に届けられる能率の高さに驚いた。研究員の生活は自由で活気にあふれていた。

第2回目にラジャン氏が遺伝研に来たのは1968年東京で開かれた国際遺伝学会のときであつた。3ヶ月滞在し藤井博士と共に油を含む植物種子の放射線感受性を研究した。第3回目は1978年で、一度有名な研究所を見たいと願つた夫人を同伴した。木原博士らと故松村博士の墓におまいりした。ニューデリーには何人もの日本の遺伝学者が来訪したが、その多くは遺伝研からであつた。遺伝研の研究者とその業績はインドでは最も高く評価されている。さらにSABRAO会議の機会には多数の遺伝学者が参加したが、遺伝研の人達に逢うのは喜びであつた。遺伝研は私にとって最もなつかしいところである。(編集者)

The summer of 1957 is one of the most memorable of my life. It was my first opportunity to become intimately acquainted with life outside the Western Hemisphere. I made many lasting friendships, which have been renewed on subsequent visits. Mishima has become almost like a second home.

To Westerners in the 1950's, Japan was a country of contrasts. On the one hand its economy and resources had been devastated by war and its people had suffered terribly. It was the first to experience the atomic bomb, and we were determined that it must also be the last. In less than a century, Japan had catapulted from feudal isolation to major manufacturing and trading status. In many ways it was the most western of the countries of the Orient. On the other hand, it represented the romantic East -- the land of the chrysanthemum and the sword, of rice fields and tatami, of tea-ceremony and geisha, of the Tokaido road and Hiroshige's prints.

It was with such mixed expectations, and with enormous curiosity and eager anticipation, that I entered Japan. I was utterly captivated by the beauty of the countryside, especially the physical setting of Mishima and the view of Fuji; the rarity of the view in the humid summer made the few occasions even more memorable. But most impressive of all were the people -- at the Genetics Institute, on trains, along the roads, in the Hishi-ya. The warmth, the extreme generosity, the desire to put me at ease, the tolerance of my inability to speak the language and of many gaucheries -- all these I had expected, but in far lesser degree than the reality. Although I have been to Mishima several times since 1957, the memories of the first stay are the most vivid. My feelings toward the

* My title is patterned after "Knoxville: Summer 1915", the first part of James Agee's poignant novel, "A Death in the Family". It includes a poetic description of the summer days and nights in a climate very much like that of Mishima. Samuel Barber has used "Knoxville: Summer 1915" as the theme of a musical composition for soprano voice and orchestra, a favorite of mine.

** Laboratory of Genetics, 509 Genetics Building, University of Wisconsin Madison, Wisconsin 53706, U. S. A.

summer of 1957 are very much like those of Oliver Statler, described so beautifully in "Japanese Inn" (a book given to me by Dr. Kihara). I have the same pleasant memories of the Hishi-ya as Statler describes for the Minaguchi-ya.

My association with Japan had started when my student, Newton Morton, went to Japan to work for the ABCC. He wrote to me about a very gifted mathematical geneticist named Motoo Kimura and sent me some of his papers. Later Kimura came to the United States to study at Iowa State University and I encountered him by chance at a Genetics Society meeting in Madison. Because we already knew of each other, we quickly formed a permanent friendship that has greatly influenced both our lives. A year later Kimura came to Madison to complete his Ph.D. work. At that time we decided someday to write a book together.

During a trip to Japan in 1956 for the International Genetics Symposium, I made a brief visit to Mishima. The Annual Report of 1956 notes that I gave a lecture on September 2, but I have forgotten what I said. After this visit I determined to find somehow a way to stay in Mishima for a longer time. My trip the next summer was financed by the Rockefeller Foundation. I am particularly grateful to Warren Weaver, who was sufficiently impressed by the prospect of a joint book by Kimura and me that he recommended my support.

I was in Japan from June 30 to September 10, 1957, and almost all of the time was spent in Mishima. Although I did some research and wrote one article during the summer, most of the time was spent working with Kimura on the beginnings of our book. The progress was slow, but at the end of the summer we had a clear idea of what the book would eventually be. Alas, both of us became so busy with other things that the book was not published until 13 years later. It is now time for a revision and we are starting this year. This time we don't expect to take 13 years.

I was quickly impressed by the breadth and variety of research done at the Genetics Institute, particularly in view of its recent birth. A task that I accepted gladly was to review the English versions of the Research Reports; in this way I learned a great deal about the work being done. I also spent a great deal of time talking with different investigators. To cite a few examples: I discussed with Tazima his work on the high radiation-induced mutability in *Bombyx* as compared to *Drosophila* and

the differential sensitivity of different developmental stages; the whole technology of silkworm genetics was of great interest to me. I recall discussing with Sugahara the use of Haldane's method to estimate the total gametic rate of recessive lethal mutations in the mouse. With Oshima I discussed insecticide resistance, a subject of mutual interest. Dr. Kihara told me of his studies of wild relatives of domesticated plants, and I was pleased at the use of genetic trickery to produce and identify seedless, triploid watermelons; at that time no such thing existed in the United States, although the method later migrated across the Pacific. With Kondo I discussed physical aspects of radiation genetics. Oka had just returned from the Philippines and told me about rice breeding there. I enjoyed conversations with Matsumura and was saddened by his untimely death not long after. There were many others.

My most extensive contacts, of course, were with Kimura. I also enjoyed close associations with Sakai and his group. Almost every day I had lunch and tea with Kimura, Sakai, Iyama, and Narise. Sometimes we were joined by Warid, from Egypt, and Rajan, from India, and others. I especially enjoyed the kindly, scholarly Rajan. Those lunches were a source of wide-ranging conversations, partly scientific and partly general. I took a great interest in the research of Sakai's group and profited by discussions with them.

A highlight of my summer was a trip to Osaka to visit the laboratory of Dr. Kikkawa. I was impressed by the diversity of projects in his group, by the large number and high quality of his students, and by the way the group worked so effectively, despite crowded facilities and meager equipment. Before leaving Madison I had heard a rumor that Hirota had converted F^+ to F^- bacteria by acriflavine treatment; the rumor was greeted with some skepticism. I promised my colleague, Joshua Lederberg, to find out exactly how the experiments were done, and this I did. It is a tribute to Hirota's patience that he could explain the experimental details clearly enough so that, despite my total lack of knowledge of Japanese, I was able to tell Lederberg how to proceed. The repeat experiment in Madison was instantly successful and this led to Hirota's coming to work with Lederberg. His later work is, of course, well known to people in Mishima.

Another trip was to Hokkaido to meet with the late Dr. Kurabayashi.

and to attend the meetings of the Japanese Genetics Society. I was pleased to become acquainted with Matsuura, Makino, Haga, Matsuunage and many more at that time. During the meetings I presented the new discovery, by Yuichiro Hiraizumi, of the *segregation distorter* phenomenon. In Tokyo I had the chance to become acquainted with Dr. Moriwaki, later to become director of the Genetics Institute. At that time he was chairman of the Japanese Committee on genetical effects of radiation, while I served on the American counterpart. We discussed the work of the two committees.

A particular source of pleasure for me was the chance to meet two of the founders of modern genetics in Japan. Dr. Tanaka, although formally retired, still came to the laboratory regularly on his bicycle, and I can still close my eyes and see him pedaling along the road. It was also a privilege to visit with Dr. Taku Komai in Kyoto. I had long admired this great, but modest man and earlier had had the honor of entertaining him and Sakai as dinner guests in Madison. I remember Komai's telling me of his long experiences in genetics, both in Japan and in New York, where he was acquainted with the early *Drosophila* work at Columbia University.

I also want to mention my happy and long continued association with Dr. Kihara, and to thank him for permission to work in Mishima that summer. I was surprised and pleased to learn how widely he was known in Japan among the general public. He was very considerate of my welfare that summer and many times since, since it has been my good fortune to renew this acquaintance many times.

I want to end this set of personal remembrances with a mention of people outside the world of genetics. Particularly, I appreciated the generosity of many people in Mishima. There were the store-keepers who rented a bicycle and violin to me at extremely low rates and wouldn't let me pay what I thought was a fair price. The bicycle provided a way to go back and forth to work each day. The violin provided a chance to join in the group singing that was so popular in Japan; although I couldn't understand the words I could easily pick up the melodies and play them on the violin. Especially, there were the people at the Hishi-ya. Despite my efforts not to do so, I must have created all sorts of problems for these people because of my ignorance of Japanese ways. Nevertheless, despite an enormous communication barrier, we all became fast friends -- the owners, the maids, the bartender, the cook, the deaf woman who was

so skilled in non-verbal communication, the daughter with whom I played violin-koto duets and learned about "serious" Japanese music. I was deeply touched when virtually the entire staff of the hotel were at the station to see me off as I left Japan. I felt very much accepted.

I have been in Mishima again several times in recent years. The city has grown, there are many more cars, and the stores are larger and fancier. The Genetics Institute has grown in staff, and the wooden buildings have been largely replaced. The road leading up the hill has been paved. The Genetics Institute has become more and more known as a research center throughout the world. The Hishi-ya is now the western-style Mishima Plaza.

On most of my recent visits I have been accompanied by my wife, who has attempted to learn Japanese. There are now two of us to enjoy living in Japan. Despite the growth, the physical changes, the disappearance of many old customs, and the enormous economic advances made by Japan, we enjoy seeing the same people -- now old friends -- and adding to the store of happy, memorable experiences.

本稿の著者クロー博士はウィスコンシン大学の教授で、集団遺伝学の分野では世界的に有名な方である。同博士は遺伝研において木村資生室長（現集団遺伝部長）と協同研究を行うため、昭和32年（1957年）に日本を訪れ、夏の間、三島市に滞在された。宿を市内「ひしや」旅館（現在のプラザホテルの前身）にとり、稲葉自転車店で借りた中古自転車で毎日遺伝研との間を往復された。（写真24）

本稿はその頃の思い出を書かれたもので、当時の遺伝研の様子や「ひしや」旅館での生活、市民との接触などを好意あふれる筆致で記述しておられる。また、大阪や北海道への旅や、故駒井卓・田中義鷹の両先生、当時所長をしておられた木原均先生のことなども懐しく語っておられる。クロー博士はその後何回も遺伝研に来訪され、三島は自分にとって第二の故郷のようになったと言っておられるのは感銘が深い（編集者）。

38. 敷地の選定と其後のこと

下 島 儀 貞*

30年前の歴史的事実を想起す為には、其の根底をなす時代的背景を、改めて記憶の裡から拾わねばならないし、その背景を明確に認識しないと、真相を把握することは出来ない。

大東亜戦争終結の間もない頃だから、世相は混沌として帰趨に迷い、人心は荒廃して精神的寄り所もなく、占領軍司令部GHQの指令には、唯々諾々と従うことを余儀なくされ、或は住むに家なく、喰うに食欠く貧と餓の中から、早くも日本の将来に希望を持って、学問の道を極め高めんとして、立ち上った日本の遺伝学界の諸先生には、全く敬服の他はなかった。自己一身を省みず只管遺伝学研究所の設置を念願として、文字通り昼夜を分かたぬ活躍には、衷心より頭の下る想いであると言うよりは、寧ろ驚異でさえあった。

今回記念号を発刊されると承り、往時を回顧して、之等諸先生の熱烈な意気と、たゆまぬ努力、献身的な御活動こそが第一に書き残されるべきものと思う。

遺伝研創設当時私も関与したとは申すものの、之は飽く迄任務であって、上記の諸先生方の崇高な理念の尊さとは、比較にならぬ些細な御手伝いであって、物の数ではないことを羞しく思っている。

昭和20年8月終戦と同時に軍需省が解体して、戦前に在った商工省が復活した。この中に整理部と云う特異な組織が存在したが、之は戦争中陸海軍や軍需省が、業界に対して発した命令の後仕末を任務とし、就中航空機・兵器産業を、平和産業に移行させる仕事を持つ転換課と云うものがあり、私は此処に所属して、航空機業界関係を担当した。

* 〒174 東京都板橋区上板橋1-1-14; 当時商工省整理課長

現在遺伝研の所在地には、戦争末期中島飛行機谷田工場として、興業銀行の融資を以て急造した木造の真に粗末なものがあつた。

終戦となつて中島飛行機は一切の操業を停止し、GHQから解散を命ぜられたのであるが、昭和21年1月末この谷田工場が、GHQから賠償工場に指定され、「善良なる保全管理の下におくこと」を商工省が義務づけられた。建物および機械類の保管の為、管理人をおいたり、防錆油と拭布を調達する為の国費の節約と、民生安定を目的に鍋釜を始め生活用具の製造に、転換操業することをGHQに申請したが、何故か此の工場は許可に成らなかつた。之が後日現地紛争の重大原因の一つになつた。

昭和21年の春浅い或る日、商工省元総務局長であつた美濃部洋次氏（遺伝研に残る文献に美濃部亮吉氏とあるが、之は洋次氏の間違い。洋次氏は敗戦を機に責任を感じて退官され、自適の生活をして居た。）から私へ、退庁後美濃部邸へ立寄る様にとの、電話がかかつて来た。夜になつて参上して見ると、美濃部さんを中心に、数人の客が私を待っておられ、御紹介によつて田中次郎氏・木原均氏・古里和夫氏であることを知つた。用件は「軍需工場跡地を遺伝研として転用するのに、適当な所はないか」とのことであつた。田中次郎氏は、美濃部洋次氏夫人君子さんの義兄で、木原均博士と大学が御一緒の関係、また古里博士は田中氏と仕事上の関係があつたから、この問題を美濃部さんに持ち込んで、相談されたものであつた。そこで私は皆様の御希望を充分に承つた上で、数ヶ所の候補を掲げて説明し、その中から中島飛行機谷田工場と半田工場の二ヶ所にしぼり、地の利と自然環境から皆様は、谷田工場に白羽の矢を立てた。此の日が何日であつたか正確に記憶して居ないのが残念であるが、美濃部洋次邸の応接室での検討が、今日の遺伝研存在の基となつた事は、回顧して誠に感慨深いものがある。

それ以後専ら竹中要博士が私との連絡係となられ、文部省の宮山事務官清水局長とも接触しつつ、商工省内の方針を堅めると共に所管の名古屋商工局

に移牒して静岡県・三島市各当局および地元民の取纏めを促進し、一方GHQへ賠償解除運動を積極的に行い、又興業銀行に対し工場処分の延期を求め等万般の手配を行った。

一ヶ月程経ってからの事であるが、肩章を取りはづした海軍士官服を着た一見復員風（当時は此の言葉があった）の青年が数人の方を連れ、某政党员と名乗って商工省の私の机の前に立った。そして呶鳴る様に激越な口調で、谷田工場転用は絶対反対であると述べられた。その論旨は、戦時中軍の強権を以て農地を取奪したのであることと、工場は全然稼動し居らず遊休中であることの2つの理由から、無条件で、農民へ返還すべきであると云うことであった。工場が休業中であつたことは、雇傭の伸張拡大がないことや、運搬業を始め生活上の小売配給・理髪・洗濯等サービス業に全く無関係で、地元には何等の利益ももたらさない無用の長物に見えたに違いないし、この種の反感が相当根強いものになって居たことは、察するに難くない。段々話を聞く内に含む所もあることが判つて来たので私は、後日三島へ出向き反対の皆様と充分話合つて御理解を頂くこととして、御引取りを願つたのだが、私の趣意と即答を求めて仲々帰らない。余りの執拗きに遂に双方無言となり、睨み合つて深夜に及んでしまった。この様なことが三回あつて上司の方々に、大変心配かけたが、私にも信念があるから屈することは出来ない。その夏の暑い日私は三島市役所へ出張して原市長と会見し、農業は地平面を必要とすることは当然であるとしても、品種改良又分類育種等の学問・技術の力をかりて、質的進歩を目指す農業の立体化を考へて諒解に努められたく、況んや遺伝研は世界水準に在る日本の遺伝学の中心と成る国際的のものであり、広く全人類に貢献する使命を持ち、必ずや地元に対しても何等かの恩恵があると信ずるので、此の際大きな視野に立つて善処されんことを切望する。……と言つた工合の今更に顔から火の出る様な話し方をした覚えがある。

その内に市役所の周辺が急に騒がしくなつたので、2階の窓から外を見る

と、相当数の群衆が庁舎を取り巻き氣勢を揚げて居り、時々下見板へ投石して大きな音をたて、威圧を加へて来た。市長との会見を終えてから、私は地元の谷田へ向うことになっており、市長は事態を憂慮して、裏口から車に乗ることを奨められたが、私はその時考へた。窓ガラスを割らない様に気を配っておる人達だから、私に危害を加へることはあるまいと思ひ、市長の厚意を謝しつつ表口から出て、人波の中へ入って行き、私の所信を説いて理解を求めた。最初は罵倒と怒声ばかりだったが、やがて静粛になって聞いて頂けたことは非常にうれしく思ひ、また共感者も多数出来たことを信じた。もし裏口から外出して居たら、此の貴重な共感者を得ることが出来なかつたかも知れない。一瞬の決断が如何に大切な結果を生むことに成るかを、改めて知らされ、これに力を得た私は、谷田の農業倉庫の様な建物の前で、集つた多数の地元の方々へ、諄々と説いた。

この事があつて以来、東京へ押し掛けて来ることはなくなつたが、文部省の予算要求が仲々国会を通過しなかつたため、実現が延引して徒らに焦るばかり、地元の反対も一時は終息に見えたが、時日の経過と共に勢いを盛り返して来たので、これの説得に再参三島へ通つたり、敷地の一部を新制中学校用地に割譲することを考へたり、興業銀行や富士産業（中島飛行機の後身）への説明とか、前後措置の協議等に忙殺されて疲れ果て、時には投げ出して、誰かに代つて貰い度い様な氣に成つた事も幾度があつた。

然し遂に頑張り通して、創設に到る迄任務を続け得たことは、一重に木原・竹中両博士、遠くから声援を送つて下さつた古里博士等、美濃部洋次先輩達に支へられた賜物であつて、本当に倅せであつたと深く感謝して居る。

現 職 員 名 簿

(昭和54年5月1日現在)

氏 名	所 属	任用年月日	住 所
【あ】			
青木まゆみ	人類遺伝部	54. 1. 1	〒411 三島市大宮町2の3の22
秋山 啓剛	庶 務 部	44. 4. 1	〒419-01 田方郡函南町桑原216の3
芦川東三夫	変異遺伝部	36. 4. 1	〒411 三島市谷田夏梅木657の15
芦川 祐毅	応用遺伝部	35. 4. 1	〒411 三島市谷田御門411
安積 順一	人類遺伝部	53. 1. 1	〒411 三島市文教町1の4の60文教住宅2-102
天野 悦夫	変異遺伝部	41. 7. 1	〒411 三島市谷田城の内150遺伝研城の内宿舎
安藤 清美	庶 務 部	53. 4. 1	〒410 沼津市大岡1135の1
【い】			
五十嵐芳男	庶 務 部	49.12. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
石井百合子	集団遺伝部	39. 7. 1	〒411 三島市大宮町3の9の1
井上 正	変異遺伝部	52. 7. 1	〒411 三島市谷田押切1356の1
井上 政義	庶 務 部	38.12. 1	〒411 三島市谷田1419
井上 寛	遺伝実験生物 保存研究施設	53. 5. 1	〒411 三島市藤代町6の1 藤代住宅N-305
今井 弘民	細胞遺伝部	42. 3. 2	〒410-21 田方郡菰山町南條字犬間洞1421-17
井山 審也	応用遺伝部	33. 4. 1	〒411 三島市大宮町1の8の30
岩城 英一	庶 務 部	37. 9. 1	〒410-21 田方郡菰山町多田730の1
岩崎 久治	細胞遺伝部	49. 1. 1	〒411 三島市塚原新田16の1
岩田 英子	庶 務 部	42. 9. 1	〒411 三島市谷田136の70
【う】			
内田 茂治	庶 務 部	36. 2. 1	〒419-01 田方郡函南町柏谷128
梅沢 三郎	〃	48. 4. 1	〒411 三島市幸原町1の3の8
【え】			
遠藤 徹	生化学遺伝部	25. 4.30	〒411 三島市谷田138 市営アパート5号
【お】			
大石 達徳	庶 務 部	51. 4. 1	〒411 三島市谷田桜ヶ丘1124の92 みのり荘
大塚 春市	〃	50. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
大沼 昭夫	形質遺伝部	36.10. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
岡 彦一	応用遺伝部	29. 8. 1	〒411 三島市谷田東富士見1171の110
小川 恕人	生化学遺伝部	31. 9. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
沖野 啓子	応用遺伝部	36. 4. 1	〒254 平塚市幸町15の2

氏名	所属	任用年月日	住 所
荻野 歌子	微生物遺伝部	42. 6. 1	〒411 三島市河原ヶ谷字君ヶ沢441-10
鬼丸喜美治	遺伝実験生物 保存研究施設	24.10.31	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
【か】			
風間 勉	庶務部	51. 4. 16	〒410 沼津市三芳町5の21
賀田 恒夫	変異遺伝部	42.10. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
鎌野 尚子	庶務部	53. 4. 1	〒411 三島市大社町16の11
河西 正興	生理遺伝部	39. 4. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
河原 孝忠	応用遺伝部	29. 7. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
【き】			
木村 壱真	遺伝実験生物 保存研究施設	29. 4. 1	〒411 三島市小山7の6
木村 進	庶務部	51. 4. 1	〒411 三島市文教町1の4の60文教住宅3-103
木村 資生	集団遺伝部	24.11.30	〒411 三島市清住町7の24
【く】			
楠田 潤	遺伝実験生物 保存研究施設	54. 3. 1	〒411 三島市谷田押切1266の4
黒田 行昭	形質遺伝部	41. 6. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
【こ】			
越川 信義	庶務部	36. 8. 1	〒411 三島市富士ビレッジ25の7
米田 好文	遺伝実験生物 保存研究施設	53. 7. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
近藤 和夫	応用遺伝部	26. 1. 16	〒411 駿東郡清水町八幡225の5
【さ】			
斎藤 正己	応用遺伝部	35. 9. 16	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
境 雅子	人類遺伝部	47.12. 5	〒410 沼津市平町9の6
榊原 勝美	細胞遺伝部	34. 6. 1	〒411 三島市谷田夏梅木2023の4
定家 義人	変異遺伝学	43. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
佐藤 隆司	庶務部	35. 9. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
佐野 芳雄	遺伝実験生物 保存研究施設	50.11. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
【し】			
篠崎 一雄	分子遺伝部	53. 6. 1	〒411 三島市谷田桜ヶ丘1124の2
下遠野邦忠	々	47. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
【す】			
杉浦 昌弘	分子遺伝部	47. 7. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
杉本 典夫	応用遺伝部	37.11. 1	〒410-11 裾野市下和田762

氏名	所属	任用年月日	住 所
杉山 勉	生化学遺伝部	47. 9. 12	〒419-01 田方郡函南町上沢952の40
鈴木 和代	生理遺伝部	32. 4. 1	〒410-21 田方郡菟山町中51
鈴木 せい	庶務部	42. 4. 3	〒411 三島市徳倉5の10の25
【せ】			
関根 明雄	庶務部	28. 5. 19	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
【そ】			
添田 栄一	分子遺伝部	50. 11. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
【た】			
高田 佑子	形質遺伝部	47. 12. 1	〒411 裾野市稲荷164
高畑 尚之	集団遺伝部	52. 4. 1	〒411 三島市文教町1の4の60 文教住宅1-302
田島弥太郎	所 長	31. 12. 11	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
玉井 勉	遺伝実験生物 保存研究施設	26. 8. 16	〒411 三島市東本町2の3の8
田村 仁一	応用遺伝部	28. 1. 16	〒419-01 田方郡函南町大土肥上之段181の5
【つ】			
土川 清	変異遺伝部	26. 5. 1	〒419-01 田方郡函南町平井892の121
露木 正美	細胞遺伝部	32. 4. 1	〒411 三島市小山26
【な】			
中込 彌男	人類遺伝部	45. 8. 16	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
長澤 明子	庶務部	47. 10. 4	〒410-01 沼津市獅子浜193
名和 三郎	生化学遺伝部	28. 8. 1	〒410 沼津市花園町7の4
【に】			
西川 元雄	庶務部	24. 9. 30	〒411 三島市谷田1241の6
西村 昭子	遺伝実験生物 保存研究施設	49. 5. 16	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
西村 行進	微生物遺伝部	49. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
【の】			
野口 武彦	遺伝実験生物 保存研究施設	44. 4. 1	〒422 静岡市小鹿1の43の9
【は】			
原 登美雄	変異遺伝部	46. 9. 1	〒411 三島市文教町1の4の60 文教住宅1-102
原 雅子	〃	30. 6. 2	〒411 三島市文教町1の5の13
原田 和昌	〃	34. 4. 1	〒411 三島市文教町1の4の60 文教住宅2-302
原田 朋子	集団遺伝部	44. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
半田日露三	庶務部	48. 4. 10	〒411 三島市南田町5の4

氏名	所属	任用年月日	住 所
【ひ】			
廣田 幸敬	微生物遺伝部	48. 8. 1	〒411 三島市文教町1の4の60 文教住宅3-502
【ふ】			
深瀬与惣治	形質遺伝部	32. 8. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
藤井 太郎	遺伝実験生物 保存研究施設	25. 9.30	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
藤澤 敏孝	生化学遺伝部	49. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
藤島 通	応用遺伝部	39. 5. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
藤中美枝子	遺伝実験生物 保存研究施設	53. 4. 1	〒411 三島市北田町1の13
船津 正文	々	37. 5. 1	〒411 三島市谷田夏梅木654の17
【ほ】			
干場とき江	庶 務 部	48. 6. 1	〒411 駿東郡清水町徳倉1001
【ま】			
増田 治子	応用遺伝部	33. 2. 1	〒411 三島市中央町6の10
松嶋 陽子	庶 務 部	52.12. 1	〒411 三島市塚原新田149の2
松永 英	人類遺伝部	36. 4. 1	〒411 三島市谷田桜ヶ丘1067
真野 朝吉	庶 務 部	26. 4.16	〒419-01 田方郡函南町間宮875の4
丸山 毅夫	集団遺伝部	41.11. 1	〒411 三島市光ヶ丘6の6
【み】			
三浦謹一郎	分子遺伝部	44.11.16	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎
三田 旻彦	応用遺伝部	35. 7.20	〒411 三島市谷田1111 遺伝研構内宿舎
湊 清	形質遺伝部	42. 5. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
宮沢 明	応用遺伝部	24.10. 5	〒411 三島市藤代町12の13
【む】			
村上 昭雄	形質遺伝部	40.11.16	〒228 神奈川県相模原市上鶴間4丁目15の2
【も】			
森脇 和郎	細胞遺伝部	34. 4. 1	〒411 三島市文教町1の4の60 文教住宅3-504
【や】			
矢野 澄子	集団遺伝部	45. 4. 1	〒411 三島市谷田136の16
安田 成一	微生物遺伝部	51. 1. 1	〒411 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所
山口 真弓	生化学遺伝部	48. 4. 1	〒411 駿東郡清水町長沢34の12鈴木アパート202号室
山田 正明	々	40. 6. 1	〒411 三島市谷田城の内150 遺伝研城の内宿舎
山田 正夫	微生物遺伝部	53. 4. 1	〒411 三島市谷田503の1 吉田コーポ307号

氏名	所属	任用年月日	住 所
山本すみ子	庶務部	39. 9. 1	〒410 沼津市御幸町24の43
山本 勉	〃	45. 4. 1	〒411 三島市青木字高井道245の6
【よ】			
吉田 嵩	応用遺伝部	26. 1. 16	〒411 三島市谷田御門431の3
吉田 俊秀	細胞遺伝部	27. 4. 1	〒411 三島市谷田夏梅木665の31
【わ】			
渡辺 隆夫	生理遺伝部	41. 4. 1	〒411 三島市谷田1111 遺伝研谷田宿舎

旧職員名簿

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
【あ】			
秋山 芳雄	庶務部	24. 8.31~26. 1.31	〒411 三島市安久206-1
赤堀 良勝	応用遺伝部	37. 4. 1~37. 9.30	〒437-16 静岡県小笠郡浜岡町朝比奈1322
阿部 幸穎	生化学遺伝部	28.10. 1~32. 8.31	〒411 三島市光ヶ丘4589-3
有光 佳子	生理遺伝部	38. 8. 1~39. 3.31	〒213 川崎市高津区鷺沼1-23-3 鷺沼ヒルズ303
有谷 富夫	生化学遺伝部	44. 4. 1~46. 3.31	
安藤 梅子	庶務部	40. 4. 1~45. 3.31	〒420 静岡市北安東2-21, 37-3号
安藤勝太郎	〃	35. 2.16~37. 4. 1	逝去
安藤 由一	〃	43. 4. 1~45. 3.31	〒273 船橋市丸山1-2-13
【い】			
飯沼 和三	人類遺伝部	47. 4. 1~52. 1.31	〒420 静岡市漆山2-14 医師宿舎B 4
飯野 徹雄	微生物遺伝部	27. 9. 1~46. 4. 1	〒167 東京都杉並区上荻2-33-12
池永 満生	変異遺伝部	38. 4. 1~41. 7. 1	〒573 枚方市甲斐田町27-6
石津 純一	微生物遺伝部	38.11. 1~46. 7.16	〒281 千葉市稲毛海岸5-5, 公務員住宅24-302
石和 浩美	変異遺伝部	35. 4. 1~40. 2.28	〒187 小平市上水本町1715-7
石原 隆昭	細胞遺伝部	28. 8. 1~32. 5. 1	〒292 木更津市本郷1-4-2
伊藤 太郎	研究第2部	24. 9.30~27. 8.31	〒080 帯広市稲田町 帯広畜産大学生物学研究室
稲垣 栄一	形質遺伝部	32. 7. 1~35. 3. 1	〒733 広島市江波二本松1-4-4, 松月荘13号
今井 英夫	研究第1部	24.12.15~25. 4.30	〒593 堺市上野芝町8-356
今井 祥子(湯山)	生理遺伝部	36. 4. 1~38. 3.31	〒274 船橋市飯山満町2-419-29
【う】			
植田 紀年	応用遺伝部	34. 4. 1~37. 3.31	〒420 沼津市下香貫宮脇
【え】			
榎本 一夫	庶務部	36. 8.16~38. 6.16	逝去
榎本 雅敏	微生物遺伝部	37. 7. 1~50. 9. 1	〒700 岡山市津島中3-2-8
海老 武彦	生化学遺伝部	32. 9. 2~39. 9.30	〒505-03岐阜県加茂郡八百津町八百津4277-2
遠藤 晶子(鈴木)	庶務部	35. 5.27~39. 3.31	〒411 三島市多呂245-2
【お】			
大石 英恒	人類遺伝部	39. 7. 1~46.10.31	〒480-03春日井市神屋町713-8, コロニー公舎D-13
大垣 昌弘	研究第3部	24.10.31~26. 2.28	〒580 河内長野市千代田台町15-7
大島 長造	生理遺伝部	32. 5. 1~54. 4. 1	〒250 小田原市城山3-24-28

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
大友 端立	庶務部	36. 4. 1~39. 3. 31	〒735 広島市安芸町温品529-91
大谷内 亨	〃	42. 9. 8~45. 3. 31	〒870 大分市長浜町3丁目5-17
大山 亨二	〃	24. 8. 31~39. 10. 31	〒411 三島市並木1037-13
岡崎 敏(金崎)	〃	26. 4. 1~26. 8. 15	〒410 沼津市大平新城
奥山 文子(松原)	〃	26. 6. 16~30. 1. 31	〒136 東京都江東区大島6-1-5-935
小熊 捍	所長	24. 4. 28~30. 10. 1	逝去 (46. 9. 6)
小野 久雄	庶務部	24. 9. 30~30. 4. 30	〒001 札幌市北区北八条西5丁目中央1公務員宿舎12-42
乙藤 寛一	庶務部	28. 6. 1~33. 6. 30	逝去
【か】			
加地 早苗	研究第3部	24. 12. 15~26. 3. 31	〒606 京都市左京区北白川下池田町93
加藤 茂男	庶務部	43. 4. 1~46. 3. 31	〒921 金沢市平和町2-28-50
加藤 旻夫	細胞遺伝部	44. 5. 16~53. 12. 19	逝去 (53. 12. 19)
門脇 淳三	庶務部	24. 8. 3~35. 4. 30	〒680 鳥取市湖山町南4-101, 鳥取大学三浦宿舎W1-1
金森 茂	〃	40. 4. 1~43. 3. 31	〒339 岩槻市大字徳力字東506 東都住宅997
川島 恵一	〃	35. 7. 5~38. 10. 31	〒424 清水市折戸1135
【き】			
菊地 康基	人類遺伝部	40. 1. 16~45. 7. 10	〒565 吹田市津雲台5-18, D75-307
木原 均	所長	30. 10. 1~44. 3. 31	〒233 横浜市南区六ツ川町3-122-21
【く】			
工藤 政明	庶務部	45. 4. 1~48. 4. 1	〒020 盛岡市上田3-18-5 岩大宿舎
久保田 勤	〃	30. 6. 2~36. 6. 30	〒411 駿東郡清水町柿田62
窪田 信子(藪田)	〃	43. 4. 1~47. 11. 10	〒410 沼津市下香貫八重122-10
栗田 義則	細胞遺伝部	32. 6. 1~41. 4. 30	逝去 (45. 7. 31)
栗原 章	庶務部	24. 9. 30~47. 3. 31	〒411 三島市谷田1100-36
【こ】			
小泉 清一	庶務部	36. 6. 1~39. 4. 1	〒114 東京都北区西ヶ原3-43-5
小針 不美(宮田)	〃	31. 10. 1~36. 4. 30	〒419-01 田方郡函南町平井1248
駒井 卓	生理遺伝部	24. 12. 31~31. 11. 15	逝去 (47. 7. 9)
後藤 寛治	応用遺伝部	25. 1. 31~32. 12. 15	〒061-01 札幌市豊平区東月寒162-7
後藤 末子	庶務部	36. 4. 1~43. 3. 31	〒410 沼津市西椎路589-21
近藤 宗平	変異遺伝部	31. 1. 1~38. 8. 31	〒583 羽曳野市羽曳ヶ丘6-2-13

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
【さ】			
道祖尾宗親	庶務部	44. 3. 1~46. 3. 31	〒690 松江市西川津町688-4, 鳥飼宿舎207
三枝 孝之	農場	41. 9. 1~44. 3. 31	〒411 三島市徳倉1-20-12
酒井 寛一	応用遺伝部	24.12. 7~48. 3. 31	〒350-3 埼玉県比企郡鳩山村石坂, 鳩山ニュータウン23-2
坂口 文吾	形質遺伝部	25. 4. 15~41. 5. 31	〒814 福岡市西区豊浜1-5-16
阪本 寧男	生理遺伝部	29.11. 1~47. 1. 15	〒617 向日市物集女町中条24
桜井 進	生化学遺伝部	37. 8. 20~46. 2. 8	〒240 横浜市保土ヶ谷区岩崎町119-12
佐々木 元	変異遺伝部	36. 4. 1~37. 4. 30	
佐藤 笑子	庶務部	42. 4. 1~47.12.31	〒411 三島市谷田城の内150, 遺伝研城の内宿舎
佐藤 順子	〃	36.10. 1~38.12.31	〒411 三島市谷田東富士見町1159-62
佐藤 洋子	人類遺伝部	37. 4. 1~41. 4. 1	
佐野美津代(米倉)	生化学遺伝部	42. 4. 1~46. 9. 30	〒221 横浜市神奈川区松見町1-19-4, 藤和マンション106
佐渡 敏彦	形質遺伝部	35. 4. 1~42. 4. 30	〒260 千葉市穴川4-10-58
【し】			
塩田 浩平	人類遺伝部	51. 4. 1~53. 4. 1	〒606 京都市左京区岩倉中在地町19の2
篠田 友孝	〃	37. 4. 16~50. 5. 31	〒215 川崎市多摩区虹ヶ丘2丁目2-1-306
清水 邦夫	庶務部	33. 7. 1~36. 3. 31	〒814 福岡市西区鳥飼7-8-10
【す】			
菅原 努	変異遺伝部	31. 2. 16~35. 1. 31	〒607 京都市山科区厨子奥尾上町14
杉生 純義	庶務部	24.11.15~35. 1. 15	〒824 行橋市高瀬265
杉本 昌子	〃	32. 5. 15~42. 3. 31	〒411 駿東郡長泉町下土狩1394
杉山 信雄	〃	45. 4. 16~46. 1. 31	〒411 三島市八反畑129-4
薄 秀男(横山)	研究第2部	24. 9. 30~28. 3. 1	〒300 土浦市真鍋町4-5-2
鈴木 愛子(小島)	形質遺伝部	43. 9. 1~44.12.31	〒430 浜松市遠州浜2-7-301
鈴木 昭男	応用遺伝部	37. 4. 1~38. 6. 15	Great Western Sugar, Agr. Res. Center, Sugarmill Road Longmont Colorado 80501, U.S.A.
鈴木恵子(佐久間)	庶務部	36. 4. 1~39.11.30	〒272 市川市国府台5-26-56
鈴木 紀子(榎本)	微生物遺伝部	37. 7. 1~39. 6. 30	〒700 岡山市津島中3-2-8
鈴木 秀穂	〃	38.11. 1~52.12. 1	〒277 柏市根戸, 北柏第二住宅2-203
鈴木 正道	生化学遺伝部	40. 4. 1~44. 3. 31	〒411 三島市谷田夏梅木572-2
須原 悦子(天笠)	形質遺伝部	41. 9. 1~43. 8. 31	〒344-01 埼玉県北葛飾郡庄和町西親野井 神明702-2

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
【せ】			
瀬川与四郎	庶務部	27. 4. 1~32. 7.31	〒152 東京都目黒区大岡山2-10-38 大岡山宿舍CF-2
【そ】			
園田 順	細胞遺伝部	41. 5.16~46. 1.31	
【た】			
平 俊文	生理遺伝部	28. 8. 1~41. 3.31	〒338 浦和市大字町谷378
高杉 由紀	庶務部	35. 4. 1~45. 1.31	筑波大学体芸事務区
高橋 光六	細胞遺伝部	46. 4. 1~48.12.31	〒410-21 田方郡菰山町土手和田5
竹田 辰次	庶務部	40.12. 1~49.12. 1	〒256 川越市今福461 田園ハイツ3の401
竹中 要	細胞遺伝部	24.10.22~41. 3.17	逝去 (41. 3.18)
館岡 亜緒	〃	28. 4. 1~37. 6.30	〒115 東京都北区赤羽台2-2, 赤羽住宅RH203
田中 義麿	形質遺伝部	24.12.31~31.11.15	逝去 (47. 7. 1)
田中瑠美子(長谷川)	生理遺伝部	31. 4. 8~39. 9.30	〒278 野田市上花輪1434-11
田中 六男	庶務部	39. 4. 1~43. 3.31	〒001 札幌市北区北7条西9丁目 中央第二公務員宿舍2-204
玉手 茂男	〃	49. 4. 1~51. 3.31	〒133 東京都江戸川区鹿骨5-364-6
【つ】			
塚本多満留	庶務部	25. 4.30~27. 3.30	
塚本 盛平	〃	24. 6. 1~28. 4.30	〒277 柏市酒井根886-31
辻田 光雄	生化学遺伝部	28. 1. 1~46. 3.31	〒411 三島市谷田136-60
津田 誠三	〃	26. 4. 1~37. 2.28	
土屋よし子(宮沢)	庶務部	24. 7.15~33.10.31	〒411 三島市藤代町12-13
土屋 良弘	〃	39. 4. 1~41. 8.31	〒145 東京都太田区東雪谷2-11-3
土屋 公幸	細胞遺伝部	43. 4.16~49. 2.28	〒069-01 江別市南樹町1, 大麻第2アパート104号
常脇恒一郎	生理遺伝部	34.10. 3~40.11.15	〒606 京都市左京区岩倉中町228-60
鶴見 茂	庶務部	38. 6.16~44. 1.15	〒277 柏市中央2-10-16, 柏中央住宅402
【て】			
手塚 朝一	庶務部	48. 4. 1~51. 3.31	〒160 東京都新宿区大久保3-3-3-102
【と】			
外村 晶	人類遺伝部	36. 3.16~41. 3.15	〒166 東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-26-5
外村 泰子	人類遺伝部	36. 4. 1~37. 3.31	同上
【な】			
中野 浩子	庶務部	24.11.30~40.11.30	〒110 東京都台東区竜泉2-4-8, 大塚ビル303

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
成瀬 隆	応用遺伝部	37. 4. 1~37. 8.28	〒300 川越市笠幡5024-391
【に】			
西山佐代子(星野)	庶務部	45. 4. 1~49.11. 5	〒721 福山市西深津町272-2, 中国農試宿舍乙8-2
西山紀子(岩久保)	人類遺伝部	35.12. 6~47.10.31	〒248 鎌倉市材木座5-13-20
【ぬ】			
糠谷 実	庶務部	36.10.16~43.12.19	〒424 清水市折戸568-2
【ね】			
根津 光也	変異遺伝部	35. 3. 1~35. 4.30	〒939-13 砺波市花園町4-72
【の】			
野田 静子(高木)	庶務部	38. 4. 1~44. 9.30	〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯738-7
野村 要子	〃	35. 4. 1~37. 3.31	〒411 三島市東町6-15
【は】			
袴田 一枝	微生物遺伝部	39. 7. 1~44. 6.30	〒410 沼津市大岡1816-20
林 孝三	生化学遺伝部	28. 8. 1~31. 3.31	〒171 東京都豊島区目白4-10-24
林 善三	研究第1部	24.11.15~25. 8.28	〒433 浜松市根洗町西577
林 勝	変異遺伝部	41. 4. 1~44. 3.31	〒617 長岡京市開田4-19-6
【ひ】			
日吉 和子(芹沢)	応用遺伝部	34. 4. 1~37.12.31	〒411 駿東郡長泉町下土待西538-13
平泉雄一郎	集団遺伝部	35.12.19~42. 1.31	Dept. of Zoology, The Univ. of Texas, Austin, Texas 78712, U. S. A.
【ふ】			
福井悌二郎	庶務部	46. 4. 1~49. 4. 1	〒980 仙台市川内無番地, 川内住宅第1地区11-102
古市 泰宏	分子遺伝部	45. 4. 1~52. 1.31	Dept. of Cell Biol., Roche Inst. of Molecu- lar Biol., Nutley, New Jersey, 07110, U.S.A.
古里 和夫	細胞遺伝部	25. 1.31~28.12.31	〒431-12 浜松市館山寺町195 公社内
【ほ】			
堀 久子	人類遺伝部	41. 4. 1~46. 5.31	〒260 千葉市六川4-9-7, RC 301
本田 武夫	〃	37. 4. 1~37.10.31	長崎放射線影響研究所
【ま】			
町田 勇	形質遺伝部	27.12. 1~36.11.30	〒281 千葉市小中台町830, 小中台住宅7-101
松田 環(池田)	人類遺伝部	41. 3.16~46. 4.30	〒063 札幌市中央区大通西23, 円山ビル601
松原 尚躬	庶務部	24. 9.30~36. 8.15	〒136 東京都江東区大島6-1-5-935
松村 清二	変異遺伝部	28. 1. 1~42. 2.19	逝 去 (42. 2.19)

氏名(現姓)	所属	在職期間(昭和)	現住所又は連絡先
松本喜和子(門脇)	庶務部	24. 9.30~33. 9.30	〒260 千葉市弥生町1-170
馬淵 智生	変異遺伝部	40. 9. 1~41. 5.31	〒221 横浜市神奈川区西大口454-4, 沙蓮寺コーポラス 121号
丸岡 秀雄	庶務部	26. 2. 1~48. 4.30	〒411 三島市谷田雪沢173の80
【み】			
南口 豊高	庶務部	37. 4. 1~40. 3.31	〒862 熊本市渡鹿1-16-3-32
宮内 千枝	〃	26. 4. 1~52. 4. 1	〒411 駿東郡清水町玉川264-3
宮沢 正夫	〃	24. 6.23~34. 3.31	〒329-11 栃木県河内郡河内町下岡本3770-15
【む】			
向井 輝美	変異遺伝部	35. 7. 1~42.11.30	〒814 福岡市西区岐岡団地121-2
村松 晋	〃	36. 5. 1~36. 8.31	〒260 千葉市六川4-10-60
村松 正典	庶務部	45. 4. 1~47. 3.31	〒177 東京都練馬区富士見台3-63-20
【も】			
望月 君代	庶務部	32. 4. 1~38. 3.31	〒411 三島市南田町6-6
望月八代枝(島本)	形質遺伝部	38. 4. 1~41. 8.31	〒061-11 北海道札幌市東区南島山2-8, 島山南住宅1-402
森口 征雄	細胞遺伝部	40. 3.16~43. 3. 5	〒228 相模原市相模台5-7-20
森永 徳弘	庶務部	39. 4. 1~42. 9. 7	〒157 東京都世田谷区南島山2-8, 島山南住宅1-402
森脇大五郎	所長	44. 4. 1~50. 3. 1	〒154 東京都世田谷区下馬町6-12-11
【や】			
安田 徳一	集団遺伝部	41.10. 1~44. 9.30	〒281 千葉市小中台町830-7-503
山崎 常行	〃	46. 4.16~51. 4.30	〒814 福岡市西区田島1-1-332
山田 行雄	応用遺伝部	29.10.16~39. 3.31	〒300-31 茨城県新治郡桜村並木4-924-103
山田由貴子(田中)	生化学遺伝部	35. 4. 1~37. 3.31	〒413 熱海市緑ヶ丘27-23
【ゆ】			
湯原徳三郎	庶務部	47. 4. 1~50. 3.31	〒151 東京都渋谷区本町4-15-5
【よ】			
吉川 勲	変異遺伝部	39. 6.16~39. 8.31	〒859-06 長崎県西彼杵郡長与町高田郷2360-3
吉川 藤一	庶務部	34. 4. 1~36. 5.31	〒132 東京都江戸川区宇喜田町1929, 宇喜田マンション 605
米田 芳秋	細胞遺伝部	34.10. 1~44. 2.28	〒420 静岡市北2194-20
【わ】			
渡森 一	庶務部	46. 6. 1~51. 3.31	〒281 千葉市弥生町1-170, 東大西千葉宿舎2-302

注:旧職員名簿は、本記念誌の頁等の都合により、創立から現在までの30年の間に本研究所職員として勤務された方々のうち、定員内職員であった者を記載いたしました。

なお姓は、退職時のものです。

〔編集後記〕

本記念誌のため御多忙中執筆の労苦を惜まれなかった各位に対して編集者として深く感謝致します。この小冊子は「思い出」を中心として過去の記録を将来に伝えるため、研究所30周年記念事業の一つとして計画されました。

歴史は将来の発展の基礎を作るものです。編集者の未熟のため原稿をお願いする手紙も通り一遍のものでしたし、執筆者各位には批判的記述を遠慮された方が多いように思われます。しかし、それは言外に読みとることができます。読者諸氏に対して、はっきり書かれていないことまで読みとって今後の御参考にして頂きたいとお願いするのは、望みが大きすぎるでしょうか。

誰しも年月の経過が意外に速いことを感じております。30年の間に遺伝学はその範囲を著しく拡大し、内容も複雑になりました。今後、どうか皆様が種々の記録の保全に注意され、研究所発展の哲学を作って行かれることを祈ります。(岡)

遺伝研三十周年記念

——創設の頃の思い出——

昭和五十四年五月三十一日 発行

発行 三島市谷田 国立遺伝学研究所

印刷 有限会社 東海印刷

〒411 三島市谷田 国立遺伝学研究所
(0559-75-0771)